

成、引續住居仕罷在候。然る處往古より勤來候名主五郎兵衛と申者、延享二丑年三月十日願に付退散致し候跡、六代目年寄半左衛門儀同年同月十六日初て名主役に相成、同年閏十一月中町方御支配に被仰付、右半左衛門より代々名主役相勤罷在候。尤先祖五左衛門より當名主半三郎迄十一代、年數凡貳百拾ヶ年餘相續仕罷在候。

髮結床番屋  
間口八尺七寸、奥行貳間八寸棟高壹丈五寸。  
右髮結床番屋之儀は凡百ヶ年餘已前より有之由申傳、年月不相知。尤九拾年已前享保年中、三郎兵衛と申者所持仕候。已來度々讓渡、當時五郎右衛門と申者所持仕候。  
自身番屋  
右自身番屋之儀は當門前地面之内、店借番屋に御座候。  
誓願寺 淨土宗京知恩院末。  
以上乙酉書上

日輪寺門前

一 右門前町屋之儀は往古神田橋御門内に寺地有之候所、天正十九年自銀町邊之引地に相成、猶亦慶長八年當所之引地に相成候由、門前町屋起立之儀は元祿十五年三月中、寺社御奉行松平日向守様より御見分有之、門前町屋に御定被成下。武州豐島郡畷田領之由申傳候。

(町寺北)

一 町内片側南より北へ折廻し町屋にて、東西え五拾五間、南北え六拾三間三尺。  
一 往古より北寺町と唱來り候。  
一 日輪寺 時宗相州清淨光寺末。  
以上乙酉書上

東光院門前

一 東光院は明曆三酉年迄小傳馬町に有之、同年類焼に付當所之替地被仰付、其頃より町家建來、町名之儀は東光院門前と唱來申候。尤先年小傳馬町在院之節町門前有之候。  
一 町内 東西え三拾七間、南北え三拾間。  
一 但片側町。  
一 東光寺 天台宗東叡山末。  
以上乙酉書上

阿部川町

一 右町拜領町屋敷之儀は起立寛永十三年中、御小人衆大繩拜領地に被仰付、其後元祿九子年四月中町、家之儀御代官細井九左衛門様御支配被仰付、同年五月中町名淺草阿部川町と相改り候由。正徳三己年閏五月中、町御奉行中山出雲守様、坪内能登守様、松野壹岐守様御支配に被仰付由承傳申候。町内東西え九拾七間餘、南北え百四拾八間餘。

(名小内町)

(橋屋しこ) (橋合組)

一 町内小名  
中通り 新寺町より堀田原森下への往來直道なり。  
奥之原 新堀通りより一小路西にて中通りより北に入。  
馬方町 同斷中通りより南に入。  
西町 西寄りにて中通りより南に入。  
下ノ町 同斷北に入。  
一 新堀川 川幅貳間半餘有之、元祿五申年中より右川定渡請負人御座候。  
一 橋 長貳間半、幅貳間、組合 善照寺 心月院 龍寶寺 威光院 永見寺  
右寺院組合にて新き掛直修復等引請來、依之組合橋と相唱申候。尤橋際にこし屋五郎兵衛と申者有之候に付字こし屋橋と申傳候。  
一 石橋 長壹丈餘、幅九尺。  
右石橋之儀は寛政十年三月中、下谷三枚橋通り下水落口に付、立花右近將監様、酒井大學頭様、織田出雲守様三手爲頭取御世話被成、入用之儀は武家方、寺院、阿部川町組合にて割合差出申候。  
一 御高札  
正徳三年二月、御代官清野與左衛門様御支配之時始て御高札建候段被仰渡、阿部川町同所高原屋敷、池之端七軒町、右三ヶ所組合にて當所橋際に地所取極候處、町御奉行丹羽遠江守様、坪内能登守様御見分之上、同年九月中御高札相

(前名人領拜領屋町)

建、享保三年十一月、大岡越前守様坪内能登守様御掛りにて鐵炮御高札壹枚建漆、都合四枚、明和九辰年大火之節四枚共持退き、今以名主所持仕候。  
町屋鋪拜領人名前  
百五拾坪 三島彌平  
百三拾坪 岡田次郎助  
百貳拾坪 高崎助十郎  
百貳拾坪 伊内市平  
百貳拾坪 齋藤捨次郎  
百貳拾坪 津田兵左衛門  
百貳拾六坪六合 木村十助  
百拾三坪貳合 伊藤庄九郎  
百貳拾貳坪餘 伊澤龍二郎  
百貳拾坪餘 友野傳五郎  
百貳拾坪 鎌方彌次右衛門  
貳百三拾三坪 川村太四郎  
百三拾三坪貳合 池野谷藤内  
百貳拾坪 野崎金藏  
百四拾四坪 高根澤傳作  
百四拾坪餘 鳥羽甚吉  
百三拾三坪貳合 柳田政右衛門  
百三拾三坪貳合 金井次郎左衛門  
百貳拾坪 池之谷半五郎  
百貳拾坪 松崎准助



一百貳拾坪 佐藤定七  
 一百貳拾坪 松村喜一郎  
 一百貳拾坪 飯島彦三郎  
 一百貳拾坪 小倉專藏  
 一百貳拾坪 富士見御藏番若清兵衛組  
 一百貳拾坪 久松廣之助  
 百拾九坪八合五夕 鈴木藤十郎  
 百九拾坪三合五夕 石川吉五郎  
 百貳拾坪 長田七右衛門  
 百貳拾坪 伊倉爲助  
 百貳拾坪 坂本三一郎  
 百七拾坪 友野忠八  
 百貳拾坪 鈴木三卯八  
 百貳拾坪 池田三六八  
 百貳拾坪 石井十郎  
 百貳拾壹坪六合 中野傳八  
 百貳拾坪 堀口新次郎  
 百貳拾坪 柳山勘太  
 百四拾九坪 黒澤權之助  
 百四拾坪 御留守居倉橋五郎右衛門同心  
 百廿四坪 山本平作  
 百廿坪 須藤孫十郎  
 百廿坪 坪山忠八  
 九拾坪 鈴木文五郎  
 九拾坪 藤森源次郎

九拾坪 直井重作  
 九拾坪 水卷富三郎  
 九拾坪 大塚定十郎  
 百貳貳坪 中川三之助  
 百貳貳坪 松田佐兵衛  
 百四拾坪 内田曾平  
 百廿坪 石崎兵四郎  
 百廿坪 志賀岩之助  
 百廿坪 狩野輕十郎  
 百拾九坪六合 大木權右衛門  
 百拾五坪 彦坂平八郎  
 百六拾坪 小普請支配神尾豐後守組金集後  
 百八拾坪 志女谷勝次郎  
 百拾坪 中村利八郎  
 百拾坪 宗田八十吉  
 百拾坪 坂本文之助  
 百拾坪 御留守居曲淵日向守組同心組頭  
 百廿坪 柳田直次郎  
 百廿坪 小普請支配石川民部組  
 百廿坪 水越剛右衛門  
 百廿坪 藤田榮三郎  
 百廿坪 番場又之助  
 百拾五坪 豐田勇之助  
 百廿坪 落合鐵藏  
 百廿坪 御勘定留後 淺井金次郎

百廿坪 伊藤又藏  
 百廿坪 岩間龜吉  
 百廿坪 高津茂十郎  
 百廿坪 兼松彌次郎  
 百廿坪 牧田清五郎  
 百廿坪 松村惣兵衛  
 百廿坪 宮川金右衛門  
 百四拾坪 鈴木勝藏  
 百拾坪 志賀八重次郎  
 百八拾坪 花井寅吉  
 百拾坪 高津十四郎  
 百拾坪 鈴木金十郎  
 百拾坪 淺井九八郎  
 百貳拾坪 平野勘一  
 百拾壹坪四合 近藤庄吉  
 九拾坪 牧田彌太郎  
 百坪 番場金二郎  
 五拾坪貳合 落合嘉七  
 百貳拾坪四合 御目付支配無役  
 百坪 中川吉五郎  
 百坪 高谷團次郎  
 百坪 高谷龜巳之助  
 百拾坪 犬塚德五郎  
 百拾坪 須藤龜二郎  
 百拾坪 金子庄次郎  
 百拾坪 牛越東兵衛

百拾坪貳合 小普請世話後 石崎喜太郎  
 百拾壹坪六合 武井八五郎  
 百四拾壹坪六合 關根傳左衛門  
 百貳拾坪 表御坊主 鈴木永意  
 百拾五坪六合 内海友三郎  
 百貳拾坪 小普請支配佐野豐前守組 木村儀兵衛  
 百貳拾壹坪四合 宮本勝五郎  
 百貳拾壹坪三合 小鹽佐市  
 百貳拾坪 内田平四郎  
 百三拾坪 西川三左衛門  
 百貳拾坪 彦坂忠太夫  
 百四拾坪 田中伴右衛門  
 百四拾坪 鈴木小右衛門  
 百四拾坪 鈴木藤七  
 右役名記無之分不殘御小人方に御座候。  
 稻荷社  
 右起立は駿州阿部川と申處之鎮守に御座候處 此稻荷駿州阿部  
 阿部川の地名を襲ひしにや御小人川村太四郎先祖慶長年中之頃  
 當所拜領町屋敷に被仰付候節、同地面之移安置致、今に正  
 一位孫三稻荷大明神と神名有之候。  
 本山派修驗善明院 甚藏店に罷在候。  
 御褒美青銅貳拾貫文 權四郎之助  
 市藏



(藏市・助之鏡子孝)

右權四郎店市藏并兄鏡之助、右兩人にて實母き代え孝行を盡候段入御聽、文政二卯年閏四月廿一日、町御奉行岩瀬伊豫守様御勤役之節、御糺之上右市藏鏡之助兩人被召出、爲御褒美青さし貳拾貫文被下置、猶又上野御山内より青さし拾貫文被下置候。

髮結床番屋

東之方往還に有之候、間口七尺五寸、奥行一丈二尺。

右髮結床番屋之儀は先年願濟之上御高札見守番屋にて、凡百拾ヶ年餘に相成候由申傳候得共、年來相立候事故書留等無御座、當時持主七兵衛と申者に御座候。

同

北之方往還に有之候、間口八尺、奥行壹丈。

右髮結床番屋之儀は先年願濟之上建來、凡百拾ヶ年以前より有之候由申傳候得共、前書同様書留等無御座、當時彦七と申者に御座候。

以下乙酉書上

正行寺門前

一 右寺地起立は寛永二丑年、淺草元鳥越町にて地所拜領被致、其後正保二酉年閏五月中、當所之引地、古跡拜領地四百五坪之所、延寶七年未九月、御改之節書上候右地坪之内、門前町屋折廻し有之候得共、起立年代相分不申。尤町名正行

(町寺新端堀新)

一 寺門前と唱、古門前に付年期明け書替等無之。

一 町内西より東南之方之折廻し貳拾五間。

一 町内字新堀端新寺町と唱候。

一 新堀川 幅三間。

右川之義は定波請負人下谷小島町家主庄五郎相心得罷在候。

一 橋 横貳間半、堅貳間五尺。

但字門跡前より下谷通往還渡る橋、里俗きくや橋と唱。

右は淺草下谷邊寺院三十七ヶ寺持組合橋にて、最寄寺院之内年番相立、異變等之時分萬端取計候事。

一 正行寺 淨土眞宗東本願寺末。

以上乙酉書上

本立寺門前

一 右寺地起立は寛永十四年十一月中、淺草元鳥越町にて千六百坪拜領被致候由、其後正保三戌年五月中當所之引地、古跡拜領地之内門前町屋に有之候得共、起立之年代相知不申候。尤年期切替等無之、町銘本立寺門前と唱候。

一 町内東西之貳拾八間餘、南北之八間。

一 町内字一圓に新寺町と唱申候。

一 本立寺 日蓮宗遠州吉美郡妙立寺末。

以上乙酉書上

(町寺新)

御府内備考卷之十九 淺草之七

龍福院門前

一 右龍福院儀は正保元甲申年、谷寺町御用地に付當所之引地被仰付、其後正徳元卯年四月中、門前町家の儀奉願上貸續罷在候得共、先年度々類焼に付書物等焼失致し、年代起立等疑相分不申候。

但年季町家には無御座候。

一 門前町屋の儀表間口東より西之八間、奥行五間半壹棟、同東より西之七間三尺、奥行五間半壹棟、南より北之間口拾間、奥行五間半壹棟、都合參棟貸家建續罷在候。尤其頃より淺草龍福院門前と唱來申候。

一 町内小名 新寺町申傳候。

一 但武州豐島郡峽田領の由申傳候。

一 龍福院 新義眞言宗護持院末。

以上乙酉書上

了源寺門前

一 右門前町屋の儀は元和八戌年、谷野倉より當所之地所替被

(町寺新)

一 右寺地起立之年代は相分不申候得共、寛文八申年二月御改、其後延寶七年未九月御改之節書上候由、古跡拜領地八百九拾三坪之内門前町屋有之、起立年代相分不申候。右地面往古當所にて拜領被致候哉、替地引地に有之哉、舊記書留等無之相知不申候。尤町銘正覺寺門前と唱、年期切替等無之。

一 町内東西之貳拾三間半餘、南北之六間餘。

一 町内字新寺町と唱候。

一 正覺寺 日蓮宗池上本門寺末。

成就院門前

一 右寺地起立之年代相分不申、往古より於當所に拜領被致候哉、替地引地等にて當所之被引移罷在候哉、舊記書留等無之候由。尤古跡拜領地七百四坪且又門前町屋起立之年代相分不申候得共、右地坪之内町屋有之、町銘成就院門前と唱、年期切替等無之候。

一 町内 東西之十八間、南北之五間餘。

一 成就院 新義眞言宗大塚護持院末。

以上乙酉書上

御府内備考卷之十八 終



仰付、其後年代不知御願濟の上、境内町屋西の方面口六間、裏行八間、同東の方面口四間、裏行同斷建來、年季切替等無之、往古より古門前町屋と申傳、町名の儀は淺草丁源寺門前と相唱申候。同境内東の方より西北え折廻し貳拾九間半の門前町屋の儀は、明和二年二月中、寺社御奉行土井大炊頭様御勤役中奉願貸家建來、拾ヶ年季賃續町屋にて町名は前書同様に唱來候。

町内 東西え貳拾五間半、南北え拾五間。

但片側町屋に御座候。

町内小名 一圓新寺町と相唱申候。

但里俗片町とも申傳候。

了源寺 淨土宗増上寺末。

以上乙酉書上

觀藏院門前

一 右觀藏院起立の年代舊記は無之候得共、往古慶長拾六辛亥年中野屋敷拜領仕罷在候處、御用地に付所替被仰付、正保元甲申年中當所え引移申候由申傳、右門前町屋の儀は萬治元戊戌年中御願申上、表門左右に壹棟宛相建申候。寛文九酉年右表門南の方壹棟は相た、み置作事不仕、北の方壹棟は以前より有來の通建來申候由申傳、町名の儀は淺草觀藏院門前と唱來申候。

一 町内 南北え拾貳間、東西え六間、但表通り下水有之候。

一 町内小名 里俗に淺草新寺町と申傳候。

一 觀藏院 新義眞言宗大塚護國寺末。 以上乙酉書上

延命院門前

一 右延命院起立元和年中迄谷倉に有之、其後明曆三酉年三月中當所え替地被仰付、元文四未年三月中大岡越前守様え御願申上門前町屋に被仰付、其頃より町名淺草延命院門前と唱來申候。

町内 東西え拾參間、南北え六間。

但片側町屋に有之候。

町内 里俗新寺町と申傳候。

延命院 新義眞言宗護持院末。

以上乙酉書上

大乘院門前

一 右寺起立古跡拜領地表間口南北え拾八間半、東西裏行二十九間、坪數五百坪當地所拜領仕候。門前町屋の儀は明和六丑年中、寺社御奉行所松平伊賀守様御勤役中初度御願御免許に御座候。門より南の方四間、同北の方九間半、右は新門前町屋に御座候。

一 町内 南北間數拾參間半、東裏行參間半。

大乘院 新義眞言宗大塚護國寺末。

以上乙酉書上

萬福寺門前

一 右寺地起立は慶長年中小網町壹丁目にて拜領、無程田所町の内谷寺と申所にて替地、又三十三年立正保元甲申年中又候引地、於當所に七百坪拜領、其後延享元子年中、寺向爲助成寺社御奉行所へ被相願、門前町貸家建續の儀願の通被仰付、依之新門前町屋にて町名萬福寺門前と唱、拾ヶ年目切替奉願候。

町内 南北へ二十七間半餘、東西參間餘。

但片側町屋。

町内字 柳の稻荷横町唱。

是は正福院境内に安置柳稻荷社有之付、如本文里俗唱候。

御褒美鳥目拾貫文

家主政二郎店 喜太郎

町内銅職致し候喜太郎儀、祖父母の心に叶ひ孝心を盡候に付、四ヶ年巳前十一月二十一日、町御奉行筒井伊賀守様へ被召出、爲御褒美鳥目拾貫文頂戴仕候。

萬福寺 天台宗淺草東光院末。

以上乙酉書上

正福院門前

一 右寺地起立の儀年代相分不申候得共、慶長十六辛亥年より寛永の末迄野寺町と申者にて地面拜領致罷在候由、其後右地御用に付正保元申年、當所へ引地面古跡七百五拾坪拜領被仰付候由に御座候。門前町屋の儀は元祿十五年御願申上相建申候由に御座候。其節書留等焼失仕一切無御座候。但年季切替門前地には無御座候。

町内 東西間數拾壹間半、南北裏行四間半。

町内小名 新寺町と唱申候。

正福院 新義眞言宗大塚護持院末。

以上乙酉書上

新光明寺門前

一 右新光明寺の儀寛永十二年より當所に有之候趣申傳候得共、由緒書并に古書物等享保九辰年中類火の節焼失仕候に付、書留等無御座候。寶曆九卯年五月中、寺社御奉行阿部伊豫守様御勤役中奉願上御願濟に相成、門前町家建來、其頃より淺草新光明寺門前と唱來候。

町内 西より東の方え表間口七間半有之。

町内小名 一圓に新寺町と唱來候。

但武州豊島郡峽田領の由申傳候。

(町横荷稻柳) (荷稻柳)



一新光明寺 淨土宗京知恩院末。

以上乙酉書上

誓教寺門前

一 右町起立の年代舊記等無之候得共、以前矢ノ倉にて地所拜領仕罷在候處、御用地に付地替被仰付、正保元申年中當所に轉仕候由申傳、右年季門前町屋の儀は寛保二戌年中初て大岡越前守様御勤役中、拾ヶ年賃續仕度奉願上候處願濟に相成、其後年季明之節は追々願上建來申候。町名の儀は淺草誓教寺門前と唱來申候。

町内 南北え八間、東西え四間。

町内小名 里俗に新寺町と申傳候。

誓教寺 淨土宗京知恩院末。

以上乙酉書上

善慶寺門前

一 右門前町家の儀は寶曆四戌年中願濟相成、其後追々拾ヶ年季貸家賃續願上、願之通被仰付罷在候。

町名 北より南の方え表間拾七間、北より西え裏行三間半。

但片側町家に御座候。

町内字 新寺町と唱來候。

(町寺新)

一 善慶寺 但武州豐島郡峽田領の由申傳。法花宗池上本門寺末。

以上乙酉書上

妙福寺門前

一 右妙福寺儀開基文祿元壬辰年にて、舊記何方に有之候哉、書物等燒失致し相分不申候。寶曆七丑年二月中阿部伊豫守様寺社御勤役中、貸家賃續奉願上御願濟に相成、其頃より淺草妙福寺門前と唱來申候。

但年季明候節は追々願上候儀に御座候。

町内 南より北の方え表間口七間、裏行三間、西より東の方表間口八間、裏行三間半。

町内小名 新寺町と申傳候。

但武州豐島郡峽田領の由申傳候。

妙福寺 日蓮宗甲州身延末。

以上乙酉書上

蓮光寺門前

一 右蓮光寺起立の年代舊記無御座候得共、以前矢ノ倉にて地所拜領仕罷在候處、御用地に付地替被仰付、正保元申年中當所之轉仕候由申傳、右年季門前町屋の儀は元文三年年初て大岡越前守様御勤役中、拾ヶ年賃續仕度奉願上候處願

(町寺新)

(町寺新)

濟に相成、其後年季明の節は奉願上建來申候。町名の儀は淺草蓮光寺門前と唱來申候。

表門通り 東西え拾七間半、南北え四間半、横通り南北え拾九間半、東西え四間半。

町内小名 淺草新寺町と申傳候。

御褒美白銀五枚 八右衛門店甚右衛門娘

右門前八右衛門店甚右衛門娘やゑ儀、年來兩親え孝心を盡候趣御聞に入、去文化十四丑年十二月中、永田備後守様御番所え被召出御札の上、右やゑを爲御褒美白銀五枚被下置

猶又父甚右衛門之養老爲扶持生涯壹日に御米貳合宛被下置候。然る處右甚右衛門儀其後文政四巳年九月中死去仕候に付、其段御届申上候。猶又右母并娘やゑ儀當店を引越、當時同所阿部川町甚藏店に罷在候。

蓮光寺 日蓮宗甲州久遠寺末。

以上乙酉書上

吉祥院門前

一 右吉祥院起立の年代舊記は無之候得共、往古慶長十六亥年中野寺町地拜領仕罷在候處、御用地に付所替被仰付、寛永廿一甲申年中當所へ引移申候由申傳、右門前町屋の儀は其砌より願上建來候由申傳、町名の儀は淺草吉祥院門前と唱來申候。

吉祥院門前

一 右等覺寺門前儀は先年類火の節書物等燒失致し無御座候間、舊地何方に有之候哉、當所へ替地被 仰付哉相分り不

(町寺新)

一 町内 南北え八間、東西え五間半。

一 町内小名 里俗新寺町と申傳候。

吉祥院 新義真言宗大塚護持院末。

以上乙酉書上

榮藏寺門前

一 右榮藏寺儀往古田所町に有之、慶長年中谷寺町え替地に相成、御用地に付寛永年中又候當所え引地被仰付、其後正保二酉年朝比奈源六様、庄田小左衛門様御掛りにて御願濟の上門前町家建來、其頃より町名の儀は淺草榮藏寺門前と唱來候。

但年季門前町屋にては無御座候。

町内 北より南の方表間口拾六間、東より西の方え折廻し拾間。

但片側町屋に御座候。

町内小名 新寺町と唱來申候。

但武州豐島郡峽田領の由御座候。

榮藏寺 天台宗淺草新堀東光院末。

以上乙酉書上

等覺寺門前

一 右等覺寺門前儀は先年類火の節書物等燒失致し無御座候間、舊地何方に有之候哉、當所へ替地被 仰付哉相分り不



申候得共、表間口東より西の方へ拾參間、奥行北より南へ五間半、前々より建來有之候。

但年季門前町屋にて無御座候。

右同斷門前東より西の方へ表間口拾五間去天明八申年松平紀伊守様寺社御勤役中、奉願上御願濟に相成、其頃より淺草新寺町と町名相唱來候。

但其後追々年明の節御願濟に有之候。

町内小名 新寺町と申傳候。

但武州豊島郡峽田領の由申傳候。

等覺寺 淨土眞宗淺草本願寺末。

以上乙酉書上

六軒町

右町名の起候譯、草分人の名并町地に相成候年代、相知不申候。

但町内元地主共先祖の儀は東叡山開基慈眼大師御在世の節、御中間六尺相勤候者に有之由、同所御構東の方屏風坂と唱候所の近邊にて町屋敷拜領仕、屏風坂下六軒町と町名相唱、元祿十一寅年中大火の節類焼仕、御用地に被召上、三ヶ所にて代地被下置、淺草六軒町、下谷六軒町、神田六軒町と相分、尤賣買地に相成申候。

町内 東西へ六拾間壹尺七寸參分、南北西の方九間五尺七寸、東の方七間貳尺八寸、

(領御山叡東) (人除揮の堂山開野上)

但道幅半分共。町奉行御支配にて、東叡山御領に有之候。

公役御年貢差出不申、東叡山開山堂に相付候都て用向町役にて相勤申候。

上野御開山堂定式掃除人足相付置、尤三ヶ所家主共拾九人御役に罷出候節は、木棉藍天鷲絨脊に開山の開の字丸致し、襟に山と申文字相印し着用仕、并御別當所より御用挑灯御免有之候。

十月二日御開山會の節、御拜殿飾付并宮様供奉固等迄も仕候。

十二月十三日御開山堂御煤拂并同廿八日御松飾御勤申候。御開山堂御最寄出火の節は早速駈付、御立退の節御木像御興昇并御寶物等守護仕御供相勤申候。

正月十一日御開山堂御鏡開に付、御別當眞如院へ名主家主一同麻上下にて罷出頂戴仕、同二十八日名主并家主の内貳人宮様へ年頭御目見へ被仰付、三本入御扇子献上仕候。

上野屏風坂御門御預りにて、御門番人町内より差出附置申候。尤下谷六軒町の内表間口田舎間六間貳尺八寸、裏行南の方五間四尺五寸、北の方四間五尺五寸の地面壹ヶ所、屏風坂御門役屋敷と唱、古來より參ヶ所六軒町にて拜領仕罷在申候。

平岡修理神事舞大夫頭田村澤之助支配下、金毘羅大權現勸

(所ヶ三地代)

(町寺新)

一 町内小名 新寺町と申傳候。

但武州豊島郡峽田領の由申傳候。

等覺寺 淨土眞宗淺草本願寺末。

六軒町

右町名の起候譯、草分人の名并町地に相成候年代、相知不申候。

但町内元地主共先祖の儀は東叡山開基慈眼大師御在世の節、御中間六尺相勤候者に有之由、同所御構東の方屏風坂と唱候所の近邊にて町屋敷拜領仕、屏風坂下六軒町と町名相唱、元祿十一寅年中大火の節類焼仕、御用地に被召上、三ヶ所にて代地被下置、淺草六軒町、下谷六軒町、神田六軒町と相分、尤賣買地に相成申候。

町内 東西へ六拾間壹尺七寸參分、南北西の方九間五尺七寸、東の方七間貳尺八寸、

請仕有之候。

以上乙酉書上

蓮妙寺門前

一 右寺文祿二癸巳年矢之藏にて地所拜領仕、當所へ引地に相成候儀は慶長九甲辰年當所替地仕候。門前町屋の儀は寶曆四戌年中御免許に相成、年季門前にて南北拾七間、東西裏行四間壹尺、町人住居に御座候。

蓮妙寺 日蓮宗池上本門寺末。

以上乙酉書上

法泉寺門前

一 右町名の儀は文祿四乙未年、於矢之藏初て寺地拜領仕候處、其後右地所御用地に相成、正保元甲申年中當所へ替地被仰付、則境內千參百貳坪地所被下置候處、元文三年二月、門前町屋年季貸地の儀大岡越前守様へ奉願上候處、願の通被仰付、其頃より法泉寺門前と唱來候儀に御座候。

但當所へ替地被下置候より百八拾貳年、門前町屋建候てより八拾八年相立申候。

町内 東方表間口、裏行、南北參拾間、東西四間半。

北方表間口、裏行、東西拾間、南北四間半。

町内小名 里俗に新寺町と申傳候。

(町寺新)

御府内備考卷之十九 淺草之七 蓮妙寺門前 法泉寺門前 觀音院門前

一 法泉寺 日蓮宗池上本門寺末。

以上乙酉書上

觀音院門前

一 右觀音院起立、慶長十六辛亥年田所町より谷寺町へ替地被仰付、其後正保元甲申年中當所へ替地被仰付、其後年代不相知御願濟の上、境內町屋東の方南北へ間口拾壹間半、奥行五間半建來、年季切替等無之、往古より古門前と申傳、町名の儀は淺草觀音院門前と唱申候。外に南の方東西へ間口拾四間、奥行四間并東の方南北へ間口拾貳間、奥行四間、門前町屋の儀は元文三年、寺社御奉行大岡越前守様御勤役中奉願貸家建來、拾ヶ年季賃續町屋に御座候。町名の儀は前書同様に唱申候。

町内 東西へ古門前より五間半、年季門前分四間、南北へ折廻し參拾七間半。

但内古門前町屋裏門前通南北へ間口拾壹間半、東西へ奥行五間半、新門前町屋表門前通東西へ間口拾四間、南北奥行四間、裏門前通南北間口拾貳間、東西へ奥行四間、新門前町屋に御座候。

町内小名 里俗新寺町と申傳候。

觀音院 天台宗新堀東光院末。

以上乙酉書上

(町寺新) (前門裏・新・古)

一 町内小名 里俗新寺町と申傳候。

觀音院 天台宗新堀東光院末。

以上乙酉書上



欣淨寺門前

- 一 右欣淨寺起立、慶長十六年谷野倉に有之、其後正保元年申年當所替地被仰付、延享四卯年十月、大岡越前守様寺社御奉行御勤役中奉願貸家建來、拾ヶ年季賃續町屋に御座候。町名の儀は淺草欣淨寺門前と唱申候。
- 一 町内 東西へ拾六間、南北參間。
- 一 但内表門脇より西の方へ間口八間、奥行參間、表門脇より東の方へ間口八間、奥行三間。
- 一 右新門前町屋に御座候。
- 一 町内小名 里俗に新寺町と申傳候。
- 一 欣淨寺 淨土宗増上寺末。

以上乙酉書上

華藏院門前

- 一 右華藏院境内往古田所町に御座候處、慶長十六年谷寺町へ替地、正保元申年又候淺草當所引移申候。
- 一 町内 南北貳拾六間壹尺餘、東西貳拾間。
- 一 右坪數五百貳拾四坪壹合六夕。
- 一 町内小名 新寺町と申傳候。又七軒町とも相唱候。
- 一 華藏院 天台宗東光院末。

以上乙酉書上

西照寺門前

- 一 右西照寺儀は元和七百年御藏前裏通りに有之候處、右場所御用地に被召上、寛永十三子年當所え替地被仰付、其後正保年中御願濟の上門前町屋建來、其頃より町名の儀淺草西照寺門前と唱來申候。
- 一 但年季門前町屋にては無御座候。
- 一 町内 東西貳拾三間半、南北貳拾間半。
- 一 町内小名 新寺町と唱申候。又俗下谷稻荷町貳丁目とも申傳有之候。
- 一 但武州豐島郡峽田領の由申傳候。
- 一 西照寺 淨土真宗東本願寺末。

以上乙酉書上

正安寺門前

- 一 右門前町屋の儀は正保二酉年、御願濟の上門前町屋建來、其頃より町名の儀淺草正安寺門前と唱來申候。
- 一 但年季門前町屋にては無御座候。
- 一 町内 東西貳拾間、南北七間。
- 一 町内小名 新寺町と唱申候。又里俗下谷稻荷町貳丁目とも申候。
- 一 但武州豐島郡峽田領の由申傳候。

(町軒七)

(町寺新)

西安寺 淨土宗芝増上寺末。

以上乙酉書上

西光寺門前

- 一 右門前町屋の儀は正保年中、御願濟の上門前町屋建來、其頃より町名の儀も淺草西光寺門前と唱來申候。
- 一 但年季門前町屋にては無御座候。
- 一 町内 東西貳拾四間半、南北貳拾四間。
- 一 町内小名 新寺町と唱申候。又里俗下谷稻荷町貳丁目とも申傳候。
- 一 自身番屋 間口九尺、裏行貳間、往還在之候。
- 一 右自身番屋の儀は天明八申年中、御願濟の上建來申候。
- 一 西光寺 淨土宗京知恩院末。

以上乙酉書上

法福寺門前

- 一 右法福寺儀慶長六丑年舊地湯島邊有之、御用地に付寛文八戌年當所に引地被仰付、其後右門前町屋の儀寶永二午年御願申上、町家相成申候。
- 一 但年季門前町家にては無御座候。
- 一 町内南より北へ表間口貳拾八間、東より西へ奥行五間半壹棟、同東より西へ拾五間、奥行貳間半壹棟、同東より西へ

御府内備考卷之十九 淺草之七 西光寺門前 法福寺門前 東岳寺門前 滿泉寺門前

(町寺新)

貳拾參間、奥行貳間半壹棟、都合三棟御願申上、只今以賃地賃續致し罷在候。

以上乙酉書上

東岳寺門前

- 一 右門前町屋の儀安永八亥年、土岐美濃守様寺社御勤役中賃續奉願上、只今以追々御願申上、年季門前町家御座候。町名の儀東岳寺門前と唱申候。
- 一 町内 東西拾七間、南北五間。
- 一 町内小名 新寺町と唱來候。
- 一 但武州豐島郡峽田領の由。
- 一 東岳寺 禪宗野州富田大中寺末。

以上乙酉書上

滿泉寺門前

- 一 右門前町屋の儀は正保二酉年、御願濟の上門前町屋建來、其頃より町名の儀は淺草滿泉寺門前と唱來申候。
- 一 但年季門前町屋にては無御座候。
- 一 町内 東西六間、南北七間。



(町寺新) 一 町内小名 新寺町と唱來申候。但武州豐島郡峽田領の由。

以上乙酉書上

廣大寺門前

一 右門前町屋の儀は古門前には有之候へ共、年限不知貸續仕候。町名の儀淺草廣大寺門前と唱來申候。

但年季前町屋にては無御座候。

一 町内 東西拾貳間、南北五間。

一 町内 新寺町と唱來申候。

但武州豐島郡峽田領の由。

一 廣大寺 淨土宗淺草幡隨院末。

玉泉寺門前

一 右寺起立の儀は寛永元甲子年より當地所東西表間十八間、南北裏行三拾間拜領仕、元祿十一寅年中、寺社御奉行所右地所御改にて、四百八十坪餘と御定有之由に御座候。門前町屋の儀者延享四丁卯年六月中寺社御奉行所大岡越前守様御勤役中御願濟、年季門前町屋御免許に御座候。

一 町内 東西六間、南北裏行三間半。

以上乙酉書上

一 玉泉寺 法華宗甲州久遠寺末。

以上乙酉書上

本藏寺門前

一 右寺地并門前起立の年代は元和八戌年中、境内并門前町屋の分共於當所拜領致、則町名本藏寺門前と唱、替地にては無之、尤舊地書留等無之候。

但古跡拜領地に付年季切替等無之。

一 町内字新寺町と唱。

一 町内西東より北え折廻し六拾間餘、裏行折廻し九間。

但表通り三拾壹間餘、横丁貳拾九間。

一 自身番屋 間口九尺、裏行四間。

右は先年願濟にて相立候處、手狹に付建足願、文化十四丑年七月岩瀬加賀守様之奉願候處、同廿七日被仰付候。

東國寺門前

一 右寺地起立は慶長十八癸丑年地面拜領致候由、其後寛文八年御改の節書上候由、往古より當所にて地所拜領被致候哉、替地引地にて當所に罷在候哉、舊記書留等度々の類焼故相分不申由。門前町屋起立の年代相分り不申候得共、古

以上乙酉書上

(町寺新)

跡拜領地の内門前地にて、則町名東國寺門前と唱、年季切替等無之候。

一 町内字一圓に新寺町と唱申候。

一 町内東西之貳拾六間、南北之拾五間。

但折廻し門前地。

一 東國寺 禪宗曹洞派野州大中寺末。

行安寺門前

一 右寺慶長九甲辰年三月、從遠州相移、神田柳原誓願寺前にて間口四拾五間、裏行六拾間拜領仕、其後正保二乙酉年五月中、當所之替地被下置候。右地所町屋の儀は前書申上候通柳原に地所被下置候節、寛永六己年中御免許の由に御座候。尤延享年中迄は門前町屋寺社御奉行所御支配に御座候由、同三寅年中より門前町屋町御奉行所御支配に相成候由申傳、古門前町屋に御座候。

一 町内 東西間數四拾貳間五尺、南北間數五拾五間貳尺五寸。

但東西より北え折廻し七拾七間分、裏行九間。

町人住居にて東角より専光寺地境迄四十四間有之、片側町屋にて向新堀川に御座候。

一 新堀川 川幅三間。

右掘割の年代等の儀は、川邊請負人下谷小島町家主庄五郎

御府内備考卷之十九 淺草之七 行安寺門前

方に有之候。

(橋屋菊)

一 寺院組合橋 幅貳間半、渡り貳間五尺。

右は新堀川に相掛り下谷通より東本願寺前通へ相渡候。俗に菊屋橋と申候。

一 淺草新堀東本願寺前寺院組合橋、渡り貳間五尺、幅貳間半、右正保年中寺社御奉行松平出雲守殿御月番の節、橋近邊行安寺専光寺・東國寺・正行寺・宗圓寺・金剛院當時實相寺右七ヶ寺之御預け、向後橋掛替并修復等仕候様被 仰付候に付、七ヶ寺にて年番相立世話仕候。尤掛替入用金下谷廣德寺始新寺町通由原町宗福寺迄横町の寺地共都合三十九ヶ寺之割金、猶又阿部川町御小人衆三人より壹ヶ寺分出金、外に淺草材木町・花川戸邊横屋材木屋より右の橋車爲引候者共より少々宛出金にて相掛申候。尤掛替の節は御普請方之相願候て御見分の上、猶又橋普請入札爲致、易札の方之被仰付候。右小破修復且又橋近邊異變等有之節は、入用金は六ヶ寺并金剛院跡地拜領の人よりも月々鳥目貳百文づゝ掛錢仕置、諸般取計候事。

右御尋に付申上候。

一 常州願入寺旅宿 預り人 橋年番 家主太助 安 寺

一 行安寺 淨土宗京都智恩院末。 妙 心 坊

以上乙酉書上

御府内備考卷之十九 淺草之七 行安寺門前

三七九



專光寺門前

- 一 右寺慶長九甲辰年中、品川に於て表間口貳拾間、裏行三拾間拜領仕、其後馬喰町え引地に相成候。明曆三丁酉年正月類焼、猶亦當所え替地被下置候。右地所南北貳拾間、東西三拾間拜領仕、門前町屋の儀は寛永五辰年中御免許の由に御座候。延享年中迄は門前町屋社御奉行所御支配に御座候由、同三寅年中より門前町屋御奉行御支配相成候由御座候。
- 一 町内 南北拾七間、東西六間。
- 一 新堀川 幅三間。
- 一 右川掘割の年代等の義は下谷小島町家主庄五郎に方有之候。專光寺 淨土宗芝増上寺末。

以上乙酉書上

宗安寺門前

- 一 右門前起立は明和四亥年二月中、寺社御奉行松平伊賀守様御勤役中、諸堂爲助成拾ヶ年季賃屋建續奉願候得は、願之通被仰付、依之新門前町屋にて則寺名宗安寺門前と唱、尤拾ヶ年目切替奉願候。
- 一 町内 南北三拾壹間、東西三間半。
- 一 町内小名 新寺町と唱申候。

(町寺新)

(地舊堂間三十三) (地沼は古往)

- 一 宗安寺 淨土宗芝増上寺末。

以上乙酉書上

淺留町

- 一 右町名起立の儀は年舊候儀にて、申傳は勿論書留等も無御座、往古は此邊都て沼地にて年曆不相分、三十三間堂相立申候由申傳にて、其後寛永の度東叡山東下寺取廣の節、三十三間堂深川え相引ヶ、該地は下谷邊寺院當所え替地に相成候由申傳、淺留町の儀は元下谷山崎町壹丁目黒鉄方五十人拜領組屋敷大繩地にて、元祿十一寅年十月六郷伊賀守様御用地に被召上、同十二年月日不相知當所に於て替地三百八拾五坪被下置、元地并淺留町共願の上同年三月廿六日、町並屋敷に被仰付候旨秋元但馬守様被仰渡候段、水野權十郎様、六郷主馬様御申渡有之、同年九月三日町御奉行御支配に被仰付候旨、六郷主馬様御申渡被成、公役銀相納來、黒鉄方五十人にて所持仕來申候。且往古三十三間堂有之候節の申ならはせの由にて、都て此邊を堂前と俗に相唱申候。
- 一 町内 東西貳拾八間、南北拾參間四尺五寸。
- 一 新堀川 幅三間半。
- 一 右堀筋の儀は前々より觀世大夫助成定凌持に御座候。
- 一 淺留町南側向通り并新堀川西縁通り明地の儀、先年より朝鮮人來朝の節東本願寺旅館に相成候砌、南側向通りの儀は

(地用脚の時朝來使群) (來由の前堂稱俗)

諸向方御供養并馬牽場等に相成、新堀西縁の儀は右御用中御賄所、其外都て御用地に相成候由、書留等は無御座前々より申傳に御座候。

以上乙酉書上

坂本町

- 一 右坂本町の儀は東叡山領有之、下谷坂下町より替地に相成候由、名主方書留等先年類焼の節類焼仕候に付、替地被仰付候年代相知不申、地所貳ヶ所に相成居申候。
- 一 北の方壹ヶ所 東西凡廿七間程、南北凡拾三間程。
- 一 右隣町東之方往還并明地新堀川隔、西之方龍光寺門前、南之方武家方拜領屋敷、北之方松源寺并門前町眞龍寺。
- 一 南の方壹ヶ所 東西凡拾五間程、南北凡貳拾五間程。
- 一 右隣町東之方武家方拜領地、往來隔淺留町、西之方武家方拜領屋敷、南之方往來明地隔宗安寺境内、北之方乘満寺。
- 一 反別貳反拾歩、豊島郡峽田領、御檢地寛延三年九月、神尾若狹守様、曲淵豊後守様御改。
- 一 元寺社御奉行御支配町並之屋敷に御座候處、延享二丑年町御奉行御支配に相成申候。御年貢の儀は東叡山御目代田村權右衛門役所え代永にて上納仕來候。
- 一 町内 字三拾三間堂前と申傳候。
- 一 明地 新堀川端南北凡百三拾間程、東西三間半程、右明地

(前堂間三十三)

(領山叡東)

(前堂)

- 一 右正定寺起立の儀は慶長十八丑年寺地神田元岩井町邊に有之候由、寛永九申年中右地御用地に相成、替地下谷新寺町にて拜領有之候處、右地又々正徳四年御用地にて上地に相成、當地三拾三間堂跡九百坪餘代地拜領仕候。門前町屋の儀は元文三年大岡越前守様寺社御奉行御勤役中、正定寺堂舎修復爲助成御願申上、御免許有之候門前町屋に御座候。
- 一 但拾ヶ年季新門前町家に御座候。
- 一 町内 南北拾八間、東西五間。
- 一 町内小名 里俗に堂前と申傳候。
- 一 明地 新堀川端南北百三拾間餘、東西三間半餘。
- 一 右明地の儀は先年朝鮮人來朝の節、東本願寺旅宿に付右明地所え御用小屋等相掛、御賄中の物置場、御用人足御詰所に相成候由、右御用相濟引拂の節、右跡前々の通相守可申



旨其節御役人方より被仰渡有之候趣申傳へにて、右の旨に相心得、町役人共より前々仕來を以町内地借の者え右明地割渡爲相守置申候、依て地代等何方えも差出不申候。尤右明地え渡世の品差置候儀は、是又先年進喜太郎様御奉行の節、奉願上御差免有之候由申傳へ候。右何れも申傳のみにて書留等無御座候。

- 一 板橋 長東西え貳間半、幅九尺程、但らんかむ無之候。
- 一 右橋の儀は新堀川東西掛り、但合持御座候。
- 一 修驗雲龍院 本山派大久保大聖院配下。
- 一 正定寺 淨土宗芝増上寺末。

以上乙酉書上

松源寺門前

一 右松源寺地所拜領、起立年代相分不申候。同寺の儀は往古下谷車坂下邊に寺地拜領有之候處、寛永年中右地御用地に相成、當地にて三拾三間堂跡八百坪餘拜領仕候。門前町屋の儀は往古車坂下に罷在候節より御願濟、古門前町屋に有之由申傳へに御座候間、御願濟年代相分不申候。

- 一 但門前町屋、松源寺表門南北左右并裏門より南え
- 一 東の方門前町 南北廿四間、東西五間。
- 一 西の方門前町 南北拾三間、東西五間。
- 一 但右兩門前町共古門前町屋に御座候。

(前堂間三十三)

一 町内小名 三拾三間堂前と申傳へ候。
- 一 明地 新堀川端通南北百三拾間程、東西三間半程。
- 一 右明地の儀は先年朝鮮人來朝の節、東本願寺旅宿に相成候節御用地に相成、右明地え御賄御用物置場其外人足詰所等の御小屋場に御座候由、御用相濟御引拂跡、前々の通町内え被仰付候由申傳を以、町役人方にて地借の者え割渡相守罷在候地に御座候。依之何方えも地代等差出し不申候。
- 一 但右明地え渡世の品差置候儀は、先年進喜太郎様御道奉行の節、奉願上御差免を以差置申候由、是又申傳而己にて書留等無御座候。
- 一 板橋 長貳間、幅八尺、但らんかむ無御座候。
- 一 右橋は新堀川東西え掛、橋普請掛替等新堀川定凌持。
- 一 松源寺 曹洞宗田原町大松寺末。

- 一 以上乙酉書上

龍光寺門前

一 右龍光寺儀は高野山龍光院末にて、往古當地に三拾三間堂有之候節は同寺儀は別當に有之候由申傳へ、龍光寺起立相分不申、門前町屋の儀は年代相分不申、寛永年中迄當地に三拾三間堂有之節、右境内御用地に相成候に付、當龍光寺儀は當地にて御除地八百坪餘拜領有之候に付、三拾三間堂境内に住居有之候者共當寺境内え引移住居罷在候。古門前

(當別の堂間三十三)

町屋にて御願濟年代相分不申候。尤門前町屋住居有之候者、寺社御奉行所の御支配に有之候。其後享保年中門前町屋に住居有之候者共は町人有之候間、以來町御奉行所御支配に相成候段、大岡越前守様御勤役中 被仰渡有之候。御願濟古門前町屋にて御座候。

- 一 町内 東西え拾八間、南北拾間。
- 一 但表門構間數相續申候。
- 一 町内小名 三拾三間堂前と申傳候。
- 一 但武州豐島郡峽田領。
- 一 龍光寺 古義眞言宗高野山龍光院末。

以上乙酉書上

遍立寺門前

一 右遍立寺起立相分不申、往古寺地外櫻田邊に有之候由、年代不知、其後下谷車坂下にて替地拜領有之、元祿年中御用地に相成、當所三拾三間堂跡にて代地被下置候。尤元祿十二卯年門前町御願濟、其後安永元甲申年九月七日、寺社御奉行阿部飛驒守様御勤役の節、御調の上猶又御願濟門前町屋に御座候。

- 一 但古門前町屋
- 一 町内 南北拾壹間半、東西十二間半、南の方裏行六間、西の方裏行五間。

(前堂間三十三)

(前堂間三十三)

一 町内小名 三拾三間堂前と申傳へ候。
- 一 但武州豐島郡峽田領由。
- 一 遍立寺 淨土眞宗東本願寺末。

以上乙酉書上

光感寺門前

一 右門前町屋の儀は慶長十巳年中、神田明神下にて寺地拜領被仰付、門前町屋起立之儀は寛永七午年以來之由申傳有之、其後明曆三酉年正月十八日燒失致し、同年七月朔日引地に相成候以來古門前町屋に有之、武州豐島郡峽田領之由に御座候。

(町寺新)

一 町内 南北拾六間、東西貳拾五間。
- 一 右寺表門より南の方え間口拾九間、裏行拾間并北之方古門前より西え間口貳拾三間、裏行拾間、右貳ヶ所共同寺新門前町屋立跡。
- 一 但此儀寶曆五亥年六月中光感寺御願濟、拾ヶ年限り新門前町屋賃續來候處、寛政七卯年年季明之節、猶亦賃續仕度段御願申上候へ共御願濟無之、同八辰年五月中、寺社御奉行脇坂淡路守様御懸りにて町屋取拂被仰付、其後未空地に有之候。
- 一 町内小名 新寺町と唱候。
- 一 光感寺 淨土宗芝増上寺末。



源空寺門前

以上乙酉書上  
右は明曆三酉年迄湯島村に在院、同年類焼に付此地引移、湯島にても門前町家有之候に付、當時門前町家古門前と唱來申候。  
一 町内 東西四拾七間貳尺貳寸。  
一 源空寺 淨土宗京都知恩院末。  
以上乙酉書上

燈明寺門前

以上乙酉書上  
右燈明寺者先年駿河臺に在之、當地引移候年曆不知、類焼之節書物等焼失仕候。尤門前之儀は燈明寺門前と唱來候。  
但年季門前にては無御座候。  
一 町内 東西四拾五間四尺。  
一 町内小名 燈明寺店と唱申候。  
一 燈明寺 天台宗東叡山末。  
以上乙酉書上

幡隨院門前

右門前町家之義は地頭幡隨院拜領地之内、町家に相成候起

錢役

立之年代相知不申候。當所前町家之義は往古より活弁地にて有之、永代譲り渡等仕來候にて、右讓渡之節は幡隨院之願を差上、御開濟之上讓渡等仕來候事。又地頭幡隨院之義は年貢と唱候ては差出不申、役錢と申月々差出申候。右門前町家名目之義は古來より幡隨院門前と唱來申候。右幡隨院起立之儀は最初慶長九甲辰年於神田臺拜領仕候。今駿河より十五年同元和三己年下谷轉地被仰付、端の由夫より目萬治二己亥年今之地え轉地被仰付候事。  
一 町内 南北八拾四間三尺、東西四拾間。  
一 幡隨院 淨土宗京都知恩院末。  
以上乙酉書上

新鳥越町

以上乙酉書上  
一 峽田領新鳥越町と唱申候。  
一 町名之起は正保二酉年中、元鳥越町より替地にて引來り、新鳥越町と申候。不殘町方支配にて、御年貢地に御座候。  
一 町内東側凡三百拾間、西側凡貳百四間、南にて凡貳拾三間、北にて凡百七拾間。  
一 屋敷反別八町壹反三畝四歩。  
一 御入國已來御料所にて平岩右膳御代官所。  
一 檢地帳延寶元丑年、野村彦太夫様御檢地。

町内荒川入堀附に御座候、南より西へ廻り有之堀幅五間。町内小名  
一 桐屋横町 鳥越三丁目に有り。  
一 林檎長屋 同三丁目裏に有り。  
一 正法寺横町  
一 松葉長屋 同貳丁目西裏に有り。  
一 新鳥越橋 長七間、幅貳間。  
一 石橋 長六七尺。

右町内貳丁目、三丁目西側横町往還より日本堤え渡る石橋に御座候、里俗紙洗橋と唱申候。  
一 高札場 壹ヶ所新鳥越町南の方より入口に建有之候。  
一 字砂利取場跡畑屋敷三反壹畝六歩。  
一 右は新鳥越町壹丁目家主喜八母こと所持いたし罷在、家作之儀は屋鋪御改え御願申上候儀に御座候。  
家持 新鳥越町三丁目 田中 甚右衛門

右田中甚右衛門儀元祿元辰年より當町家持にて相續致罷在候處、文化七年正月申より御成御場所御傳板被入置候御藏預り人に御鳥見方より被仰付、年々金貳百疋宛頂戴仕罷在候處、文政元寅年八月中、於御鷹野役所、御傳板年來世話いたし奇特之取斗有之候に付、子孫迄苗字可相名旨小笠原近江守様え被仰渡候段、古川山城守様被仰渡候趣、大貫次右衛門様御申渡有之候。

役緋取板傳御

右田中甚右衛門儀元祿元辰年より當町家持にて相續致罷在候處、文化七年正月申より御成御場所御傳板被入置候御藏預り人に御鳥見方より被仰付、年々金貳百疋宛頂戴仕罷在候處、文政元寅年八月中、於御鷹野役所、御傳板年來世話いたし奇特之取斗有之候に付、子孫迄苗字可相名旨小笠原近江守様え被仰渡候段、古川山城守様被仰渡候趣、大貫次右衛門様御申渡有之候。

名主 藏

右名主兵藏儀正保二酉年中迄元鳥越町に名主役いたし罷在候處、同年當所之替地被仰付町内之者共一同罷越、同町貳丁目西側南角表間口田舎間貳拾間半、裏行三拾六間壹尺五寸之地所、其節之草創より所持いたし、當時住居仕罷在候。先祖之儀は度々類焼にて舊記等焼失仕相知不申、寶永年中より代々相續相知申候得共、右己前之儀は申傳而已に御座候。且寺過去帳先年大水之節水腐仕、是以相知不申、古書物古器物等無御座、當兵藏町方肝煎役文化十四年七月中町奉行所にて被申付候。文政六未年十二月中於御鷹野役所、御成御場所御用之節野羽織着可用仕旨、水野出羽守様被仰渡候段、遠山左衛門尉様被仰渡候趣、中村八太夫様御申渡有之候。  
一 熱田明神社 神主茅根河内。  
以上乙酉書上

山谷町

町名之起は舊記等焼失仕相知不申候。村内より分り町方に相成候儀は、正徳三己年閏五月相改り候旨申傳候。尤當時町方分矢張御年貢地に御座候。  
一 家作御免地反別三町四畝六歩。  
一 町内南北え東側凡八拾五間、西側百六拾貳間、東西凡百五



(屋長箱重) (町橋汲水)

拾五間、此内東禪寺門前は別帳に相成申候。  
御入國已來御料所に御座候。當時中村八太夫當分御預り所にて町御奉行御支配御座候。  
峽田領と唱申候。

町内小名  
重箱長屋 町方西裏にて、長屋に形重箱のごとく角なるを以て唱申候。

水汲横町  
高札場 壹ヶ所、在町とも兼用候て、場所は山谷淺草町之北方に有之候。

拜領地總坪數五千六百拾壹坪餘 御持箇頭青山主水組 同心大細組屋敷足地。  
東西五拾間三尺餘、南北百七間貳尺。  
右地所萬治元戌年中足地に相成候趣、同所地守久三郎、五郎兵衛兩人申立候。

(中田谷山)

但里俗山谷田中と相唱候。  
右坪數之外田地有之候。  
以上乙酉書上

山谷東禪寺門前

一 東禪寺門前町家の儀は寶永七寅年三月廿五日、寺社御奉行三宅備前守様、本多彈正少弼御立會にて門前町屋敷御免被仰付候。

(來由の町工大四)

一 町内南北に拾八間、東え八間貳尺。  
此坪數百五拾坪。  
一 東禪寺 禪宗曹洞派淺草新寺町祝言寺末。  
以上乙酉書上

四大工屋鋪

一 右は元大工町・南大工町・神田横大工町向所暨大工町四ヶ町より、牢屋鋪え御仕置者の御用有之候節大工差出申候、右細工爲場所拜借被 仰付候由、依之字四大工屋敷と唱申候。尤舊記等無御座、起立の儀并年月相知不申候。  
表間口四間三尺、裏行町竝貳拾間。

一 但山谷町淺草町之地境西側に御座候。  
右四大工町より私儀預り居地守いたし候儀に御座候。尤違變の儀有之候節は町御奉行所へ御訴申上候儀に御座候。  
牢御屋鋪大工請負人 神田松枝町 吉右衛門店

一 右下地守當時私儀仕候。  
右地守 治兵衛  
山谷淺草町 家持 右衛門  
文政八酉年十月 以上乙酉書上

山谷淺草町

一 町内之儀は往古駒形町之邊に罷在候處、御用地に相成候に

(歷來町當)

付、爲替地本所龜戸村之内五町四方地所被下、銘々替地え引移候處、場末にて渡世の相成兼候に付、天和二戌年中元地え御返地被下置候様申上候に付、當時山谷淺草町え年月不相知替地被下置候趣申傳候。尤町内稻荷の儀は龜戸村に有之、同時に當町え替社致し、社守の儀は寛政の頃迄龜戸村東覺寺にて社守致候儀に御座候。尤舊記等燒失致し申傳にて申上候。

一 町内東西え凡四拾四間、南北え東側凡九拾六間四尺六寸、西側凡九拾三間三寸。

一 町御奉行御支配にて、淺草寺領年貢地に御座候。

一 反別壹町貳反四畝貳歩八厘三毛、峽田領と相唱申候。

一 小荷駄馬士御定杭  
右御定杭の儀は先年聖天町に建有之候處、寶曆四戌年九月中土屋越前守御番所え御願申上、翌亥年六月廿七日當町え御建替に相成、其後追々燒失并朽損候時々御建、御番所え御願申上候義に御座候。

一 三面に此杭より内小荷駄馬、駄買馬口附の者不可乗者也。  
裏に文化十三年三月と有之。

一 右は文化十二亥年十一月廿八日、當町出火之節燒失仕、同十三日子年三月廿八日御建替有之。

一 寶珠稻荷社 社守羽黒派修驗法力院。  
以上乙酉書上

(村戸今)

一 町名の起相分り不申、今戸村より相分り町方に相成候儀は、正徳三年己酉五月相改候旨申傳に候。尤當時町方分矢張御年貢地に御座候。

一 町内東西え凡貳百四拾間、南北凡六拾五間。  
町内家作御免地反別三町九反貳畝八分半。

一 峽田領と唱申候。  
御入國已來御料所にて、當時中村八太夫當分御預所に有之、町御奉行御支配に御座候。

一 御檢地の儀は寛文十戌年、野村彦太夫様、山谷町淺草町との間に町内の飛地有之候、右は千束分と唱候内にて、是は寛文元丑年右御同人様御檢地御座候。

一 子新田と唱候荒川附の撫垂地に有之候場所、明和五子年伊奈備前守様御檢地有之、家作御免町地に相成申候。

一 町内之小名 合の道。  
荒川南北え流水仕候、川幅貳百間程。

一 山谷堀 町方南之方を東流仕候、幅六間。  
今戸橋 長拾間、幅貳間。

一 金龍山下五町方え通行仕候御普請所に御座候。山谷堀え掛渡、尤橋向横臺の儀者今戸町持分に御座候。

一 飛地 山谷堀南の方に一ヶ所、間口拾間三尺、奥行拾三間

(道の合) (田新子)

(領田峽)

今戸町



(前寺性本) (岸河中)

半、里俗中河岸と唱申候。以前は中屋敷町と唱候山、右地所東の方には山川町、西の方には新鳥越町壹丁目に御座候。町方より北西の方新鳥越界に貳ヶ所所有之、小名本性寺前と唱申候。一ヶ所は間口拾間、奥行貳拾五間、一ヶ所は間口七間、奥行貳拾間、町方より戌亥の方山谷町・山谷淺草町の界に貳ヶ所所有之、一ヶ所は間口四間半、奥行九間半、一ヶ所は間口拾四間、奥行南九間半、北八間。

市郎左衛門

御場先肝煎  
右文政四五年四月中御場先肝煎被仰付候旨、若年寄衆小笠原近江守殿へ伺濟の上、御鳥見組頭後藤與次右衛門申渡、野羽織帶刀御免、御扶持方貳人扶持増、御手當壹人扶持被下置、相勤罷在候。

荒川見廻役

源 七 郎

文政五年年荒川見廻役被仰付候段、御勘定奉行古川山城守伺の上、御代官大貫次右衛門申渡、野羽織御免、御扶持方一ヶ年壹石五升被下置候。町方家持にて村方百姓代を勤罷在候。

風呂師

源 次 郎

右は享保年中元祖源次郎初て土風呂焼初、當源次郎迄五代相續仕罷在候。尤享保の始には火鉢職にて、同十一二年頃より土風呂焼初候儀に御座候。當時家主を勤罷在候。

同 三 次 郎

(師燒呂風土)

(覽上物燒)

右源次郎の外風呂屋職のもの五軒程有之候内、去る午年菊千代様御同道にて王子筋御成の節、飛鳥山下定茶屋に於て三次郎燒物上覽被遊候。

以上乙酉書上

橋場町

(庄濱石)

町名之起者往古當所荒川に橋有之候故、橋場と名付候由申傳候。開發之年來相知不申候。村内より分り町方に相成候儀者、正徳三年己閏五月相改候旨申傳候。尤當時町方分矢張御年貢地に御座候。

(尾砂)

郷名之承傳無之、石濱庄峽田領と唱申候。砂尾と申異名も申傳候。尤古砂尾長者といふもの此邊を領せし由申傳候。

(田新古分東千)

家作御免町屋敷反別三町六反四畝九分半。

(所りば去手御油)

町内南北長三百八拾間、東西横六拾間餘。

(所法製糖砂)

御入國已來御料所にて、當時中村八太夫當分御預り所に有之、町御奉行御支配に御座候。

(敷屋横谷山) (屋長茅淺)

は安永四年伊奈半左衛門様御檢地、家作御免地に相成、町内裏地に御座候。

町内飛地之儀町之西の方總泉寺大門先に壹ヶ所、小名淺茅長屋と唱申候。山谷町續に壹ヶ所、山谷續屋敷と唱申候。此坪數三百四拾六坪。

外に年貢地養安院境内七百九拾八坪。

右は飛地にて淺草池之妙音寺隣に有之候。

町内小名 上町 中町 下町

札之辻横町

紅葉屋敷 紅葉山御高盛陸尺拜領町屋敷有之候故相唱申候。

高札場 壹ヶ所

右下町に建有之候。

荒川

町方東之方に御座候、川幅凡百三拾間程御座候。

御上り場 壹ヶ所

町之北はづれに有之候。

渡船場

淺草橋場町より西葛西領寺島村へ渡申候。船數貳艘、船守貳人、船場高札無御座候。百姓渡に御座候。町の北外づれに有之候。

川船番所 壹ヶ所

(所りば去手御油)

渡船場より壹町程南に有之、場所町並沽券地御座候。元六兵衛と申もの、町屋敷に候處、六兵衛享保後小泉政五郎と名乗番士に相成、今子孫を政五郎と名乗申候。近頃川船役所より壹人宛出役、都合兩人にて勤番仕候。

(所法製糖砂)

油方御買上ヶ地所

(所法製糖砂)

町内東側中程に有之候。文政四己年御買上に相成、當時油御手去ぼり所に相成申候。

(所法製糖砂)

銀座附地所

(所法製糖砂)

町内下町に有之、表間口四拾六間、裏行貳拾貳間、右は御年貢町屋にて源七と申もの所持之處、寛政元酉年中上り地に相成、水塚御築立被成候。其後寛政五丑年中砂糖製法所相成、文化三寅年中油御手去ぼり所に相成、文政二卯年五月當時銀座役所に御引渡に相成申候。

(所法製糖砂)

拜領町屋敷八百拾坪 御 高盛 陸 尺

(所法製糖砂)

抱屋鋪六拾三坪 松 浦 伊 勢 守

(所法製糖砂)

後藤庄三郎拜領地所跡 名主 傳 右 衛 門

(所法製糖砂)

長昌寺門前に有之、享保之度返上地に相成申候。

(所法製糖砂)

右名主傳右衛門儀は草創より當所に罷在、表間口拾間、裏行貳拾間餘之町屋敷沽券地無之持傳へ、舊來町内年寄役致居候處、去文化八未年中元名主退役跡名主役相勤申候。先祖は往古より此所致住居候由申傳、尤中興元和年中より先



(架を橋浮朝頼)

祖之法名等相知申候。其以前は相知不申候。  
以上乙酉書上

(架を橋三瀧道)

一 橋場 昔此所に浮橋を掛しよりの名と云。  
今按に治承四年、源頼朝、江戸太郎葛西三郎等に命ぜられ此所に浮橋を掛しめらる。此事【盛衰記】【義經記】等に載る處なり。又康元元年光俊卿鹿島に詣られしとき、この隅田川に至り給ひしに、折しも浮橋のかゝりて有しかば、和歌を詠し給ひし事家の集にみへたり。これらの事によりて今に橋場の名残れるやうにもはるれど、是は世もはるか隔りし事にて、橋も長く絶たるべし。萬里和尚の【梅花無盡藏】を見るに江上春望の詩の註に、太田道灌下總の千葉を攻んとて此所に長橋三條を掛られし事を載れば、此頃三すぢまで橋の有しと見ゆ、是文明の頃なり。是より後橋も絶て渡さざりしかば、名のみ残るるべし。〔江戸紀聞〕  
江上春望道灌將公。招福庵兩山諸尊並少年。浮雲船歌於隅田川。詩歌吹一時之壯觀。隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚有柳。道灌公爲攻下總之千葉橋長橋三條。  
十里行舟浪白花。春遊不覺在天涯。隅田鷗亦應都鳥。鼓吹晚來聲入霞。

以上【梅花無盡藏】

一 石濱 【太平記】に云、文和元年新田武藏守義宗左兵衛佐義興左

(戦の原差手小)

衛門佐義治、閏二月八日、先手勢八百餘騎にて西上野にうち出らる。是を聞て國々より馳まいる當家他門の人々、中路兒玉黨には淺羽・四方田・庄・櫻井・若兒玉・丹黨には安保信濃守・子息修理亮・舍弟六郎左衛門・加治豊後守・同丹左衛門・勅使河原丹七郎・西黨・東黨・熊谷大田・平山・私市・村山・横山・猪俣黨都合その勢十萬餘騎、所々に火をかけて武藏の國へうちこゆる。是によつて武藏・上野より早馬をうつつて鎌倉へ急を告る事櫛の齒を引が如し。十六日早且に將軍尊氏公僅に五百餘騎にて武藏國に下り給ふ。久米川に一日逗留し給ひければ、河越彈正少弼・向上野介・唐子十郎左衛門・江戸遠江守・同下野守・おなじく修理亮・豊島彈正左衛門・同じく兵庫助・澁谷左衛門・同石見守都合その勢八萬餘騎、將軍家の陣へ馳あつまる。閏二月廿日辰の刻、武田の軍兵武藏野の小手差原へうち望む。敵小手差原にあり、ときこの事聞えければ、將軍十萬餘騎を五手に分ち、中道よりぞ寄せられる。去程に新田足利兩家の軍勢二十萬騎、小手差原に打のぞみて敵三聲聞を作れり。味方も三度聞の聲を合、兩陣たがひに入みだれて戦ひしが、將軍の十萬餘騎ひた引に引たつて曾て後をかへり見ず。新田武藏守義宗旗より先に進んで、天下の爲には朝敵なり、我爲には親の敵なり、只今尊氏が首を取て軍門にさらさずんば、いつれの時か期すべきとて、只二ツ引兩の大旗の引に附ていづく迄もと追かけ給ふ。小

(く退に濱石氏尊)

手差原より石濱迄坂東道すでに四拾六里、片時かあいだにぞ追付たる。將軍石濱をうち渡り給ひける時は、〔天正本〕隅田川に作る既に腹を切らんとて鎧の上帯切て投すて、たがひもをばなたんとし給ひけるを、近習の侍共二拾騎返しあはせて、追かゝる敵の河中まで渡かけたると引組、打死しけるその間に、將軍急をのがれて向の岸へかけあがり給ふ。〔天正本〕の者共二十餘騎、河中にて返しあはせさ、戦ひしその間に、將軍近習軍急をのがれて石濱入道が宿所へぞいせ給ひけると云々。日既に酉のさかりになりて川の淵瀬も見へざれば、新田武藏守義宗つゞいて渡すに及ばず、跡より續く御方はなし、安からぬものかなと齒かみをなし本陣へ引返さる。中略新田武藏守將軍をうちもらしぬ、今日は日すでに暮ぬれば勢をあつめて明日石濱へ寄んとて、〔天正本〕云、石濱入道か小手差原うちかへると云々。此書に載るところあまねく人のしる所なり。されど里數等の事に付て古人の疑ひすくなからず。〔新定手も出る〕又【北條分限帳】に、木内宮内少輔江戸石濱金津十二貫四百八十文の地を領せりと見ゆ。會下寺の領をも石濱にて附られしよし同所に出。

以上【江戸紀聞】

按に石濱は元此邊の惣名にして、橋場はその内の小名なりしに、後世橋場を惣名に唱へしゆへ、終に石濱の名は廢せしと見ゆ。それをいかにと云に、橋場總泉寺に藏せる文書の内、天文廿三年、遠山甲斐守綱景が出せし制札

御府内備考卷之十九終

及永祿三年、太田美濃守資正が出せし制札、共に石濱總泉寺と記し、天正十九年十一月、寺領御朱印以下橋場と見へたり。是地名變革の證ならずや。



御府内備考卷之二十

淺草之八

淺草溜

(編纂)

淺草寺の北の方三ヶ町耕地の間にあり。此溜の濫觴は貞享四年三月二十六日、北條安房守より目玉權兵衛、はだかり安兵衛と云二人の惡黨非人頭善七へ預け、同年五月二十日、甲斐庄飛驒守よりいせ五郎兵衛と云罪人を預けしより起りしと。此時は全く非人小屋中に入置しが、其後次第に預入多く、元祿十二年七月、上り畑地にて貳拾四間に四拾五間の地所を賜はり、一の溜、二の溜と二棟の長家を建しものは溜の始なりと云。其始末は享保十年善七が書上に載れば、全文を左に録す。

乍恐以書付奉申上候

一 明曆三年酉正月十八日、十九日大火事の節、燒死人九千七百參拾七人、此片付け彈左衛門方より申付、人足參千貳百八拾五人指出申候。從 御公儀飢に及候者共燒米貳百俵被下置、此焚出し人足彈左衛門方より申付、都合千七百貳拾人さし出申候。

(足人の時火大醫明) (上書の七善車)

一 同二月二日、北の御丸御藏にて燒米百俵彈左衛門頂戴仕、

私へ配分仕候。

延寶三年卯二月二十八日、島田出雲守様宮崎若狹守様兩御番所様より被仰付候、御與力原善左衛門様・同神谷彌兵衛様、柳原へ貳間、貳拾間假小屋出來候に付、新非人共假小屋に被仰付、横目小頭并人足差出し御用相勤申候。此小屋へ入候人高六百九拾參人、内女參拾參人、同六月二日宮崎若狹守様へ被召出、小屋六拾間不殘被爲下置候、并入用諸道具等も被下置候。此節の御與力原善右衛門様神谷彌兵衛様御付被遊候。

一 同四年辰正月二十三日、宮崎若狹守様御番所にて、川流不淨物取揚候川船被仰付候。

一 天和二年戌二月七日、北條安房守様御番所にて右の船破損仕候段御願申上候得ば、修復金貳兩被下置候。

一 貞享四年卯三月二十六日、初て北條安房守様より目玉權兵衛、はだかり安兵衛と申もの御預、同五月二十日、甲斐庄飛驒守様よりいせ五郎兵衛と申もの御預被爲遊候。同年十月より井戸新右衛門様中根主税様右御番所様御加役の節より御用相勤來候。此節の御預け物纒に御座候故、私園の内へ貳間半に五間の所拵差置候處、其後段々御預け大勢に罷成候付増地御願申上候。

(桑増溜)

一 元祿十二年卯七月十一日、松平兵部少輔様揚り畑屋敷にて、増地貳拾間に裏へ四拾五間溜御添地被下置候。御定杭東え

下水幅七尺、北へ下水幅四尺、南へ貳拾間、西へ四拾五間、

此節の御立合の御方々様

- 保田越前守様御與力 植竹 傳 太 夫 様
- 同御同姓 佐野 佐次 右衛門 様
- 松前伊豆守様御與力 平塚 伊右衛門 様
- 同 御同姓 中島 長右衛門 様
- 御代官細井九左衛門様御手代 服部 加助 様
- 町年寄奈良屋市右衛門様御手代 入部兵衛殿
- 同樽屋藤左衛門様御手代 武右衛門殿
- 御大工與右門様御下役 傳八 郎殿

(量食定の人四)

右の通御立合にて拜領仕、其節一の溜參間梁七間、二の溜參間梁拾間貳口、合建坪五拾貳坪、右溜普請の儀は私方入用にて建置申候。尤外女溜貳間梁四間の所御座候。是は寶永七年破滅仕候に付、唯今女御預けもの私園の内差置申候。元祿十二年卯七月十七日、保田越前守様被仰付候は、御預け牢舍并無宿のもの御扶持方卯七月朔日より兩御番所様、火方御改井戸新右衛門様盜賊御改中根主税様より御預け人高貳百八拾八人、内女七人奉預り候節、此御扶持方米壹人に付貳合五夕、女は壹合貳夕五才、拾歳より内の男女共に壹合貳夕五才に相極候。此米高四拾參石五斗八升七合五夕、但參斗九升五夕廻し俵數百拾壹俵壹斗四合五夕奉請取

候。

此時の御立合の御方々様

- 保田越前守様御與力 稻澤 彌市兵衛 様
- 御下役 小川 久右衛門 様
- 征岡 彦 助 様
- 松平伊豆守様御與力 小原 六左衛門 様
- 御下役 伊澤 貞右衛門 様
- 平野 傳左衛門 様

(錢五拾用雜の人一徒四)

右の通御立合にて奉請取候。  
一 同年卯十二月十八日御預け四人雜用錢、同七月朔日より同開九月二十九日迄御内借金參拾六兩と銀拾壹匁七分貳厘、但壹人には拾五錢づゝの積りにて、奈良屋市右衛門様より奉請取候。  
一 同卯年中詰番の儀被爲仰付候、并兩御加役様も手代并人足、日々差出し御用相勤申候。  
一 同年卯九月八日より翌年辰十二月晦日迄兩年分、初て藥數代金參百貳拾四兩壹分と銀九匁九分奉請取候。右は寺社御奉行様兩御番所様御勘定御奉行様御預けの者ども藥代金にて御座候。  
一 同十四年巳十二月五日、本所御小屋新非人引移し可申旨被爲仰付候。御與力吉田十郎兵衛様・同長岡金右衛門様御年



寄四人右の通御立合にて被爲仰付候に付、横目小頭并人足差出申候。此御小屋え入候人高貳百八拾人、内女拾七人、翌年午六月三日御小屋落着仕、御小屋并入用諸道具等不殘三つの内貳分私、壹分松右衛門に被下置候。

一 同十六年未四月二十日、保田越前守様え右の船持損候段申上候得ば、先規の通金貳兩被下置、同五月十日、柘植善九郎様に御極印被下置候。  
一 正徳四年午十二月八日、中橋新非人御小屋貳間半に拾間の御小屋貳ヶ所被仰付、翌九日北南の御小屋壹間四方に番小屋貳ヶ所出来、其後御小屋詰り候に御訴申上、同月二十五日増小屋貳間半に五間出来仕候。此節横目小頭并人足差出御用相勤申候。此御小屋え入候人高參百八拾人、翌未三月二十四日御小屋落着の節、本所御小屋同前に諸色道具等被下置候。

其節の御與力

- 吉田 政右衛門様
- 御下役 吉澤 仙右衛門様
- 御與力 中村 三左衛門様
- 御下役 長崎 藤兵衛様
- 浮田 作兵衛様
- 井野 伊兵衛様

一 享保四年亥六月二十四日、中山出雲守様より被爲仰付、八王子え御捕方凡八拾人餘指出申候。其節御與力本多藤次兵衛様原兵左衛門様御組八人御出被遊候。  
一 同年亥十二月八日、御牢屋敷え被召寄御牢屋缺付人足參拾人被爲仰付、同丑十一月二十七日、參拾人増人足被仰付、都合六拾人差出申候。尤牢屋近所出火の節は人足百五拾人以上相詰させ申候。  
一 丹羽遠江守様御勤役の節、御成先不淨物取揚ヶ候様被爲仰付、川廻船差出申候。  
一 享保七年寅四月十八日、兩御番所様御内寄合にて傳馬人足被爲仰付候。同月十九日、御牢屋土手後の横手小屋地田舎間九尺、長さ八間半御渡し被遊候。

御立合衆中様

- 鈴木 逸八 郎様
- 佐久間治右衛門様
- 右の小屋懸げ代金參兩、持籠貳拾張り、棒貳本調申候代金貳分被下置候。尤六月朔日より人足指出、只今まで御用相勤申候。
- 一 同年寅五月十五日、主殺し女牢舎之内相牢女無之候に付、佐久間治右衛門様被仰付、相牢女私手下たまと申女に外の女拾壹人、晝夜順番たまに差添、相牢に差出し申候骨折と

(録記の件一溜)

- 一 して鳥目壹貫文被下置候。
- 一 同年寅十二月十一日、小石川白山御藥園御用人足被爲仰付、卯正月四日より人足差出申候。尤出火の節缺付人足貳拾人宛差出申候。吉田伊左衛門様、笹岡吉左衛門様被仰渡候。
- 一 中山出雲守様より四五年已前吉田政右衛門様被仰付、相右衛門尋方五月より七月迄、人足四人ツ、毎日召連相勤申候。溜被損仕候節は修復金御願申上、三年已前卯年までは三ヶ月の諸色御入用帳面書上、御金頂戴仕候。
- 一 享保六年丑十月六日、溜え敷候疊の儀御願申上、廿五疊宛は壹ヶ年に壹度つゝ御入用にて表替仕候。其外は何拾疊敷候共手前入用にて仕來候。尤貳拾五疊の内床共に仕替候得ば、其時々御伺申上、御差圖次第仕候。
- 一 同九年辰七月廿五日、溜總圍五拾間の處仕替候に付、御願申上候得ば御吟味の上、金三兩貳分被下置候。右之通少も相違無御座候以上。
- 一 享保十年巳八月三日 車 善 七
- 一 又享保中町奉行中山出雲守・大岡越前守が奉りし溜一件の記録あり、因に左に出す。

加役方非人溜に差置候囚人共御扶持方米の儀、去戌年迄は私共方にて一所に勘定仕拂候處、當年より加役方雜用

(様模の内舎半)

金は格外に請拂仕候。御扶持方米の儀も加役方にて雜用金と一所に致請拂候様仕度奉存候。御扶持方米私共方に請拂仕候ては御勘定差跨り申候に付申上候以上。  
七月 中山出雲守 大岡越前守  
右書上享保四年亥七月七日、井上河内守殿え上る。町奉行え  
加役方非人溜に差置候囚人共扶持米の儀、町奉行方にて致請拂候ては差跨り候間、當年より加役方雜用金と一所に請拂いたし候様何之通、當年より加役方にて請拂可致旨安部民部・山川安左衛門え申渡候間、其旨可被申談候。右書付亥七月十九日、井上河内守殿御渡被成候に付溜の中山出雲守え遣す。  
町奉行え  
毎月被書出候牢舎者書付の内、溜預けの者も書出可被申候。但最初より溜へ遣候者又牢屋より溜え遣候もの兩様共に書載可被下候。  
右御書付享保二酉二月五日、水野和泉守殿御渡被成候、一昨日被仰聞候。兩非人溜の儀即日與力共差遣見分爲仕候處、溜と申候は長屋作り仕、惣敷敷にて疊を敷、竈も内に有之、夜中は有明けも所々に有之、晝夜共煮焼いたし、湯茶たばこ、藥迄も給申度時分心儘に被下、寒氣の節は焚



火にもあたり居風呂にて幾度も入、第一牢屋と違格子一重にて晴々といはし、吹ぬき候に付悪敷香會て無御座候て奇麗に御座候。其上園の内庭えも罷出候間、牢内とは格別囚人の爲には能く、病人杯養生には溜の方至極宜候旨囚人共申し候。見分に遣候與力共申候、竈御座候間晝夜共煮焼いたし、自由に湯茶たばこ心儘に候間牢内とは違ひ、病人等養生の爲には溜の方宜被存候旨申聞候。則兩溜の繪圖貳枚奉懸御目候已上。

亥二月

中山出雲守

大岡越前守

右書付亥二月十四日、有馬兵庫頭殿え上る。

寅五月十八日、牧野因幡守・中山出雲守・水野伯耆守様於

中の間戸田山城守殿被仰渡候趣、左の通記置。

囚人共非入溜之遣候儀不宜事候間、向後溜え遣し申間敷

旨被仰渡候。併無宿行倒病人は遣し候はて不叶ものに

候間、只今の通預け可申候。

右の通被仰渡候由享保七年寅五月十八日、退出より中山出

雲守被參被申聞候事。

車善七小屋

善七小屋は溜より少し北の方、新吉原町續にあり。物茂卿か【政談】云、車善七と云者の先祖は、上杉景勝の家來車丹

(祖先の七善車)

波と云ふものなるが、御草履取と成て御當家を伺奉り、家來をば皆江戸へ連來、乞食のうちへ入をきたるが、事顯はれたるに、廣大不思議の神慮にて御免有て、乞食の頭となりたると申傳るなりと。此説恐らくは傳聞の謬なるべし。車丹波は佐竹の家人にて名ある勇將なり。【江戸官論秘鑑】と云書に、善七が先祖丹波守父子の傳を載たり、略茂卿が聞取に似て實を得たるが如し。則左に記す。

(傳の七善車)

抑慶長庚子の亂に、常州の太守佐竹常陸介義宣は、心東西に定め兼、大阪の御味方とも、關東へ隨身とも決定なかりけるを、其家老車野丹波守、そのかみ在京の折より石田と懇意を結び、雄辨俊智を以し、説諭しければ深く三成が意を是とし、頻に主君義宣を進めて關東に背かしむ。故に義宣は景勝征伐の攻口出合す、神祖馬を返して西伐し玉ふ時に、その尻へを襲ふて切て登り給へと丹波守勧めたりけれども、流石夫迄は義宣勢ひなく、今日よ明日よと日を送られけるうちに、濃州の一戰天下大きに定まりしかば、佐竹もをめぐりと降人に出たりける。然るに神祖は兼て丹波守が出策の趣を聞給ひ、若彼か申ごとく佐竹御後を襲ふに在いては御大事たるべし、凡源族多かる中に、彼は頼朝より已來正しき源氏の貴族として、匹夫より起りたる豊臣家に陪從し却て同族の我にせまる事、たとへ義宣其心有とも、丹波守に在いては強諫反復もなすべき身

(善七の七善車)

を、其惡をむかふるの罪尤深し、惡むべきにたへたりとて、義宣に命ぜられ忽ちに縲紲のいましめを蒙り、江戸に引渡されて終に重科に行はる。丹波守が子善七郎といふものありけるが、此事を聞て深く恨み奉り、父の仇なれば何卒 神祖うちみ參らせんと心掛けるが、いかなる便りにや、庭作男と成て江城の御庭へ入込みうかひ奉りけるに、折しも 神祖御庭に出させられたる所を、善七郎見すまして天の與へと悦び思ひ、持たる木鏡を追取直して 御顔を目かけて打付奉るに、天授大徳の 神祖なればいかでか露あやまち有べき、忽 御前三尺斗の土の上にぞ立たりける。御近習之輩大にねどろき、すは狼藉なる奴哉引下して打殺せよと詈り騒ぎけるを、 神祖大に御制し有て、いづれも何事を申候ぞや、彼もの野心ありて我に害を加ふべき、力を入れて枝を切らんと誤て鏡を取落せしは全くの怪我といふものなり。今草創の世にして人心危ふきをいなくとす、一の不幸をつみするときは人心必ず放る、決して彼を罪する事なかれ、さこそ驚きあはてつらん酒吞せて休ませよと、上意にて 入御有ける故、御附の輩も此上はとて何事なく相止め。善七郎は鯉の口をまねがれ退てつら／＼案に、神祖の聰明にして我が害心をさし狭みしを知り給はざる事はあらじ、正しく我を夫と思ひ壹度ゆるし給ひしや、さもあらば我俱に不戴天の本文あり、いかにして本

意を達せんと千々に心を碎きけるが、此度仕損したる事は余り心急にて間違なる故にこそ、かされて無二無三に飛かり、引組て御去るしを玉ばらんと、日々御庭作りに入て案内を知りすかしたるに、其頃は 御城にてもまばら成る事なれば、密に夜に紛れていづよりか御庭先へ忍び、立石のかけに身をひそめて御閑所に入らせ玉ばらんと、このころを待居たり。案のごとく亥の刻斗に 御寐所への方より燭臺きらめきて、神祖は圓へ入らせ玉ふ。善七郎はこゝなんめりと思ひしが、あたりに燈火あがりて扈從の人多ければ、さしも大剛のものながら少し心にくれ、此度仕損しては一大事なりとぞためらむける内に、神祖は難なく御閑所へ入らせられ、御扈從衆を呼び給ひ、今宵庭の邊りに虫の聲絶てせざるは心得ず覺ゆるなり、燭火をあげて見よとの上意あるにぞ、われも／＼と御庭に飛び下り／＼爰かしこ尋ねめくれれば、善七郎は今は遁るゝ方なく、せめて一太刀恨奉らんと、御廁さして踊り出るを、有合ふ面々扱こそ曲者あれば一勢にかゝり集る、手取足取して終に善七郎をからめ取 御前へ引居たり。神祖御覽有て御扈從衆を以其名を御尋有るに、善七郎今はつゝむに及ばず有の儘に言上し、武運盡たる上は片時も早く死を玉ばるべしと申に、神



祖其孝義勇壯を感じ給ひ、一亡虜と成て天下の將軍をねらふ事、豫讓が趙襄子をねらひしに遙にまさり、襄子は奸雄なり、尙讓をたすく、況や我をや、若我孝子を殺さば是天下に孝をたつといふべし、汝かならず命を全ふして武名を起すべし、但我を以父の仇と思へる上は我につかへよといふともよもつけかばし、古主たれば佐竹がもとに勤仕すべしと、いとかたじけなき 上意有けるに、善七郎更にうけがはず、我父の仇と供に同じ天を戴ていづれの所にか武名をたてんや、たとへ君死をゆるし給ふとも我自死すべしと申けるに、

神祖大に御怒りの御氣色にて、今普天の下卒土の内誰か予が命を拒ん、汝若予が命の意をくしきて死地につく事をよみせば、汝が九族を盡して悉く俱に市に斬らんと仰せ有ければ、善七郎ふるひ恐れ、父の仇を報ずる事を得ざるのうへ、又母をして戮につかしまれば何等の不孝か是にまかん、此上はいかで 上意に背き奉らんや、但まのあたり害し奉んと計りし身にて活命の仰を蒙り、人間に交りなす事頗せ厚しといへどもなすに忍びず、是より人界を辭して乞兒癩徒の群に入て天年を終るべしと領狀申ければ、神祖益其こゝろざしを御憐み有て、追て有司に命ぜられて乞介の徒の首領飢寒をまぬがれる事を安からしめ給ふ、是よりして車善七と改めて今に連綿たりと云々。

(地宅の門衛左彈頭多機)

新町

新町は今戸町の西の方山谷堀の北にあり、機多頭彈左衛門が宅地なり。昔は日本橋室町邊に住せしが、御入國の後此所に移されしと云。此彈左衛門が先祖は攝州池田の産にて、相州鎌倉に来て右大將頼朝に仕へ、長吏以下支配すべきよし證文を賜はり、子孫いづれの比にや武州江戸に來り、天正十八年御入國の時、其の比彈左衛門當國府中までいで、鎌倉より代々役をつとむるよし申上しにより、御役等長吏以下支配元のごとく命ぜられしと云。此町内に猿屋町と稱する處あり、長吏の手下にて猿を脊負ひ編笠かぶりて市中を米錢乞ありく者の住居なり、こはむかし鳥越猿屋町に住せしを、彼邊御用地と成し頃移されしといへり。享保四年彈左衛門が町奉行へ書出せし由緒書あり、全文を左に記す。

覺

一 私先祖攝津國池田より相州鎌倉に下り相勤、長吏已下のもの強勢たりといへども私先祖に支配被爲 仰付候。  
一 從 頼朝公長吏已下支配可仕旨御證文、鎌倉若宮八幡宮奉納の旨申候得共分明に無御座候。然共其御證文の内長吏共尋申儀御座候間、別當え申達拔寫實、別當の判形御座候得ば奉納と相聞申候。往古より今に於て鎌倉八幡宮御祭禮御神輿先立供奉長吏供仕候。京都男山八幡宮御祭禮も其所

(書籍由門衛左彈)

の長吏同斷相勤、其外御祭禮の義にも長吏供奉仕候所處々に御座候。

- 一 禁中様 御蘭金剛大和國長吏差上、御扶持米代頂戴仕候。并御花畑の掃除も長吏等小法師と申者八軒にて相勤御扶持頂戴仕、其上様々拜領物御座候と承知仕候。
- 一 京都二條 御城掃除同所長吏下村庄助相勤、地方にて百五拾石頂戴仕、其上餅屋の上まい取申候。支配の長吏も有之、御城掃除の役或は牢守等相勤申候儀も御座候。
- 一 寅 御入國の節私先祖武藏府中迄罷出、鎌倉より段々相勤候旨申上候得者、御役等長吏已下支配被爲仰付、其後小田原氏直公御證文を以、其所の長吏太郎左衛門已下長吏支配奉願候處御取上無之、其證文被召上私先祖え被下置候。其後文祿五申年上州下仁田村馬左衛門と申者、長吏と機多の論仕、甲斐信玄公御證文御評定所え奉差上、支配可離と公事仕候處、私祖父申上候は、古來より機多と申儀世話にて御座候、古來の御證文等皆長吏と御書出被遊、或者御當家様に於て革作彈左衛門と御書出被下置候。其外書出に今所持仕候。依之私申分相立、右の御證文御評定所え被召上私え被下置、急度御仕置之上如先々支配に被爲仰付候。
- 一 御入國の御時御馬足病沓摺草被爲 仰付候、御馬爲御祈禱猿引御尋之上、私先祖猿引召連罷出候得は、病馬快氣仕候

(論の多機と吏長)

(引條)

- 一 仍て、爲御褒美鳥目頂戴仕候。御例を引毎年正月十一日、御城様御座より御判頂戴仕、御臺所にて鳥目頂戴仕候。中古より四九下御座より御判頂戴仕、御納戸方より御鳥目出、只今に至迄頂戴仕候。
- 一 御入國の御時之格式にて、只今に至迄御老中様方總御役人様方相勤候刻、私上下組頭袴羽織にて刀帶、只今迄相勤來候。
- 一 所々御關所支配女通候儀は、古來より直に御留守居様方え申上、私一判にて御判頂戴仕通り申候。
- 一 私所持仕候代々印判、濃洲青野原御合戦之時、首帳面相記先祖え御預之節、集房と申文字之原判爲割符私方え被下候。其御判用ひ、其後は大切に仕、代々文字は集房に致し、判に大小仕所持仕候。
- 一 九十七八年 以前 御城様御臺所え被召出、燈心細工仕候節御扶持方頂戴仕候。
- 一 時之御太鼓御陣太鼓并御陣御用皮細工入用は頂戴仕、細工之儀は御役目に仕候。加様之時は御傳馬申請候儀も御座候。此儀は御書付有之候。
- 一 御役目相勤候儀は、御座候御用次第御伴綱差上申候。并武藏府中御座、下總小金村御座御伴綱差上申候。
- 一 御仕置もの一件之御役目相勤申候。
- 一 六拾年程已前、石谷將監様神尾備前守様御代、武州鴻巣村



に礎三人被行候節、御評定所にて被仰付、御奉書被下置、檢使迄私先祖被仰付候間、御傳馬申請、供鎗爲持御役相勤罷歸申候。

一 從 御公儀様頂戴仕ものは堀式部少輔様より私先祖に内記と申名被下、于今内記之名用申候。

一 午未飢饉之節岩槻町之御關所雜物被下之候。

一 大火事之節御金御米被下之候。

一 丸橋忠彌品川にて礎之時於場所、石谷將監様より金子頂戴仕候。

一 盜賊改方赤井五郎兵衛様より銀子頂戴仕候。

一 丹羽遠江守様より御尋者被 爲仰付候間、兩三度召捕差上候得は、御褒美金子被下置候。

一 上坂と申傳候鎌一本、銘島田義祐と御座候外礎鎗壹本頂戴仕候得共、壹本にては手支申候間、神尾備前守様申上候得は、兩御番所より朱鎗之内下坂壹本づゝ被下之候。

一 私支配在之候長吏は無年貢田或は居屋鋪斗無年貢にて、田畑は御年貢差上候者余多御座候。御水帳直に頂戴仕、一村之長吏御年貢收納仕候者も御座候。

右之通被遊御尋候に付奉申上候以上。

享保四年亥三月

又享保十年九月、再び彈左衛門が書出せし古證文及由緒書等あり、全文を左に載す。

(書籍由及文證古るたし出の門衛左彈)

一 賴朝公御免狀 此文書は相州鎌倉郡極樂寺村長吏九郎左衛門所藏、原本を以て縮字す。彈左衛門書出は誤寫多し。  
與藤原彈左衛門覺、寫讀なり。

一 長吏座頭舞々猿樂陰陽師壁塗土鍋鑄物師辻目暗非人猿引鉢扣絃指石切土器師放下笠縫渡守山守青也坪立筆結墨師關守鐘打獅子舞裝作傀儡師傾城屋右之外道の物數多附有之候是皆長吏は其上たるへし此内盜賊の輩者長吏として可行是風呂屋湯屋は傾城屋の下たるへし人形舞は皆々二十八番の下たるへし末世異論候ては、め悉達如件

治承四年九月日

系圖

鎌倉住人藤原彈左衛門賴兼

賴朝(花押)

一 小田原の北條新九郎氏直の時家老より下狀之寫

上州平井長吏九郎左衛門訴申に付而、太郎左衛門召出遂糺明處、太郎左衛門捧證申處尤道理之旨裁許華。然は平井長吏九郎左衛門一類上州被取拂上、若被拘方有之は急度可申届、猶於無承引者小田原表え注進可申旨仍下狀如件。

弘治二年正月十日

石卷下野守判 長吏太郎左衛門

一 長吏源左衛門御國 御免之儀被 仰出候處、沼田道者之儀横合申剩へ太郎左衛門子方沼田庄本屋敷え返す間數由申候

旨、然上沼田孫次郎代福島孫七郎に堅被 仰付候。向後無相違可申付、此上源左衛門兎角申時は可被拂御國事。長吏源左衛門被拂 御分國候處、既橋之長吏所に有之由申候。此度既橋代官早川に被仰付候。此上令徘徊付ては見逢に太郎左衛門に申付可致成敗候。依之知行地に不入有之候咎人之上拘方不可有之候。可致討捨者也。仍如件。

永祿二年八月七日

狩野大膳亮奉之 長吏 太郎左衛門え

定

西上州長吏職并砥坂事爲始小幡谷累代吾分所相計數通先證歷然之間、自今已後不可有御相違。畢竟可守舊例之旨所被仰下也。仍而如件。

天正四年八月七日

朱印 跡部大炊介奉之 西上州長吏 助左衛門

御當家様御下知狀

御傳馬壹疋從江戸小田原迄無相違可被立候。是者鹿毛皮、白皮被成候御用として參る者也。仍而如件。

辰二月六日

青常 陸判 内修理判 大石見判

長谷七左判 伊備前判

(皮目板)

尙々爲御用板目皮被仰付候間可被入精候已上。今度御陣爲御用板目皮入申候間方々々相尋、矢部刑部殿え可被相渡候皮參着次第、代物之儀相渡可申旨爲其如斯候已上。

五月十七日

内藤修理清常判 彈左衛門殿

鹿之皮貳百拾九枚白なめしに申付候。いつものごとく御分國中皮分罷出、彈左衛門相談候て早々可仕上者也。仍而如件。

七月廿日

清常印 御分國中皮作 彈左衛門殿

定

鹿の皮七拾三枚細皮申付候。いつもの如く御分國中皮作罷



(皮白)

出、彈左衛門と相談候て早々可仕上者也。仍而如件。  
八月十九日 清常印 御分國中皮作 彈左衛門  
急度申入候仍從  
大納言様被仰付候鹿皮、いつも彈左衛門所申付候て白皮に仕差上申候。何も御分國中皮作申付仕上候由にて、就夫其方御代官所の皮作由申候段彈左衛門申候、左様に候哉御尋候て、いつも致付候人に被仰付候而尤かと存候。爲其如斯候。恐々謹言。  
十一月廿日 青山常陸介 忠成判

奥平美作守殿

手代衆

今度御武者揃の御用に付て、さひかは四百八十ふり入申候。四月二日を切て御分國中不嫌權門急度可持參候。代物の儀は賣買の並に可被下候。若日限相延候は、可爲曲事候。恐々。  
申三月廿日 奈良八郎左衛門印 岡田又兵衛印 在所々 皮作衆

乍恐以書付御願申上候事

三御番所様え罷上候格式役の者と私逆に罷成候儀は、渡邊

(書頭をす開に式格)

大隅守様村越長門守様御代相勤申候彈左衛門、病身に付名代にて相勤候砌、段々不身上故平日御用の節は召仕連申儀も名代の者誤來略儀に仕候。此後自然と格式の様に罷成申候。往古より大御老中様方始奉り諸御奉行様え刀上下にて今に相勤申候。御番所様の儀平日御用御座候故自然と略儀仕候處、只今格式の様に相成候儀は私方より誤來候儀に御座候。此度願上候者、只今迄役の者差出御伺仕候儀も、向後私直に相勤可申候間、何卒古來の通御門内迄刀にて出勤仕候様、被爲  
仰付被下置候は、雖有可奉存候以上。  
享保四亥年二月 淺草 彈 左 衛 門

右御番所迄帶刀候儀指免候段彈左衛門え可申渡旨、年番坪内能登守様組小原六左衛門、中山出雲守組阿部彦太夫、大岡越前守組植竹藤右衛門三人より同月廿六日申渡、但上下は不差免、尤美服着問數段是又可申渡旨三人え申聞候事。

乍恐書付を以御伺申上候事

昨廿六日私被召寄、三御番所様御門内迄帶刀相勤候様被仰付雖有奉存候。就夫御伺奉申上候、組頭貞右衛門、淺右衛門儀は私同意支配下取扱仕、惣御役所様え罷上り申候節私上下着用仕、與頭は羽織袴にて相勤來申候。支配下の儀御尋又は御用の品によつて與頭とも、罷出候儀粗御座候。然

(はかひき)

上者此儀も役のもの申上候格式逆に罷成申候、羽織斗にて刀帶、三御番所様え爲相勤申度奉存候。依之御伺奉申上候以上。  
享保四年亥二月廿四日 淺草 彈 左 衛 門  
右與頭貞右衛門、淺右衛門兩人御番所前迄刀帶候儀差免の段、彈左衛門に可申渡旨、年番坪内能登守組小原六左衛門、中山出雲守組阿部彦太夫、大岡越前守組植竹藤右衛門三人え同月廿九日申聞候事。  
追而指出候書付

此度私由緒御尋に付、先達而差上置候古證文等の寫并由緒書壹通差上候。其刻申上候鎌倉太郎左衛門に願置候書物、御差圖は無御座候得共手下の儀勿論預置候得は、私所持仕候も同様に御座候間取寄申候間、御披見の上御書留奉願候。尤關八州は私手下の者共、國主領家の御朱印御墨付數通所持仕候間、御探題の上段々差上度奉存候。

北條時頼公の御時、於由井濱日蓮聖人御刑罰の節、私召連罷出候役の者の内、日連聖人を勞り候得は眞筆の法華經五卷被致附屬、今に私所持仕候。此儀に付縁記等も御座候。御上洛の節は攝津國河邊郡池田領火打村長吏八左衛門太兵衛に申付、御伴綱諸事皮類御用相勤申候。古來の御書付御厩御別當西丸下諏訪部惣左衛門様御請取所持仕候。依之御代替の節は罷下御伴綱差上、御厩へ御目見に召連罷上申

(覽上曳猿)

候。并 御上洛の御道筋に於て皮類被爲 仰付候節は、支配の外迄も其邊の長吏共に私下知仕相勤申候。  
一 先年日光御社參の節猿引被爲召出、御泊の於 御殿 御上覽被爲遊候節、私手下の猿曳拾貳人召連相勤申候。此節は御扶持方頂戴仕、伊奈半左衛門様より奉請取、御上覽の上御持扇子頂戴仕、今も所持仕候。  
右奉書上候通由緒書、御帳面御書加奉願上候以上。  
享保十年己九月 淺草 彈 左 衛 門

御役目相勤候覺

一 御入國已來西御丸御厩え御伴綱御用次第差上候。  
一 御陣太鼓御用次第張上申候。  
一 皮類御用の節も何にても差上相勤申上候。  
一 御尋もの御用、在邊に不限被 仰付次第相勤申候。  
一 御牢屋鋪焼失の節囚人脇え御移被爲遊候節、外側に晝夜番人加勢差出申候。  
一 御召之斃馬埋申候人足差出申候。  
一 御施行の節木戸々々杖突人足大勢差出相勤申候。  
一 御仕置物一件御役相勤申候。  
一 同御傳馬役相勤申候。  
一 同御入用の諸色買上相勤申候。  
一 關八州惣支配の出入等私方にて裁判仕候。  
御公儀様え差出不申諸法度の趣平日申渡、諸事差引仕申候

(結由門衛左彈)



處、支配の外にも御當地罷出候、出入の節は私方に被爲  
仰付諸事差引仕候。

右之通從往古相勤申候以上。

享保十年巳九月

淺草 彈左衛門

古文書四通

長吏職事

法名 利阿

朱印

兩代官 四郎兵衛



同 大郎兵衛

山田 五郎兵衛

宛行

(役除掃官八)

右任右大將家御判之旨、相模國鎌倉由井長吏賴久今利阿  
東八ヶ國の長吏可進退者也。然而彼御文書雖奉鶴ヶ岡御  
寶殿籠、利阿深歎仰上直召下畢。依爲此同類山内彦左衛  
門賴助、藤澤之七郎左衛門賴道、何も八幡宮掃除以下役無  
懈怠可相勤狀如件。

大永三年癸未三月廿三日 鶴ヶ岡少別當法眼良能

右賴朝御判、於鶴ヶ岡申請時官達也

下山内

大永三年癸未三月廿三日 長吏 五郎左衛門

御判 右同斷

下鎌倉由井長吏賴久法名利阿

大永三年癸未三月廿三日

御判 右同斷

極樂寺分の内、田畑壹貫五百文の所、如前々出置もの也。  
仍而如件。

乙丑八月十六日

資親

極樂寺

華作中



【江戸官論秘鑑】所載彈左衛門傳異説

彈左衛門の先祖は元我國の人に非ず。秦の左衛門武虎とて、  
秦人の漂泊して我が朝にさまよひけるものす。えしが、  
武虎天性自然と武勇たくましく、誠に萬夫不當の強兵たり  
しかば、群國の士大夫得て臣とせん事を願ひけるが、其頃  
武將は但馬守平正盛、源義親を追討して院の御氣色宜、ゆ  
ゝしきに振廻ふまゝに武虎をうながして家臣とせり。武虎  
も勢ひにせめられ臣として仕へ居たりけるに、正盛に一人  
の娘あり、容貌世に類ひなく、窈窕嫵媚たる粧ひ古今に比  
すべきものなきほどなりしかば、思ひを寄せ胸を焦すもの  
いくらといふ事なき中に、さもむくつけき武虎いかなる隙  
より見初めむ、又なき思ひに伏しまつみ、今ははや心死ぬべ  
しと覺へければ、せめてかゝるよしを知らせまほしくてお  
もゆる程に、さへある手書をやとふて水くきのそこ深き思  
ひを、もしは草人つてしてよせたりけるに、公子貴族の袖  
引はゆるさへいとわるし計なれば、いかで、手にだにもふ

(事か虎武祖先門衛左彈)

### 附録

#### 新吉原町

日本堤の内に在り。此遊女町は庄司甚内と云者の願によつ  
て、元和三年、葺屋町の下今の大門通り於いて二町四方の  
葺原の地を賜はり、同四年の冬、造營成て吉原町と名付て  
商賣せしが、明暦二年、其地御用として召上られ、今の地  
に移されしと云。其詳なる事は享保十年、新吉原町名主又  
左衛門が書出せし新吉原町由緒書に見へたり。其全文を左  
に記す。

新吉原町由緒

新吉原の儀御役所に留無之謬不相知候に付、享保十巳七月、  
吉原江戸町名主又左衛門え相尋候處、左之通書付申候に付  
記之。

慶長年中迄は、御城下に定り候けいせい町無之、二軒三軒  
宛所々に分散いたし罷在候。其中に軒を並集り居候場所三  
ヶ所有之候。

一 麴町八丁目の邊 けいせい屋拾四五軒

一 鎌倉河岸 右同斷

一 大橋の内柳町 けいせい屋貳拾軒餘

右大橋の内と申候は唯今常盤橋御門の邊を大橋と申、柳町

れぬべきかへりみだにもせずと聞程に、武虎いよ／＼思ひ  
に堪兼て力なく、此上はうげひ取て爰を逃出、兎にも角に  
も心にしたがわずんはうきめ見せむものと思ひもふけて時  
をうかひふ、かゝる事誰聞えけん斗らず正盛が耳に入れて、  
正盛大ひに憤激して、渠は一圖に匹夫の英雄とこそ思ひて  
懸望しけるに、かゝる放蕩不義のふるまひ悪べきにたへた  
り、急ぎ討手を差向けよと評議するを、武虎また是も傳へ  
聞、あしかりけんと思ひつゝ、討手のいまだ來らざるうち  
夜に紛れて落失せける。正盛が威光天下に高く、是を探る  
事所なし。只きつと思案をめぐらすに、關東は源家代々  
の領國として正盛が指揮に従ふ國に非ず、爰こそ究竟のか  
くれ家なりと採にもんで關東へ入、かゝるやつ／＼しきさ  
まに身をやつし、正盛が穿鑿を通れけるが、運拙くしてふ  
たゞび人間に交りがたく、子孫ともに沈淪せんとす。かゝ  
る由緒ある事を賴朝卿にもしるしめしてこそ、格別に御賞  
翫こそましく／＼けると云々。

(書籍吉町原吉新)

(町城頃の頃長慶)



(町柳)

と申候は道三河岸の邊に御座候。其頃京都萬里小路柳の馬場と申所にけいせい屋有之候。是は原三郎左衛門と申者、天正年中に取立柳町と申候。然者京都の遊女町の名を借り用ひ候様に相聞候得共、大橋の内柳町と申候は其町の入口に大木の柳貳本有之候故、直に其の町名にいたし柳町と申候。右柳町のけいせい屋共は皆々御當地素生の者共にて御座候。鎌倉河岸の傾城屋共は御江戸御繁昌に付、駿河府中の彌勒町より引越申候。麴町の傾城屋共は京都六條の傾城町より引越候者共にて御座候。此外御江戸御繁昌に付伏見夷町奈良屋辻杯より参り、所々に二軒三軒宛けいせい屋仕罷在候。

慶長十年の比 御城御普請御用意に付、柳町の馬場御用地に被召上、此所の傾城屋共悉元誓願寺前え引越申候。此時分は道橋等次第に多く罷成、屋敷替杯の御沙汰度々御座候て、御江戸日に増御繁昌に付、けいせい屋共相談仕、けいせい町の場所取立申度由御訴訟申上候得共御免許無御座候。

其頃庄司甚右衛門と申者初て御訴訟申上候趣は、京大阪駿府其外諸國の津湊惣て繁昌成場所に、先規より御免の傾城屋町惣て貳拾餘ヶ所有之候。然處御江戸日々増し御繁昌に候得共未定候傾城屋町無御座候、所々に分散いたし罷在候。如此に御座候ては御町中の爲にも不宜事共有之候由申上、

(條ヶ三上願門衛右基司庄)

井三ヶ條の儀を以御願申上候。  
三ヶ條の覺  
遊女を買遊び候もの遊興好色にふけり、身の分限を不辨、家職を忘れ、不斷けいせい屋に入込長居候得共、傾城屋の儀は、其者の方より金銀を多に申請候得者幾日も留置馳走仕候。然間其のづから其主人親方えの奉公を缺、剩引付横領いたし候事は、傾城屋共金銀を限りに幾日も留置候故と奉存候。一ヶ所の場所御定め被下候はば、只今迄有來候所の傾城屋共を一ヶ所に集め、吟味仕、自今は一日一夜の外長留め致させ申間敷候の事。

人を拘引候者の儀前々より堅く御制禁に被遊候處、今以粗有之候。當時御府内において人も人を拘引候程の不届者共有之候。其子細は手前困窮成者の娘を養子と名付買置、成長の後めかけ奉公又は遊女奉公に出し、大分の金銀を取渡世に仕様、ヶ様成不届ものかなたこなたよりみめよき娘を五三人宛も養子に仕り、十四五歳に罷成候得ば右のごとく奉公に出し申候。實の父母方より申分申來候得ば、種々偽を申少々金銀を出し申すも、實の父母相果候歟又は遠國などに罷在候得ば己が自由に相叶、傾城に賣出し大分の金銀を取申候。ヶ様成不届もの共は人を拘引候事も可仕様に奉存候。如此の譯をも乍存知、拘引者養子娘を相對にてけいせい奉公召抱候もの有之候様に及承申候。傾城屋共一所に召集

め申候は、拘引者の儀は不及申、養子娘の筋吟味仕、左様成者を奉公に出し候は、急度御訴可申上候事。

一 近年世上御静謐に治り候といへ共、澁州平均の御事も程遠からず候得ば、自然は透問を伺ひ悪事を相企可申諸浪人の類も可有御座歟と奉存候。左様成る悪黨之類は人目を忍び、住所をも不相定流浪いたし可罷在候。遊女屋の儀は金銀をだに遣候得ば其者の出處詮儀仕候儀は無御座、幾日も留置申候。右のごときの族、所々方々の遊女屋杯に罷在候事も難斗候。此外當座に於て不届仕出し脱落仕候もの杯、當分居所には遊女屋に勝れたる處無御座候間、所々の遊女屋えかゝり罷出候は、たとひ御詮議者たりともたやすく御手入申間敷奉存候。此度奉願候通り傾城町一ヶ所に被爲仰付被下候は、此儀は殊更念を入、何者にても見届ざる者けいせい町え致徘徊候へば其者の出所吟味仕、彌怪敷奉存候は、急度御訴可申上候事。

御公儀様御廣大の御慈悲を以、奉願候通被爲 仰付被下候は、難有奉存候以上。  
右御訴訟申上候は慶長十七年の比と承傳候。  
右之通御訴訟申上候得ば、其節の御町奉行所様米津勘兵衛様と承申候御評定所え被召出、本多佐渡守様御出座にて御開濟の上、追て御吟味の上可被爲仰付旨被仰出候。  
元和三年の比三月と承傳候、右甚左衛門義御評定所え被召

(條ヶ五令禁内願)

出、本多佐渡守様諸御奉行様御列座にて、御訴訟申上候通傾城町の場所被爲 仰付候間、難有可奉存旨被仰渡候、其節甚右衛門に被爲仰付候は、けいせい町の場所壹ヶ所被下置候上は江戸御町中の儀は不及申、端々に至迄遊女の類一切差置申間敷候。若左様成もの有之候は、甚右衛門并けいせい町の者共役目として、急度御奉行様え御訴可申上旨被爲仰付候。

同時に甚右衛門え被仰渡候御書出  
五ヶ條の覺

- 一 けいせい町の外傾城屋商賣いたすべからず。并傾城町圍の外何方より雇來候共先々えけいせい遣候事、向後一切停止たるべき事。
- 一 けいせい買遊び候もの、一日一夜より長留いたす間敷事。
- 一 けいせいの衣類總縫金銀の摺箔等一切着させ申間敷候。何地にても紺屋染を用ひ可申事。
- 一 けいせい町家作普請等美麗に致べからず。町役等は江戸町の格式の通急度相勤可申事。
- 一 武士、商人體の者に不限、出所體ならず不審成者致徘徊候は、住所致吟味、彌不審に相見候は、奉行所え訴可申事。
- 一 右之通急度可相守もの也
- 一 月日
- 一 同時に甚右衛門義吉原町惣名主相勤、右之趣急度可相守旨



(いてがみき)

被爲仰付候。尤御年頭相勤申候。其比跡御奉行様方甚右衛門が異名キミガテテと御意被遊候。古來大人御歴々の御言葉に遊女屋の亭主の事キミガテテと被仰候。君親方又遊女長とも書せ申候。甚右衛門始の名は庄司甚内と申候。慶長十一年の頃横山町に向坂甚内と申惡黨罷在候て甚右衛門に出入を申掛、御奉行様え罷出候刻相手と同名にて御裁許の節紛はしく聞へ候故、御差圖に奉隨此節甚右衛門と名を改申候。甚右衛門出所は相州小田原の者、天正十八年落去の砌歳拾五にて御番地え罷越、柳町に所縁御座候て此所に居住仕候。

(む改と原吉を原設)

葦屋町の下にて貳町四方の場所被下置候。此處沼にて葦茅の生茂り候を刈り捨、地形築立候間葦原と名付申候得共、目出度文字に候故吉原と書替申候。元和三年より地立普請等に取掛り、同四年霜月中より初て一同に商賣仕候由。

江戸町壹丁目

右江戸町と名付候事は、御一統の後初て開基仕候けいせい町故、御江戸御繁昌に隨ひ此町も餘慶を奉蒙候様にと祝ひ申候て江戸町と名付申候。最初柳町に罷在候者共當町え參り申候。名主甚右衛門義も當町に罷在候。

同 貳丁目

右貳丁目 鎌倉河岸に罷在候もの共此丁え移申候。

京町壹丁目

右京町は麴町に罷在候けいせい屋共引越申候。皆々京都より參候者に候間京町と名付申候。

同 貳丁目

右は御當地御繁昌に付吉原町開基の由を承り、上方のけいせい屋共罷下り此丁え移り候もの多く御座候。一兩年遅く町作り候間新町共申ならはし候。

角町

右角町は京橋の角町よりけいせい屋共拾人計引越申候故直に角町と名付申候。但寛永三年丙子年中の町造り出来仕候。

(轉移に堤本日)

一 明曆貳年申十月九日、石谷將監様御奉行職の節、吉原町の年寄共を御召被遊、只今迄の場所御用地に付屋敷替被爲仰付候間急度御請可申上候。但代地の儀は淺草寺の後日本堤の邊歟本所の内歟兩處の内にて可被爲仰付候間、勝手次第御願可申上旨被仰渡候。年寄共申上候は、四拾年餘罷在候所を遠方え罷越し候段、何共迷惑至極奉存候と申上候得共、不相叶候故罷歸相談仕候處、日本堤の方可然に相極り、其通仕候。

(設開の原吉新)

一 り重て御願申上候。其節石谷將監様神尾備前守様被仰渡候は、吉原町の儀遠方え被遊候に付其代として所徳あまた被下置、難有可奉存旨候被仰渡。

一 只今迄は貳丁四方の場所、代地にては五割増に貳丁に三町の場所被下置候事。

一 只今迄畫計商賣仕候處、自今晝夜の商賣御免被遊候事。御引料として御金壹萬五百兩被下置候。

一 但小間壹間に付金拾四兩ならし

一 御町中に貳間軒家有之候風呂屋、悉く御潰し被遊候事。此儀は右風呂屋共髪洗女と名付、吉原町のけいせいにねとらざる遊女を抱置晝夜商賣仕候に付、悉く御停止に被爲仰付候。

一 遠方え被遊候に付、出火の節跡火消等の町役御免被遊候。同年十一月廿七日、淺草御藏え吉原町年寄共并月行事參御金頂戴仕候。

一 吉原町の者共御願申上候は、當年の儀は何卒其通に罷在、明年二月中迄に引越申度候由御訴訟申上候得ば、其通に被仰付候。

(暫建の後火大の曆明)

一 明曆三年酉正月十八日、本郷本妙寺出火町中類焼いたし候節、吉原町の儀も悉く致燒失候。依之其節御奉行所様え被召出、此度の大火に付所替の儀追て可被仰付候間、其間小屋掛いたし商賣可仕由被仰渡候間、小屋懸いたし商賣

(原吉元) (坂紋衣) (道間十五)

一 同年四月、石谷將監様神尾備前守様會根源左衛門様日本堤え御越被遊、新吉原の場所被遊御見分候。

一 同年六月始、御奉行所様え被召出、當月中に悉代地え引越可申由被仰渡候、但屋作普請の間代地の近邊今戸村山谷村・鳥越にて致借宅商賣仕候儀は勝手次第たるべきよし、是又被仰渡、尤右之場所百姓ども方えも其通被仰渡被下候。宿賃等の儀は相對に可仕由也。然る間右之場所にて百姓の家を借り、家作出來の内商賣仕候。六月十五日、十六日兩日は鳥越山谷村今戸邊の借宅え悉引越申候。同八月初に普請致出來、新吉原にて商賣仕候。

一 日本堤より吉原大門口迄五拾間程有之候間、五拾間道と申候。土手より大門の方え下り候坂を衣紋坂と申候、是は吉原町え參候客、此邊にて多ばるもんをかいつくろい候故衣紋坂と名付申候。最初繩張りの節大門より土手迄直に道を付候得共、備前守様御差圖により道を三曲に作り申候。新吉原町、江戸町壹丁目・京町壹丁目・貳丁目・角町此五町は元吉原より有來り候町の名にて御座候。

揚屋町

右揚屋町の儀は元吉原にて此町の名無御座候。五町中に貳軒三軒つゝ揚屋共罷在候。新吉原え移申候て場所廣成候は



揚屋共一所に集、揚屋町壹丁取立申候。依之當町の儀は五丁の差圖を請町役相勤申候。

境町

右境町の儀は新吉原へ引移、寛文八年申三月中江戸町貳丁目名主町人共御訴訟申上、面々の居屋敷の内を切り新道に作り境町と名付申候。此時分端々の賣女御證議御座候て、端々に罷在候茶屋遊女持とも吉原町え訛言仕候間、其段御訴訟申上候得ば、御慈悲を以御免被遊候に付、毎度御訴申上茶屋遊女持共惣て七拾餘人、方々より吉原へ入込申候。依之右の新道を作り右の者共に借宅いたさせ申候。

伏見町

右伏見町の儀も境町を取立候節、同時に新道に作り伏見丁と名付申候。其比江戸町貳丁目の年寄とも多是生國伏見町の者共有之候故、右の新吉原古郷の名を付申候。元吉原大門口にも端々の遊女御制禁の御高札有之候。新吉原へ引越候ても大門口に御高札を御建被下候。其後元祿七年戌十一月、川口攝津守様能勢出雲守様御奉行職の節御高札御建被遊被下候。

御文言之覺

此以前より制禁の通、江戸町々端々に若遊女、ばいた隠置

(のもの堀・見伏は元)

(札高の口門大)

候はゞ草々番所え可申出候。身のまゝになして可遣もの也。 戊十一月

十一月

御檢便

大久保彦右衛門殿 中島長右衛門殿

正徳元年卯七月十一日。御高札御建替。

御文言之覺

一 前々より制禁のごとく、江戸町中端々に至迄遊女の類隠れくべからず。若遊女の輩あらば其所の名主五人組地主迄曲事たるべきもの也。

一 醫師の外何者によらず乗物一切無用たるへし。附鍵・長刀門内へ堅停止たるべきもの也。

五月

御檢便

永井藤八郎殿 青柳茂右衛門殿

一 保田越前守様御奉行職の節、元祿十五年午二月十五日、日本堤の上御町方と御代官所の御傍示杭、始て御建被下候。

御檢便

今井九右衛門様御手代家 太田吉右衛門殿 出水臺右衛門殿

(杭示勝)

上柳十之丞殿

御傍示杭御文言之覺

從是南の方土手の上御町方附

從是北の方御代官所附

右御傍示杭朽損申候間、享保三年戌六月七日御建替被下候。

長崎藤七郎殿 平野武左衛門殿

御建替御文言之覺

從是南方土手馬踏なだれ共に新吉原町附。

從是北方土手馬踏今戸町附。

從是南方馬踏新吉原町附。

從是北方馬踏なだれ共に今戸町附。

日本堤御傍示杭より聖天町木戸際迄、長京間三百八拾五間貳尺なり。北の方三の輪町迄長四百間餘、都合拾三町餘。新吉原大門口より水道尻迄京間百三拾五間、同横幅京間百八拾間、同惣坪數都合二萬七百六拾七坪。

元和三已年けいせい町の場所被下置、明暦二申年迄四拾年。明暦三酉年日本堤へ引越、享保十巳年迄六拾九年。

年數都合百九年。

右吉原町開基の次第、廿右衛門方より相傳候日記共燒失仕候故月日不分明候。私親共心覺として書記置或は常々語り傳候趣大概右之通に御座候以上。

(復修の橋越鳥新) (上書の道間十五)

享保十年己七月

新吉原町江戸町名主

又左衛門

甚右衛門

甚之丞

又左衛門

又左衛門

又左衛門

新吉原町大門口外 五拾間道の儀申上候書上

覺

長濱町元右門店

八郎兵衛

此者相願候は新吉原大門口の外五拾間道兩側水茶屋商賣人貳拾間程御座候。同所北の方に幅三間餘の堀留溝井堤際に空地も御座候。右五拾間兩側共に、公儀地に御座候。右の地面拜借仕度候。左候はゞ下谷通り新町の橋壹ヶ所、新鳥越橋壹ヶ所、新規掛直修復共に永々引受仕立可申候。且亦五拾間道より東の方四町程の間、日本堤道惡敷成候はゞ永々致普請、自然満水の時分は人足差出防可申旨相願申候。右の通に付新吉原町名主共方吟味仕候處、只今の新吉原町明暦年中江戸町より所替被 仰付候節五拾間道御附被下、此外右道を狭め南北に幅五間の惣堀有之、當時茶屋貳拾貳軒御座候。此茶屋の儀吉原町所替被 仰付候節、大門口爲用心相願致家作、右茶屋地代の儀は吉原町え致助成に、日本



堤長六町半餘毎年地形普請并土手の上拾ヶ所番屋修復等の諸入目に致來候。只今右の所外の者え被下置候ては迷惑仕候旨新吉原町名主共申之候。然共右五拾間道所替の節御附被下候もの義、名主共口上迄にて何にても書物も證據無御座候。年久敷儀故町年寄共方にも扣も相見え不申候。大門外の儀に御座候得ば新吉原町より強て申分は難立候間、願の通入郎兵衛え被仰付、貳ヶ所の橋永々引受させ可申哉、又は右茶屋地代金少々の儀に御座候自今公儀え取上げ可申候哉、併數十年新吉原町え地代取之土手通諸入用に相用來り申候間、只今迄の通被差置願人えは無取上旨可申渡候哉奉窺候。右之場所繪圖壹枚奉入御覽候以上。

二月

大岡越前守 諏訪美濃守

△下ヶ札 下谷通新町橋 長六間、巾貳間壹尺

△下ヶ札

此橋新規に仕候は、金四拾兩程相懸り可申候。新島越町之橋 長六間、巾三間

○下ヶ札

此地代金賣ヶ年に金五拾兩餘づ、新吉原町え受取候由御座候。

以上丙戌編次

### 御府内備考卷之二十終

### 御府内備考卷之二十一

#### 下谷之一

#### 總説

【國華萬葉記】に、下谷は上野に對したる名なりといへり。今その地形を按ずるに、上野は固り高燥の丘にて、その地に續ける下濕の地なれば、上野に對せし呼名といふ事理あるに似たり。【風土記殘編】に下谷岡と載たるは上野を指ていへるにや。されどかの記は後人の偽書なりといふ説あればいかゞあらん。永祿改定の【小田原役帳】に、江戸廻下谷菅野分三十五貫九百文の地を大谷十郎左衛門領せし由載たり。又【隣松夜話】に、永祿七年、太田三樂武州下屋と云所にとりてを拵へ、岩の跡詳ならず、是も、取續て松山邊へ節々働きいつ、とも見えて古き地名なり。地形古は南の方今の神田川に及び、北は坂本・金杉の二村に限り、東は淺草・鳥越に續き、西は上野・湯島に添ひ、中央不忍池の下流東西に貫きて南北に分れし村落とれもはる。御入國の後不忍池の下流を埋られ、おしなべて平衍の水田と成し由は【羅山文集】所載、武州々學十二景の内下谷耕田の詩及同題杏庵堀正意が詩の趣にてもわして知らる。全詩下に載る聖堂蹟の條に出す其後内神田に

(野菅谷下) (岡谷下)

(勢地の古往)

在し町並を下谷へ移されしより、南の方過半外神田と成り、又西の方不忍池の南岸次第して陸地と成り、仲町茅町七軒町等の町並出來て下谷に屬し、又北の方坂本金杉三の輪龍泉寺四村に及びて下谷に屬する町並と成しゆへ地形大に變じたり。今下谷と唱ふる四城は南の方外神田に境ひ、北は小塚原中村町、東は淺草、西は湯島本郷・根津に續き、西北の間上野の地差入て最廣き地名となれり。上野町は上野の地ゆれど左にはあらず、元來下谷の内なりしを、東叡山御建立の時山内より轉地せられし町並なれば今始々下谷に附録す。又池の端仲町の邊は元何れに屬すべしとも定めがたけれど、同じつぎなる茅町を下谷といへば是も始々下谷に屬す。又坂本金杉三の輪龍泉寺の類は元來その村々に屬する地なれど、今は當今現に下谷某町といふをもてそのまゝ、下谷に附記せり。

#### 醫學館

醫學館は新橋通りに在り。明和二年、奥御醫師多紀安元が志願に依て、醫道修行の爲に醫學所を取建ん事を願ひ上しかば、同き五月廿五日、佐久間町貳丁目御預り明地元測量所蹟地の内千五百十八坪の所を賜ひ、又同き九月二日、南の方一間半通り、北の方六間通りの添地を賜はり館舎以下造立有しとなり。其後文化三年三月火災にかゝりし後、同年今の地に移轉せらるといふ。明和二年醫學館成し時の御觸書及安永二年類焼後再建寄附銀の事、天明六年寛政三年命ぜられし醫學教育條例等の事は、その頃の達書に見へたれば全文を左に録す。

(地蹟所量測)

(旨趣立設)

(誘附寄與再)

(例條有教學醫)

明和乙酉年十二月七日松平右近將監殿御渡  
御目付 安元  
右安元義此度相願右の場所にて醫道致講釋、御醫師の子弟并倍臣醫師、町醫師惣て醫道に志之輩右醫學館え罷越候儀勝手次第の事。  
右之趣向々え可被相達候。

安永癸巳年五月七日酒井石見守殿御渡

御目付 安元

寄合醫師多紀安元義、醫學館類焼に付再建致し醫道講釋是迄の通取立度候得ども、自力に及兼候に付て江戸中醫師より寄附銀有之候様に致度旨相願、尤當時學館え出席不致面々、子孫に至り出席も可致に付、何れ共年々壹貳匁づゝ寄附有之候様相願候に付て願の通申渡候。右寄附銀員數御醫師の分者存寄次第、其外御醫師の弟子并陪臣醫師町醫師惣て江戸中醫師より貳匁を限り年々寄附銀差遣候様可致候。右之通向々え可相達候。尤西丸御目付えも可有通達候。

五月

天明六丙午正月十二日 安藤對馬守殿

多紀安元醫學館再建有増出來に付、以來毎年二月中旬より五月中旬迄百日の内、諸醫師の子弟并醫道に志有之候者は醫學館の内學舎の中に爲致止宿、醫學教育致候間望の者は可罷越候。仕方は左の通候條其旨を致承知、猶又前廣に學



(書科教の館學醫)

館の役人被掛合、委細の義納得の上教育可請の事。  
 一 當午年二月中旬より五月中旬迄百日の内教育興行に付、諸醫家若年の輩出席或者致止宿教育受度輩、陪臣者其家の役人、町方者名主町役人差添、正月晦日迄醫學館へ罷越、學館役人へ掛合請人を立、書付差出上にて教育可請事。  
 一 銘々の居室より通ひにて出席致度輩者、正月晦日迄親兄弟又は身寄の者差添、學館役人へ掛合置出席可有之候。尤百日の内無懈怠致出席、講釋稽古等遂承可申旨、證人より書付取之迄にて出席爲致候事。  
 一 宅より通ひ致出席候輩者、毎日學館へ出入の刻限を相改め帳面に留置候事。  
 一 但若年の輩學館出席の體に申なし、遊山等有之候ては相濟不申候。萬一左様の義相聞候者相糺候上其段證人へ相違、學館出入の義を差留候事。  
 一 百日の内醫學館に於いて講釋會讀致候書物の儀者本草、靈樞素問、難經、傷寒論、金匱要略にて候。右六部の書は醫書の中の古書にて、何れの流義たりとも醫學の基に候間、醫家子弟講説を遂承不申候者相濟不申事に付、致日割置百日の内何れも全部承遂させ候様に規則を立置候事。  
 一 經絡穴處取り等のわざを以相傳候類者、是又右日割の内別會を立置、百日の内相濟候様に規則を立置候事。  
 一 但本草、靈樞素問三部と卷問三部者卷數多候間、常體講釋

(定規の舍宿寄)

會讀等致候て者兩三年も掛り候に付、承候若年の輩者長候間退屈いたし、一部の始終を遂承不申者も相見候。依之右の趣規則を立置候。尤傷寒論、金匱要略、難經の三部卷數少候に付日限の内半頃には講釋相濟申候に付、其後は甲乙千金外臺病源と或は格致の類承り候者望に任せ會讀又は講釋など可致候事。本學別て卷數多候間毎朝會讀いたし、靈樞素問は隔日講釋にいたし閑日下見復見も相成候様に日取を立置候事。  
 一 學館の内學舎に致止宿教育を請候輩者、右日限の内は醫學館門外へ決て出し不申候。尤役人を附置晝夜相廻嚴敷禁制いたし候事。  
 一 飲酒諸勝負其外遊藝は勿論、惣て醫學の助に不成義は詩歌たりとも堅禁制の事。  
 一 但餘念雜慮有之候ては志一圖に成不申候故學業を遂不申候間、是又役人を附置嚴敷禁制致し事。  
 一 右日限の内學館内學舎の中止宿致候輩、相應の身上に候は自分賄に致可申候。尤勝手道具等は不自由無之様學館にて取計候事。  
 一 醫學殊の外執心候得共貧窮にて其志を遂不申輩又は師匠父祖に難致世語遺候者無之習業成り兼候ものは、名主町役人より申立證人請人を立候ば、承糺の上朝夕の食事等も學館より賄遣、書物又は夜具等迄も日限の内貸遣致教育候事。

(規則)

(書願のて付に附寄)

一 學館舎中致止宿候輩、若立置候禁制を破り候者、第一不致出精者は役人吟味上證人請人を呼寄、其段相違し學舎中に差置不申候事。  
 一 但右體の輩學舎中に有之候て者致出精候輩迄其風らしうつり候間、早速證人に引渡、詫候とも決て免不申候事。惣て於醫學館中講釋并會讀いたし候輩へは醫學館にて夫々手當有之候間、教導を請候輩よりは聊の禮式たりとも請之不申候事。  
 一 右者多紀安元申立候に付相觸候。此外の儀者學館へ罷越役人へ掛合可承候。勿論以來毎年右之通に候事。  
 一 正月  
 一 右之通可被相觸候  
 一 天明六丙午年正月廿一日安藤對馬守殿御渡  
 御目付え  
 醫學館諸醫師より寄附物相集高の義、安永二己年被 仰出被下置候。初年者相應の集候處追々減少仕候。當時教育仕候手當の義者、三四年來の集高を以相考任方相立候義に御座候。然る處若此以後猶又減少仕候て者甚迷惑仕候。一體是迄の様子相考候處、町方杯別て手廣の事に付、取締無御座候故洩候者も多有之儀と奉存候依之可相成儀に御座候者以御威光取締出來仕、以來此上寄附物減少不仕候様に御聲掛被成下候様仕度奉願上候以上。

(開公の館學醫)

已十一月 多紀安元  
 寛政三辛亥年一月廿七日松平越中守殿御渡 大目付  
 多紀廣壽院醫學館毎年百日の間諸生教育の儀當分相止候。以來日々講書等有之候間、陪臣町醫等も勝手次第罷出可致聽聞候。尤委細の儀者醫學館へ可承合候。且又是迄年々醫學館へ寄附銀致し來候向々も以來差出候に不及候。  
 右之通可被相觸候。  
 寛政三年辛亥年十月 福井立助  
 醫學館へ以來折々被相越講書可被致候。尤委細之義多紀廣壽院へ相違置候間可被談候事。  
 山本宗英  
 吉田快庵  
 杉浦玄徳  
 醫學館へ相詰日々世話可被致候。尤多紀廣壽院へ可被承合候。多紀安元も同様世話可致旨相違候間可被相談候事。  
 右之通於桔梗の間攝津守殿御出座、御渡多紀廣壽院。於醫學館毎年百日の内諸生教育の儀當分相止候。以來日々講書有之候間、陪臣町醫等も勝手次第罷出可致聽聞候。尤委細の儀者醫學館へ可承合候。是迄年々醫學館へ寄附銀致來候面々は以來差出不及候。



(始開の驗試業醫)

右之通可被相觸候。

十月

寛政三辛亥年十月

於醫學館以來一々春秋兩度、醫業考試被 仰付候、典藥頭并奥向の面々法印法眼の御醫師等者相除、其後年貳拾位にて相成候者不殘可罷出候。尤春に至り日限等は多紀廣壽院より可相違候事。

右御醫師四十歳にも及候分者考試不及、出席而已可被致候。勿論難問誹謗等致し候類之事者一體有之間敷筋に候間、留意なる心得たがい無之様可致候。醫學館え常々修行として罷出候ものは考試者無之儀にて候事。

右之通惣御醫師中え可被相觸候。

十月

寛政三辛亥年十月

醫術家業の者出精いたし候様近來度々御世話も有之故、無油斷修行可致候事に候得共、其内に者相應の師も無之、又者ひろく療治等可致存候ても病家數少く、或施藥等之費行届兼候類にて志有之候ても不得止事修行成就不致者も有之哉候。依之此度醫學館に於いて夫々世話致候者被仰付候間、出席の面々より醫學治療相談致可被申候。品に寄施藥之儀も出來候の様手當被成下候。寄合小普請の御醫師中を始子弟の類、且當時御奉公相勤候者も篤志之輩者一同出席可有

(勳獎の研究術醫)

之、惣て醫職の分至て重き事に付精々厚く鍛練有之度義候、乍然流義見識等一同には無之事に候間、入學の外出席の面々は問見を廣め治療の相談等致候譯に付、心得たがい無之彼我を存せず、相互に學業治療研究いたし、其道精熟候之様可被心得候。尤諸科同前たるべき事。

典藥頭并奥勤の面々、法印法眼の御醫師の分者罷出候に不及候。乍然已達の上にて問見を廣め候の儀は第一の事に候得者、出席可仕と存候ものは勝手次第の事に候。其餘出席致し難き面々は其譯支配中え可被書出候事。

右之通惣御醫師中え可被相觸候。

萩藏 附町々積金取立會所

(所會立取金積)

萩藏は醫學館の南に在り。町方非常御救の爲として寛政四年新に建させらる。打續て新大橋向及柳原堤内にも建増せられしなり。當所御構内に御役所ありて、町々積金の取立及御貸金の進退をなし、且困窮者への扶助米錢をも施し與へらる。

不忍池

不忍池は見たし三四丁ほど、源は谷中千駄木の谷々の流をうけたり。往古は下谷の岡村々の用水堀といへり。〔江戸〕昔此邊萱薄れひ茂りて道の境も分ざるに、此池ばかり顯れて見へたるゆへ、忍ぶ事のあたはざるの心にて不忍池

(堀水用は元)

(來由の名の池)

と云ふ。〔江戸名所談〕又一説に、まのばず池はまのぶが岡につゞきたる池なるゆへしのぶが池なり、それをまのばずといふばば文字を父としす文字を母としてかへしを見ればふ文字なり、忍はすの池にはあらで忍ぶなりと。〔鳥の〕北條家分限帳をみるに太田新六郎廣澤のうち代山根岸甘貫文を領せよしみゆ。此代山者今その地名を傳へれど、江戸古圖にも池の傍に代山村といへる地名をのす。又〔分限帳〕に同人の領地として江戸廣澤三の村百六十七貫文の地といふ。是によれば代山根岸は廣澤の内の村名にて、この餘三村の外にも村々ありしなるべし。是みな太田道灌よりの舊領にて、北條の比新六郎の所領なりしと見るべし。此廣澤といへるは今の不忍池ありてよりの名なるべし。是らによりてかんがへみればことの外廣き地なりしともおもひまらる。〔改選江戸志〕今按に廣澤は坂本村の古名なるよし其地にて傳へ、根岸

(村山代)

は金杉村の小名に今も存すれば、代山も何れその近き邊の地なるべし。〔風土記殘編〕に篠輪津池真鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺鷺鴨等。周行十里許程。旱水不涸。霜雨不爲害。祈早雨人詣于茲。祈祭瀬織津比咩也。と載たれど、此書は後人の偽書なるよしへば信じがたし。殊に瀬織津比咩と書しは今の天の祠の事なるべけれど、かの祠は正しく後年の勸請にして、その説の齟齬せる事辨を待ずして明けし。

(岸根)

〔改選江戸志〕今按に廣澤は坂本村の古名なるよし其地にて傳へ、根岸は金杉村の小名に今も存すれば、代山も何れその近き邊の地なるべし。〔風土記殘編〕に篠輪津池真鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺鷺鴨等。周行十里許程。旱水不涸。霜雨不爲害。祈早雨人詣于茲。祈祭瀬織津比咩也。と載たれど、此書は後人の偽書なるよしへば信じがたし。殊に瀬織津比咩と書しは今の天の祠の事なるべけれど、かの祠は正しく後年の勸請にして、その説の齟齬せる事辨を待ずして明けし。

(祠の天)

〔改選江戸志〕今按に廣澤は坂本村の古名なるよし其地にて傳へ、根岸は金杉村の小名に今も存すれば、代山も何れその近き邊の地なるべし。〔風土記殘編〕に篠輪津池真鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺鷺鴨等。周行十里許程。旱水不涸。霜雨不爲害。祈早雨人詣于茲。祈祭瀬織津比咩也。と載たれど、此書は後人の偽書なるよしへば信じがたし。殊に瀬織津比咩と書しは今の天の祠の事なるべけれど、かの祠は正しく後年の勸請にして、その説の齟齬せる事辨を待ずして明けし。

(域流)

不忍池より落る流なり、是三味線堀へ落る流也。〔江戸志〕按に此川元黒門町と仁王門前町との西より分流し、三橋の下を流れて下谷町一丁目と上野町二丁目の間を通し、それより三枚橋上の下を流れ、立花左近將監屋鋪の構堀に注ぎ、その末二派と成り、一は佐竹右京大夫屋敷の邊より三味線堀に落入り、一は織田出雲守屋敷の裏より東流して淺草新堀に落入り。忍川と唱ふる處は立花氏の構堀より上流の呼名なりと云。

忍ヶ池

忍ヶ池は〔江戸志〕云、一柳家の裏の方より河野家の屋鋪にかゝりし池、むかしは大なる池なりしを近き比うめ立しかば、一柳家の方の池はことにわづかのほど残り、ふるくは不忍の池と一ツにつゞきしを、いつの比にや別に築き隔て忍ヶ池と名づく、こゝに池の神を祭りこめしなどもいひ傳へり。按に此池まのばずの池とひとつらなりしといふはうけがひがたき説なり。古代は此邊廣澤といひてすべて澤なりしとみゆれば、この所もそのなごりにて、まのづから池となり今に残れるならん。〔改選江戸志〕

忍川

不忍池より落る流なり、是三味線堀へ落る流也。〔江戸志〕按に此川元黒門町と仁王門前町との西より分流し、三橋の下を流れて下谷町一丁目と上野町二丁目の間を通し、それより三枚橋上の下を流れ、立花左近將監屋鋪の構堀に注ぎ、その末二派と成り、一は佐竹右京大夫屋敷の邊より三味線堀に落入り、一は織田出雲守屋敷の裏より東流して淺草新堀に落入り。忍川と唱ふる處は立花氏の構堀より上流の呼名なりと云。



三味線堀

(蹟遺の池忍不)

佐竹家の屋敷の前を云、淺草鳥越よりの入堀なり、堀の形ち三味線に似たればいつの比よりかかく呼り。〔江戸〕今按に此堀も昔不忍池につゞきし流れの遺蹟なるべし。今も忍川の下流こゝに注ぎて水源と成れり。此堀高橋の下より松平下總守屋敷の西側を南流し、同屋敷の南にそひて東流と成り、松浦壹岐守屋敷の北境より淺草鳥越明神前其内橋の下にかゝり、同所の猿屋町東にて新堀と合流し、その末淺草川に落入り。

幡隨院舊井

(水龍妙)

池の端板倉家の屋敷の角なり、此所幡隨院の舊地なり、妙龍水の名残にて名水なり。〔江戸〕今按に幡隨院の舊地は板倉越中守の屋敷なる事勿論なれど、何れの井妙龍水たりしや詳なる説を聞ず。〔砂子〕に屋敷の角と書しは誤なりと云、いづれ屋敷の内なるべし。

鏡ヶ井

(井のみか慶辨)

茅町の内也。世に辨慶かゞみの井といひて甚名水なるよし。〔江戸〕今按に此井詳ならず。

長井堤

(庄井長)

池の端仲町邊は昔不忍池の堤のよし、此地古く長井庄と唱へしゆへ、此堤をもかく呼ひしなどいふ説あれど正しき據なし。又齋藤別當實盛が事蹟など附會せる説もあれど、もとより無稽の事にして、齒牙の論に入べき説にあらず。

姫塚

立花家の屋敷のうちにあり。大なる池ありてその所に塚ありといふ。〔江戸〕

無縁坂

松平加賀守の屋敷につき、榊原式部大輔の下屋敷の裏門へり、まのばすの池のはたへ下る坂をいふ。〔案〕こゝに無縁寺のあるゆへ名付しと云。〔江戸〕

三橋

廣小路元仁王門前にて忍川に架せり、三橋並ぶあるゆへ呼名とす。中の橋は御成道にして幅六間餘あり、左右は幅貳間許、三橋共長三間餘の板橋なり。

一枚橋

和泉橋通の往還にて忍川に架せり、昔一枚の石にても渡せしにや、その名の起るゆへを詳にせず。今は數枚の石を

もて渡せる橋なり。

三枚橋

(橋味三) (道水高) (辨のと橋三と橋枚三)

一枚橋より西の方中御徒町通にて同流に架せり。是は板橋なり。〔江戸志〕に云、土人云、往古此所に三味の場なりしゆへもとの名は三味橋なりと。今三枚橋といへるは一は和泉橋の通の石むかしは谷中の方より水道のかゝりし故此所を高水道と云、その次の橋ももと石橋なりしが近世類火の爲にそこれて今は板橋なり。今ひと所も板橋なり。世の人上野の黒門前にならふ處の三橋を三枚橋と誤れり、三枚橋は是より東の方なりと。按に今も土人三所の橋をすべて下谷の三枚橋とばへたれど謬なるべし。現に御徒方組屋敷の地名に、三枚橋通と一枚橋通を分ち記してこれのづから二橋の名とせり。れもふに昔此橋三枚の板などかゝりしゆへその名と成しを、後人誤り傳へて三所の橋の名といひ來りしにあらずや。

石橋

三枚橋より西に當り東西の往來に在り。是も同流に架す。里俗代官橋と稱す。

寛橋

(橋神天) (下山)

石橋にて同流に架す。上野町一丁目二丁目之間にあり。名義詳ならず。

高橋

佐竹右京大夫屋敷と松平下總守屋敷の間にて、三味線堀に架せり。板橋長五間、幅三間、里俗天神橋とも唱ふ。

山下火除明地

東叡山の側なれば山下と呼べり。元文二年火災の後、山内火除の爲として明地になし定めらる。その詳なる事は明地預り下谷町壹丁目、二丁目、車坂町より出せし書上にみへたり其全文下に載す。當所は兩國橋廣小路と同じく種々の見世物やうのもの及土弓場等を設け、又壹荷賣の商人常につとひて殊に賑はへる地也。

上野山下火除明地

一 火除地起立の儀者元文二巳年中大火にて類焼の場所、下谷町貳丁目の内町屋井正法院其外七番組御徒行組屋敷等上野御火除御用地被召上候廣場に有之、延享五辰年四月十五日、町御奉行能勢肥後守様下谷壹丁目、同貳丁目、下谷車坂町月行事共被召出、右三ヶ町え被遊御預見守被仰付候。然る處右場所え近邊のもの壹荷賣商日覆葭簀張致差出し申度旨奉願、御聞濟被成下、尤十ヶ年宛に年季にて御願濟に有







(野上見え見に帳役原田小) (森ヶ忍・岡ヶ忍) (説ふいとむ因に野上賀伊)

その地の似たるに依て上野とよぶ、伊賀の上野にも車坂清水坂など、當山の同名の所ありと云々。【江戸】【江戸志】に云【砂子】の説甚非なり、北條家の舊記に上野金杉と書たれば古き名にて、藤堂家宅地の前よりの名なる事明かなり。天正の後此地は津輕越中守藤堂和泉守堀左京亮三家の屋布となりしこと、此地の古老傳へけるよし此所の老人にきけり。まかれば藤堂家計の屋敷にもあらず、本名は忍ぶか岡、あるひば忍が森ともいふ。又云、往古は廣野なるゆへ下谷に對して上野といひならはせしなるべし。今按に上野といへるは古き世よりの地とみて、【小田原役帳】に木内宮内少輔拾八貫貳百文江戸上野及島津總四郎五貫七百文上野内法林院分圓城寺拾八貫貳百廿文江戸上野と出たり。是にても【砂子】に藤堂家此地を賜ひしよりの名とする事固り論ずるに足らず。又上野町の傳へに、彼町は元上野の内西の方忍ヶ岡邊に在て二羽村と稱せしゆへ、彼所の稻荷も二羽稻荷とも號するといへり。こは上野村内の小名にや、他に所見なき説なり。猶上野町に記す條合せ見るべし。

忍ヶ岡

忍か岡東叡山の邊をすべといへり。此地は古き世よりの名所にて、【八雲御抄】【歌枕名寄】等の書にも皆武藏國の名所とす。古歌にあらはるる所左のごとし。

(松の雨時松古の内山叡東)

誰ために忍の岡の下賦烟はたへすもえわたるらん 藤原俊成  
拾玉集  
わか戀は忍ふの岡に秋くれて穂に出やらぬまの、小薄  
夏きてもまのひの岡の時鳥猶木かくれに五月まつ也 藤原知家  
人めもるまのひの岡にかる草のあなま露に袖のぬるらん 同  
堀川百首  
まほる、をまる人もなき袂かなこれや忍の岡のかけ草 河内  
夫木集  
穂に出てまねくとならは花す、き何か忍の岡に立ちん 讀人あらず  
同  
たくれに忍の岡の花す、き絶すも誰をまねくならん 源 雅 兼  
同  
妻戀やわかかならん壁立て忍の岡にをしか啼なり 刑部卿兼  
待人をなとかたははて時鳥ひとり忍の岡にならん 法印覺寛  
あられしな忍の岡の初草のはつかなるよりもゆるもむを 後押小路  
按に已上のうたのごとき、みな此地にて讀出しといふには 前内大臣  
あらざれど、諸書に武藏國忍の岡のよしのすれば、すなはちこの地にあつかることなれば、わずらばしきもはぶかでのせぬ。むかしは忍の岡とのみとなへしと見ゆ、忍か岡といへるは後のことと見へし。【回國雜記】云、淺草を立て新羽といへる所にもむき侍るとて、道すがら名所ともたつれけるなかに、忍の岡といへる所にて松原のありけるかげにやすみて、案に、今の東叡山のうちにある古  
霜のうちあらはれにけり時雨をば忍の岡のまつもかひなし  
按に世に時雨の松といふはこの歌よりたこりしなるべし、されど是は後人のみだりに名付しものにて、まさしく是といふことはさしがたし。【木戸孝範家の集】に、按にこの人は師より江戸に來り、隅田川のはとりに住せしなり。

(城持の谷扇杉上)

きのふきて忍の岡のはるの色世にあらはれてたつ霞かな【北國紀行】云、武藏野の末のさかい忍の岡に優遊し侍る、鎮守の社五條の天神と申し侍り、わりふし枯たる茅原をやり侍り、

契りをきて誰かは春の初草に忍の岡のつゆのしたもえ

忍岡城蹟

忍か岡城跡はこの邊なりといへどその趾を傳へず、またまさしき書に此城の沙汰あることを聞ず。【武江志】云、上野忍岡にあり。むかし上杉扇谷流の持城の跡なり。いまの東叡山の地これなりと。これによればことに廣き城地なりしやうにみゆれどうけがひがたし。又【三國志】といへる書に、天文六年、武藏の大守上杉扇谷修理大夫藤原朝興、北條に數度の合戦をとげ雌雄をあらそひ給ふといへども、終に利なふして武藏忍岡の城をも攻落され、河越の城に落ちこもり、時節を待て居給ひけるとなり。

按に此忍か岡の城といへるは、上杉北條家の記録ならびに廢城のまるせし諸記にもいまだきかず、【三國志】はもつとも信用有べき書ともはれず、又【武江志】はこれによりてあるせしもあるべからず。【改撰江戸志】

忍の森

(門春道) (記殿聖先州武)

忍の森も此邊なるよしなはいへどまさしきことをまらず。【江戸志】にも忍ヶ岡の條に森の歌を引たれど、同じ地なりしといふことはいかゞあるべき。忍の森も當國の名所なることは古くより傳ふる處なり。【枕草紙】に森は忍の森とす。【歌枕名寄】にも當國の名所なりといふ。古歌に、作者まらず、  
人まれすあはれとそきへ時鳥忍ひのもりのゆふくれの聲  
顯昭のうたに、  
涼しさをならの葉風にききたて、忍の森に秋やきぬらん  
【蜘蛛草藁集】云、東叡山もとは植野又は忍の岡といふなり。池は丹穂の海を見ることくなり。池の向ひをば忍の森といふこと申し傳るなり。その森もはほくの大名の屋形の地となり侍りと。是延寶天和のころいへるなり。【改撰江戸志】

聖堂蹟

寛永十年、於豊島郡上野聖堂創立あり。【寛永】今の東叡山中車坂の方その舊地なり。此處の門を後の世迄も道春門などいへり。【江戸志】  
武洲先聖殿記  
昔孔子没後。戰國紛擾。秦項爭亂。漢高祖平天下。過魯以太牢祀孔子。孔子雖千古之聖而不得其位。漢祖者萬乘之主。太牢者祀王者之禮也。以萬乘之貴而祀孔子用王者



之禮。可謂尊奉聖教之至矣。其開四百年之洪業。宜哉。禮曰。釋奠于先聖先師。後世建學。釋菜于孔子而追王之。則濫觴于漢祖。其禮考中華歷代之志可以見焉。我朝自古崇儒教久矣。敏達帝甚愛文史不好異端。天智帝龍潛之時。與大織冠共學周公孔子之訓於南淵氏。至于文武大帝大寶元年。詔始釋奠。聖武帝勅吉備公稽其儀。據禮典益備器物以設禮容。自是以來。有大學。有東宮學。有國學。其釋奠春秋二仲用丁日。使博士諸生論經義。或賜宴。或授爵。或受祿。世世例爲恒式。誠治世之巨典。太平之盛事也。雖然近代國在艱虞。人亦多岐。故儒禮之名僅朔羊而已。慶長之初。

源大君。撥亂反正。闔國一統。文武相統。威惠兼施。以駿城爲麾下之天府。予奉仕之有年矣。嘗請營家塾。聽相其攸。有事不遂。會

大君棄群臣。歷十餘歲後。庚午之冬。幸蒙 鈞命得賜其地于武之上野。且辱受兼金之恩賚。乃雇工構小塾立書庫。於是尾陽亞相源義直卿。有勇爲之盛志。經始一廈。置聖像及顏曾思孟像。號曰先聖殿。又其祭器具備以賞之。予拜其嘉惠之厚。雖古之國學不能加也。孟子曰。夏曰校。殷曰序。周曰庠。學則三代共之。皆所以明人倫也。嗚呼。倫理綱常之不泯滅者。誠賴孔子也。誰不尊親哉。是又今日治平全盛之功效也。至敬無詞。故系之以詩。其詩曰。

(詩景二十學州州武山羅)

道叙三綱家國全。學因四代古今傳。牢祠草創卯金日。釋奠權輿大寶年。威鳳感時雖避地。袞龍贈位久飛天。武州精舍雀相賀。聊採溪毛可薦籩。

寬永癸酉二月丁卯五日

道春拜書

武州學十二景

羅山道春

廟前一路萬杉中。靈蹟和光鎮日東。社雲飛歇早闕。爭如山樹舞仙風。

金城初日

金城初拂若華枝。碧瓦朱甍相映宜。東西仰觀滄海曙。影流郭外浴賜池。

靈池皓月

水有寒光月有陰。一波不動鑑空心。清冷分得文王沼。夜色明々白鳥沈。

下谷耕田

雨餘銍艾不漁鱗。便是井田恒產民。滿畝始疑移嶮谷。一聲榔笛一犁春。

南隣管祠

我國儒宗餘美談。有隣有德祭管三。靈梅千里度東海。牆外一枝開自南。

東海征帆

風順波平東海濱。飛帆片々欲通津。櫓前若匪蝦夷使。舶

上應須登國人。

武野烟草

野草連天烟尚澗。眺中逸興又堪乘。武洲到處風光好。非霧非花氣似蒸。

淺草花雲

春風無日不登臨。花靄漫々吹我襟。門外薄霞紅錦厚。窓前淺草白雲深。

筑波茂陰

歌興筑波名共傳。茂陰不改幾千年。世間新綠遇秋早。常見斯山夏木天。

隅田長流

不盡長河何處歸。隅田岸遠意依々。將臨流水濯吾足。都鳥羽飛如振衣。

土峰晴雪

東國雲間建雪宮。仰瞻士嶽聳蒼蒼。烟嵐萬似六花落。盛夏蔭涼桑城中。

房洲遠山

山在房陵路更遐。一邦傍海望天涯。片雲似鳥迢々綠。髣髴仙人三朵花。

武洲學十二景

神廟風杉 杏庵正意 廟貌儼然鎮武岡。舟車所及仰神光。風杉蒼蔚瑞籬裡。天

(詩景二十學州州武庵杏堀)

下着生倚蔭涼。

金城初日

金城屹立聳蒼穹。若本添光出日紅。含氣皆懷溫煦惠。萬邦景仰盡朝東。

靈池皓月

廟下靈池無點塵。清波涵月見天真。跳魚潑刺似鑪鑪。水鑑鎔成萬片銀。

下谷耕田

千村東作事西疇。下谷膏腴百頃俸。春雨一犁無價寶。明珠萬斛稻梁秋。

南隣管祠

東海儒宗管姓神。欲開來學待其人。孔堂今應文明運。德不孤兮必有隣。

東海征帆

東溟渺々望無涯。萬里征帆如布棊。海外奇珍皆稱載。祇今感德 蠻夷。

武野烟草

武陵四望不看山。島々輕烟生草間。恰似黃雲成穗起。可偷浩老九衢間。

淺草花雲

淺草花深佳景新。紅雲處々超香塵。金枝玉葉呈祥瑞。不減軒皇上世春。



御府内備考卷之二十一

下谷之二

下谷町壹丁目

筑波茂陰  
筑波自古表東方。茂樹陰々滴翠光。一朶八洲青未了。幾  
多行客借清涼。  
隅田長流  
鳥吟既入在原篇。木母今在博陸箋。靈地有天然要害。長  
流遶郭萬斯年。  
士峰晴雪  
見說三洲環一山。四時白雪映東開。千秋西嶺今猶古。窓  
几含光夕照間。  
房洲遠山  
東望房陽海面平。白雲生處遠山橫。淡粧何擬文君黛。直  
筆可傷唐帝情。  
【江戸鹿子】  
以上丁亥編次

(領田畝) (足人用御野上)

一 右者往古御代官伊奈半左衛門様御支配所、武州豊島郡畷田  
領下谷村に有之、金子三郎兵衛、恩地惣兵衛と申者名主の由  
にて、慶長十八年奉願、元和五未年中町屋起立仕、當時上  
野仁王門前町、同所北大門町切レ地瀬川屋敷邊より車坂下  
邊迄町屋に有之、下谷町壹丁目、貳丁目、三丁目と唱。正保元  
申年東叡山御門前地に被仰付、御年貢無之、御役に上野御  
本坊御用人足、同御山内掃除人足差出候處、元禄十一寅年九  
月類焼仕、寺社御奉行松平日向守様御掛りにて、當町東側  
地面拾ヶ所相殘、其餘西側壹丁目、貳丁目分三丁目分東西兩  
側共御用地に被召上、右替地の儀は筋違御門内武家方立跡  
并西久保御武家方立跡、其外下谷長者町貳丁目續壹ヶ所、  
屏風坂下下谷車坂町續壹ヶ所、都合四ヶ所にて代地被下置、  
翌卯年十月中代地町名相改申度旨右町より奉願、筋違内は  
神田小柳町壹丁目、貳丁目、三丁目并西久保新下谷町と唱、  
外貳ヶ所は下谷町代地と唱、引續上野御役人足相勤申候。  
然る處其後無程當町内續右立跡上野御殿付御地所并同御家

御府内備考卷之二十一 終

(町竹)

(るらげ上取を所地爲の奕博)

(橋寛)

來方拜領屋鋪に相成候分、下谷町貳丁目と相唱申候。  
町内里俗竹町と相唱申候。  
町内東西二貳拾六間三尺、南北北四拾九間六分。  
但片側町に有之候。  
隣町東の方御徒組屋敷、西の方<sup>黒門前上野役人屋敷</sup>、  
南の方上野町、北の方下谷町貳丁目。  
町内東側南角より五軒目表田舎間三間五尺六寸六分、裏行  
拾壹間一尺六寸、此坪四拾四坪餘の地處、播磨屋藤三郎と  
申者所持いたし、同人父吉右衛門住居仕候處、博奕一件に  
て寛政元酉年七月中遠島被仰付、地面御取上ヶの上北御番  
所御掛り當時上納地に相成申候。  
自身番屋  
右寛文二寅年中より有來り候由申傳、間口三間半、奥行貳  
間、此坪七坪、火の見無御座候。  
忍川  
右不忍池落水町内南の方上野町堺を流候。川幅九尺程有之、  
忍川と相唱申候。  
石橋  
右忍川懸り候石橋寛橋と唱、幅壹丈壹尺、渡り壹丈貳尺  
有之、寛文二寅年中御入用にて相掛り候旨申傳候所、文化  
十四年三月十五日出水にて橋損し候に付、御普請方御役所  
へ御訴申上候得者、已來市中掛に被仰付候に付、橋より北

(水上川千)

當町内上野仁王門前町、同南上野町貳丁目、下谷常樂院門  
前と四ヶ町組合掛ヶ直し修復共仕候。  
一 東叡山御目代田村權右衛門支配所にて元寺社御奉行御支配  
の處、延享二丑年より町御奉行御支配に相成申候。  
一 安永八亥年中、千川上水相掛候得共無程相潰し、當時右之  
形相見不申候。  
以上丙戌書上  
下谷長者町續  
下谷町壹丁目代地  
町名の起り、草分人の儀は前書元地に申立候通りに御座候、  
地面壹ヶ所にて表田舎間九間貳尺八寸、裏行南拾八間貳尺  
八寸、北拾八間。  
隣町東の方御徒組屋鋪、西の方<sup>長者町續、  
上野御家來屋鋪</sup>、  
南の方長者町貳丁目、北の方長者町貳丁目。  
以上丙戌書上  
屏風坂下  
下谷町壹丁目代地  
一 町名の起り、草分人の儀は前書元地に申立候通りに御座候。  
一 地面壹ヶ所にて表田舎間貳間五尺、裏行南拾間三尺、北九  
間四尺。  
一 隣町東の方日蓮宗蓮花寺、西の方屏風坂下町、南の方下谷  
車坂町、北の方屏風坂下上野神入屋鋪。  
以上丙戌書上



下谷町貳丁目

(村谷下) 一 往古豊島郡畷田領下谷村にて、元和五年町屋起立、下谷町壹丁目、貳丁目、三丁目と唱候所、元禄十一寅年九月類焼仕、壹丁目分地面十ヶ所相残り、其餘御用地に被召上、替地町名神田小柳町、西久保新下谷町と唱、右立跡え同年月日不知上野御殿付地所并拜領町屋敷出來仕、引残り候下谷町壹丁目續に付同貳丁目と唱候儀に申傳候。尤公役御年貢并諸役共相勤不申候。是又其後元文二巳年類焼の節、町内山王下の場所百三拾七坪の所上野御火除地に相成、車坂下にて替地相渡り、此分切レ地に相成申候。

(町竹) 一 町内里俗竹町と唱申候。

(地除火野上) 一 町内東西え四拾間餘、南北え六拾五間餘。但兩側の内間數不同に有之候。

(下天山) 一 隣町東の方御徒組屋敷、西の方東叡山、南の方下谷町壹丁目、北の方山下火除地。

一 町内東側表京間拾九間五尺、裏幅拾九間貳尺餘、裏行南の方拾三間、北の方拾間餘、此坪貳百廿四坪餘、上野御殿付御地所にて上り高御納戸入に相成申候。

但山王下と相唱申候。

一 町内東側南角表京間拾五間壹尺五寸餘、裏幅拾三間四尺餘、裏行三拾間餘、此坪四百四拾坪、不忍辨天別當生池院付地

(店院池生) 一 所に有之候處、當時別當無之、上野御兼帶所にて御殿付御地所に相成、上り高御納戸入に相成申候。

(店燈挑) 一 但生池院店と申候を挑灯店に申候。

(屋長村田) 一 同貳軒目表京間貳拾貳間、裏行三拾間、此坪六百六拾坪餘、東叡山御目代田村權右衛門先祖拜領仕候。

(店佛・町横みやろく) 一 但田村長屋と唱申候。

(坂車) 一 同北角表京間拾八間四尺、裏行南拾四間三尺、北拾四間四尺、此坪貳百六拾坪、上野御宮社家金子主馬先祖拜領仕候。

(水上川千) 一 西側北角表京間拾八間貳尺五寸、裏行南拾三間壹尺五寸、北拾五間、此坪貳百六拾坪、上野御宮社家渡邊雅樂先祖拜領仕候。

但右同斷

一 町内車坂下切地表京間拾四間、裏行西九間五尺、東拾間壹尺、此坪百三拾七坪餘、上野御殿付御地所にて右同斷。尤元山王下日蓮宗啓運寺西表に有之候所、元文二巳年類焼の節上野御火除に相成、當場所にて替地出候由申傳候。

但車坂と相唱申候

一 右切レ地隣町東の方御徒組屋敷、西の方東叡山、南の方御徒組屋鋪、北の方正法院門前。

一 安永八亥年中、千川上水相掛り候得共無程相潰れ、當時右の形相見え不申候。

(屋具香) (し廻まこ) 一 東叡山御目代田村權右衛門支配所にて元寺社御奉行支配の所、延享二五年中より町御奉行御支配に相成申候。

(計主島田) 一 右竹澤藤司と申もの香具渡世香具渡世 傳兵衛店、こま廻しいたし來り候様、御見田名瀬伊織様御掛りにて文政元寅年十月九日、西御丸様 御成先王子稻荷境内え初て罷出、こま廻し奉入上覽に、其後爲御褒美白銀壹枚被下置候。

(衛兵權屋島田) 一 右權兵衛先祖田島主計と申者、慈眼大師御在世の節、御家來にて御宛行三人扶持被下置、所々御供仕候處、及老年候に付町宅仕度旨相願、寛永十四巳年十一月より町方住居仕、田島屋權兵衛と相改、其砌より上野御本坊御飭松御用被仰付、九拾貳才にて萬治二亥年三月十二日病死仕、貳代目梓庄右衛門事權兵衛と相改相續仕、尤御扶持の替り御山内落葉枯木被下置、其後年月不知、御殿付御地所家守被仰付、唯今以御飭松御用相勤、七代相續仕候。

但慈眼大師御染筆等持傳候得共、度々類焼にて焼失仕候。

以上丙戌書上

(村谷下) 一 往古下谷村の内、當時上野山王下日蓮宗啓運寺東の方に同寺罷在候處、元文二巳年類焼の節上野御火除に相成、當場

(屋香戸木) 一 所にて替地被下置、翌午年五月中寺社御奉行牧野越中守様え奉願、南の方貳拾三間貳尺餘、西の方拾三間餘、裏行六間の門前町屋被仰付、尤公役御年貢諸役御年貢公役共相勤不申、元寺社御奉行御支配の所、延享二五年中より門前町屋町御奉行御支配に相成申候。

一 町屋間數北側表門相除き貳拾三間貳尺餘、東側裏門相除拾三間餘、貳方共裏行六間。

一 隣町東の方下谷車坂町、西の方東叡山、南の方下谷貳丁目、北の方御徒組屋敷。

一 町役の儀は下谷町貳丁目え籠り相勤申候。

一 門前町屋南角木戸番屋間口六尺、裏行九尺、此坪壹坪半、南西貳方三尺の板庇付御願濟、起立相知不申候。

以上丙戌書上

(傳昌川瀬師歌連) 一 瀨川屋敷

一 町名起立の儀十六年以前迄下谷貳丁目内に相籠候處、同文化八未年十一月八日權屋與左衛門役所にて、下谷町貳丁目の内御連歌師瀨川昌惇殿拜領屋鋪、此度より地面限り町用相勤候に付、町名の儀は已來下谷町貳丁目の内瀨川屋敷と相唱可申旨被仰渡候。此段御達御座候已後、則瀨川屋敷と相唱申候。

一 表間口貳拾七間、裏行南の方に貳拾三間、同北の方に



拾九間、總坪數五百八坪有之候。  
一 町内 東西貳拾三間、南北東之方にて二十一間、西北西之方にて二十七間。但表門構間數除之。

但西北角出張少々有之。

一 隣町東の下方谷町貳丁目、西の方上野御山内、南の方上野北大門町、北の方、少シ東を寄下谷町貳丁目。

一 右町拜領の由來は瀬川昌惇先祖昌佐儀、

大猷院様御代、御夢想開御連歌御會の節御連歌師に被召加、唯今の地所寛永十五年十一月朔日拜領仕候旨、昌惇より承知仕候。

五條天神  
天満天神  
合社 瀬川昌惇持。

以上丙戌書上

上野山下庇床請負場所

一 上野御山下通り庇床請負起立の儀は、百四拾壹年巳前貞享三寅年中、寺社御奉行坂本左衛門佐藤御勤役中、五郎兵衛と申者初て奉願上、山王御山下木戸際より坂本御門迄の所間數五百九拾間の處え、壹間と九尺庇床入夾但し庇之下り四尺、椽幅三尺、奥行三尺、庇床百五拾ヶ所御願申上、御開濟に相成候。右地代徳用を以往來道造半分通り并御圍掘定浸ふがらみ御普請請負仕度旨御訴訟奉申上候處、御吟味の上御開濟に相成、引續請負仕來り候處、享保三未年請負場所

(地用御除火)

類焼仕、其儘貳拾ヶ年間火除御用地に被召上、請負人共難澁主極仕候に付、又々九拾ヶ年巳前元文二巳年中、寺社御奉行大岡越前守様御勤役中御訴訟奉申上候處、御吟味の上先規の通御請負可仕旨被仰渡、唯今迄相續仕來り候事。

一 請負場所の内建置申候庇床、古來願濟は百五拾ヶ所に御座候處、當時庇床百拾四軒有之候。

一 請負場所の儀は上野御目代田村權右衛門支配に御座候。尤不時の儀出來の節は御添鑑を以町御奉行所へ御訴訟奉申上候。

以上丙戌書上

長者町  
車坂町

(足人用御野上) (町下本坂新)

一 町名起立の儀は寛永元甲子年中東叡山御建立在之、同三丙寅年中同所東の方にて下谷坂本通車坂下町屋に相成、御門前地に被仰付、新坂本下町と相唱、其後年月日不知、右者車坂下町屋辻下谷東坂町と相唱、尤も其砌は壹丁目貳丁目・三丁目と相分ヶ候由、御年貢無之、上野御本坊に御用人足井御山内掃除入足爲御役と差出申候。然る處元祿十一戊寅年六月中、右町内西側四間通御用地に被召上、下谷長者町通御徒町にて代地被下置、其節の町名下谷車坂町代地と相唱候由。然る處同年十二月中、元地の分も不殘所々え代地に相成候に付、當所代地名目相唱不申由に御座候。當時地面數

(錢水の水上川千)

七ヶ所に相成申候。尤當所御徒御組屋敷立跡の由に御座候。一 町内東西兩の方にて拾六間三尺、南北三拾九間五尺五寸四分。但片側町。

一 隣町東の方長者町貳丁目、西の方往來隔井上筑後守殿屋鋪、南の方上野南大門町、北の方上野御家來屋鋪。

一 町内道幅申程え千川上水の樋御座候。右は天明六年正月よりと相見へ、町入用押切帳面に正月分より水錢月々四百四文宛、同年十月迄差出し來り候得共、其餘は無御座候。

一 往古は御代官伊奈半左衛門様御支配所にて、寛永九申年東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行御支配の處、延享二丑年二月中町方御支配に相成申候。

以上丙戌書上

屏風坂下  
車坂町

(足人用御野上) (町下本坂新)

一 町名起立の儀は寛永元甲子年中東叡山御建立有之、同三丙寅年中同所東の下方谷坂本通車坂下町屋に相成御門前地に被仰付、新坂本下町と相唱候由。其後年月日不知、右車坂下町屋辻下谷車坂町と相唱、尤其砌は壹丁目・貳丁目・三丁目と相分候由、御年貢無之、上野御本坊御用人足井御山内掃除入足爲御役と差出申候。然る所元祿十一戊寅年六月中右町内西側四間通り御用地に被召上、下谷長者町通御徒町にて代地被下置、同年九月六日下谷邊出火の節車坂町も類

(所手切御) (所足具御)

燒仕候處、中堂御建立被遊候に付御山内寺院方下通りえ御替地に相成候に付、一圓御用地被召上、同年十二月中醫願寺前土井周防守様立跡にて壹ヶ所、同所西尾八兵衛様立跡にて壹ヶ所、柳原佐久間町裏通りにて壹ヶ所、下谷の内にて四ヶ所、西久保にて貳ヶ所、爲代地被下置候。私共町内の儀下谷四ヶ所にて貳ヶ所、内壹ヶ所は上野屏風坂東の方裏通、東側南角にて地面貳ヶ所元坪の通り代地被下置候。并殘壹ヶ所の儀は下谷御切手町西の方にて地面數五ヶ所元坪の通り代地被下置候。尤其後五ヶ所の内壹ヶ所を貳ヶ所に割賣仕候に付、當時地面八ヶ處に相成申候。尤當所何の立跡に候哉申傳等無之候。

一 隣町東の方通隔御具足所、西の方往來東叡山御構、南の方町内續き御具足町、北の方横町隔養玉院。

一 町内南北八拾六間貳六尺寸片側町屋にて奥行西の方にて十五間、北の方にて二間三尺、但中間往來間數除之。

一 隣町東の方町内續き天野京太郎殿屋敷、西の方通り隔屏風坂下町、南の方横町隔武州豊島郡畷田領、北の方町内續下谷町代地。

一 町内南北間口貳拾壹間五尺、南北南の方十三間五尺、北の方にて十間三尺、拜領町屋鋪貳百坪貳合九夕餘御數寄屋坊主、味岡清宜

一 右は高田道甫上り屋鋪、享保六丑年六月廿七日先祖味岡清宜拜領仕候。其後當清宜迄五代に相成候。



但右拜領地町内え加り候年代相分り不申、諸事外地面同様  
に取斗、則車坂町と相唱申候。

上野御本具師  
下谷車坂町

城

右先祖の儀は山城國生にて吉兵衛と申者にて、南光坊大僧  
正様御下りの節御供仕罷下り、東叡山本覺院に被爲在候節、  
於御長屋木具類御用向相勤罷在、尤御家來に有之候由に御  
座候。正保年中久遠壽院宮様御下向の節、庄左衛門と申者  
御供仕罷下り、其後此者吉兵衛養子に相成、享保六丑年  
大明院宮様御題號被爲遊候法花經八軸、左の寶塔御當山淨  
明律院え寄附仕、唯今に至迄相勤罷在候。三代目庄兵衛事  
山城義御扶持方頂戴仕、元文二己年右山城と申呼名御免被  
仰付候。寛保二戌十月二日、慈眼大師百年御忌御法會に付、  
由緒を以御香奠別獻上仕、其後御法會の節は今に至迄別獻  
上仕候。

延享二己年三月十三日より十七日迄紅葉山御八講奉供に  
付、其節青侍に被仰付候。代々名披露御目見仕候。五代目  
當山城儀熨斗目御免被仰付、并上野御用達頭取相勤、從祖  
父柴田山城と申呼名三代御免被仰付候。毎年日光御登山并  
還御の節は千住迄罷出申候。尤委細の儀は相分り兼申候。  
右に付諸向えは木具師柴田山城と相名乗候得共、是迄御役  
所向并町用には下谷車坂町家持山城と名乗、人別帳にも右

(達用御款御野上)

の通り書載來申候。

上野御款御用

清右衛門

右先祖の儀は寛文年中、本照院宮様京都より御下向の節、御  
供被爲仰付罷下り、御款御用被爲仰付候。天和三癸亥年御  
用札拜領仕候。

元祿十一辰年、上野仁王門前町にて六人え壹ヶ所地面拜領  
仕候。

元文四未年御改に付、鶴川内膳様水谷左衛門様御掛りにて  
御鑑札被下置候。尤丸に天の字有之候。

寛保二戌年十月二日、慈眼大師様百年御忌御法會に付、由  
緒を以御香奠別獻上被爲仰付候。

延享二丑年三月十三日より同十七日迄紅葉山御八講奉供に  
付、青侍に被爲仰付、熨斗目素袍にて御供仕候。其節伊藤  
清左衛門と書上申候。代々名披露 御目見被爲仰付候て御  
用相勤申候。

拜領町屋鋪六拾七坪

上野御款御用達

清右衛門

他町住居御用達

外五人

右之者共先祖より上野御用達相勤候に付上野より被仰立、  
元祿十一寅年住居屋敷仁王門前町にて壹ヶ所拜領仕候處、  
同年九月類焼仕、右地面被召上松原に被仰付候處、寶永七  
寅年松原町屋に被仰付候に付、先祖拜領の儀上野にて被仰  
立、同年八月本多彈正少弼様・水野對馬守様・三枝伊豫守様御

(城山田柴師具木)

(師具木御野上)

掛にて、京間二間、裏行五間四尺宛六人一繩にて京間拾貳  
間、裏行五間四尺の町屋敷一ヶ所被下置候。是迄代々子孫  
相續仕御用相勤候。尤四代目清右衛門儀當所味岡清宜拜領  
地面家主役數年相勤、其後家主退役仕、當清右衛門迄七代  
相續仕、尤委細の儀は相分り兼申候。

一 東叡山御用人足差出申候。往古より御代官伊奈半左衛門様  
御支配所にて、寛永九申年中、東叡山御目代田村權右衛門  
支配所に相成寺社御奉行御支配の所、延享二丑年二月中、  
町方御支配に相成申候。

一 東叡山御法事之節大赦の砌、町内名主肝煎役仕候儀町御奉  
行様より被仰付、先祖代々相勤候に付、大赦の者有之候節は  
牢屋御役人より前日に置場其外先格の通取斗可申旨名主方  
え被仰付、同人より御山内にて御法事御座候最寄の場所え  
鋪物いたし置、右場所え御出役御役人様方并町年寄衆手代  
中、傳馬人足共多人數にて囚人前夜より御召連被成候。尤  
雨天の節は雨除のため中堂西の方縁の下え敷物仕、其所に  
て湯茶の手當仕、私共町内并寺町通車坂町、同所車坂町右  
三ヶ所家主拾三人、御山内爲御案内古來より御役として前  
日夜半より罷出、諸事大切に相勤申候。尤私共并名主より  
差出候人足共支度其外諸入用共、町入用に不相成、古來よ  
り名主方にて取賄差出來申候。

以上丙戌書上

寺町通り 車坂町

(跡鋪屋守防周并土) (足人用御野上) (町本坂新)

一 町名起立の儀は寛永元甲子年中東叡山御建立有之、同三丙  
寅年中同所東の方下谷坂本町通東坂下町家に相成、御門前  
地に被仰付新坂本町と相唱候由。其後年月不知、右は車坂下  
町家迎下谷車坂町と相唱、尤其砌は壹丁目貳丁目三丁目  
と相分候由、御年貢無之、上野御本坊御用人足并御山内掃除  
人足爲御役差出申候。然る處元祿十一戌寅年六月中、右町  
内西側四間通り御用地被召上、下谷長者町通御徒町にて代  
地被下置、同年九月六日下谷邊出火の節、車坂町も類焼仕候  
處、中堂御建立被遊候に付、御山内寺院方下通え御替地に相  
成候に付一圓御用地に被召上、同年十二月申元誓願寺前土  
井周防守様立跡壹ヶ所、同所西尾八兵衛様立跡にて壹ヶ所、  
柳原佐久間町裏通りにて壹ヶ所、下谷の内にて四ヶ所、西  
の久保にて二ヶ所、爲代地被下置候。私共町内の儀は下谷  
四ヶ所の内にて地面敷二ヶ所、元大久保近邊にて元坪の通  
被下置候處、右場所不宜地所に付難澁の趣申立、正法院東  
の方當所え御繰替奉願上候處、元文二年八月十九日願の通  
被仰付、元坪通替地被下置候。

一 町内東西え貳拾四間五尺七寸、南北え八間四尺壹寸。  
但裏幅共不同無御座候。  
隣町 東の方往來隔御持組屋敷、西の方地續正法院門前町、



(町坂車上)

- 一 南の方往來隔御徒組屋鋪、北の方長瀧貞之助屋鋪。
- 一 里俗上車坂町と相唱申候。
- 一 東叡山御用人足差出申候。
- 一 往古は御代官伊奈半左衛門様御支配所にて、寛永九申年中東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行所御支配の所、延享二丑年二月中町方御支配に相成申候。
- 一 東叡山御法事の節大赦の砌、町内名主肝煎役仕候儀町御奉行様より被仰付、先祖代々相勤候に付、大赦の者有之節は牢屋御役人より前日に置場其外先格の通可申付旨名主方へ被仰付、同人儀御山内にて御法事御座候最寄の場所へ敷物致置、右場所へ御出役御役人様方并町年寄衆手代中、傳馬人足ども多人數にて囚人前夜より御召連被成候。尤雨天の節は雨除のため中堂西の方縁の下へ敷物仕、其所にて湯茶手當仕、私共町内并寺町通車坂町、屏風坂下車坂町右三ヶ所家主拾三人、御山内爲御案内古來より前日夜半より罷出、諸事大切に相勤申候。尤私共并名主より差出候人足共支度其外諸入用、町入用に不相掛、古來より名主方にて取賄差出來申候。

以上丙戌書上

淺草新寺町邊 車坂町

- 一 町名起立の儀は寛永元甲子年中東叡山御建立有之、同三丙寅年中同所東の方下谷坂町通車坂町家に相成、御門前地

(町下本坂新) (足人用御野上)

に被仰付新坂本下町と相唱候由。其後年月不知、右は車坂下町屋連下谷車坂町と相唱候。尤其砌は壹丁目、貳丁目、三丁目と相分け候由、御年貢無之、上野御本坊御用人足并御山内掃除人足爲御役差出申候。然處元祿十一戊寅年六月中、右町内西側四間通御用地に被召上、下谷長者町通御徒町にて代地被下置、同年九月六日下谷邊出火の節、車坂町も類燒仕候處、中堂御建立被遊候に付、御山内寺院方下通りへ御替地に相成候に付、一圓御用地に被召上、同年十二月申元誓願寺前土井周防守様立跡にて壹ヶ所、同所西尾八兵衛様立跡にて壹ヶ所、柳原佐久間町裏通りにて壹ヶ所、下谷の内にて四ヶ所、西の久保にて貳ヶ所、爲代地被下置候。私共町内の儀は下谷四ヶ所の内にて地面數三ヶ所、淺草通唯念寺東の方に元坪の通被下置、尤當所何の立跡に候哉申傳等も無御座候。

- 一 町内東西へ貳拾七間四尺五寸、南北へ拾貳間三尺壹寸。
- 一 但裏行裏幅とも間數不同無御座候。

隣町 東の方地續等覺寺門前町、西の方往還隔唯念寺、南の方地續淺草六軒町、北の方往還隔正安寺門前町。

(町坂車下)

往古は御代官伊奈半左衛門様御支配所にて、寛永九申年中東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行御支配の處、延享二丑年二月中町方御支配に相成申候。東叡山

(町軒六下坂風屏)

御法事の節大赦の砌、町内名主肝煎役仕候儀町御奉行所様より被仰付、先祖代々相勤候に付、大赦の者有之節は牢屋御役人より前日に置場其外先格の通可申付旨名主方へ被仰付、同人より御山内にて御法事御座候最寄の場所へ敷物いたし置、右場所へ御出役御役人様方并町年寄衆手代中、傳馬人足共多人數にて囚人前夜より御召連被成候。尤雨天の節は雨除のため中堂縁の下へ鋪物仕、其處にて湯茶手當仕、私共町内并同所車坂町屏風坂下車坂町右三ヶ所家主拾三人、御山内御案内いたし、古來より爲御役前日夜半より罷出、諸事大切に相勤申候。尤私共并名主より差出候人足共支度其外諸入用とも、町入用に不相掛古來より名主方にて取賄差出來申候。

以上丙戌書上

六軒町

町名の起り、草分人の名、町地に相成候年代相知不申。尤町内元地主共先祖の儀は、東叡山御開基慈眼大師御在世の節御中間陸尺相勤候ものに有之、同所御構東の方屏風坂と唱候所の近邊にて町屋敷拜領仕、屏風坂下六軒町と相唱、元祿十一寅年九月類燒仕御用地に被召上、下谷淺草神田と三ヶ所にて代地被下置、上野御開山堂御用相勤、御年貢等差出申候。

(舖屋役門御坂風屏)

但六軒町上野御役勤方の儀は、淺草六軒町御調の節委細申上置候。

一 町内東西五間四尺五寸、南北へ貳拾七間貳尺三寸。但片側町に有之候。

一 町内東側南角表田舎間六間貳尺八寸、裏行南五間四尺五寸、北四方五尺五寸、此坪三拾八坪餘の町屋敷壹ヶ所、屏風坂御門役屋敷と唱、古來より三ヶ所六軒町にて拜領仕候。

一 四隣 東の方大御番組屋敷、西の方御徒組屋敷、南の方 下谷辻番屋敷、北の方 御徒組屋鋪。

一 東叡山御目代田村權右衛門支配所にて元寺社御奉行御支配の處、延享二丑年中より町御奉行御支配に相成申候。

以上丙戌書上

辻番屋敷

(町西) (町横町軒六) (地沼は古往)

一 町名起立の儀往古沼地にて、元祿年中小石川白山御殿御取建有之、御構廻り辻番所請負助成地に被下候處、當時右御殿跡御藥園居廻り八ヶ所、牛込山伏町壹ヶ所、聖堂馬場脇壹ヶ所、都合拾ヶ所。

御公儀様辻番所にて右助成地に付、惣名辻番屋敷と唱四ヶ所に相分有之、下谷六軒町續壹ヶ所、小名を六軒町續町と唱、同所立花左近將監様御屋鋪脇一ヶ所、小名を子細不知西町と唱、同所法養寺前一ヶ所、小名を法養寺前町共賣店



(店裏) (堀埋)

(辻番屋敷請負人借助成地)

共相唱申候。元裏を商候者貳人有之候故申傳候由。板倉内膳正様御下屋敷南側往來を隔一ヶ所、小名を埋堀と唱申候。元沼地を埋立候故右の唱に御座候。

一 六軒町 東の方大御番組屋敷、西の方御徒組屋敷、南の方御普請役大塚祐之助様屋敷、北の方下谷六軒町。

一 西町 南の方大御番組屋敷、西の方御先手組屋敷、御勘定寺田忠右衛門様屋敷、南の方立花左近將監様屋敷、北の方大御番組屋敷。

一 町内 南北え四拾三間餘、東西え拾四間餘、片側町に御座候。

一 隣町 東の方成就院法養寺境内、西の方沼東馬様屋敷御作事組屋敷、平岡四郎兵衛様屋敷、南の方善立寺、北の方成就院法養寺。

一 町内 南北え三拾間餘、東西え拾四間餘、片側町に御座候。

一 隣町 東の方福寺、西の方龍谷寺、南の方西照寺門前、北の方板倉内膳正様屋敷。

一 町内 南北え貳拾四間餘、東西え貳拾八間餘、片側町に御座候。

一 當町の儀者

御公儀様辻番所請負人拜借助成地にて、坂田屋八郎兵衛下野屋三九郎と申者相勤、兩人共御目付方御支配にて當時他に住居仕罷在候。拜借助成地起立の儀は兩人先祖

(辻番屋敷請負人借助成地)

(町川山)

御公儀様御給金辻番所御請負申上候儀は、先年紀州様之鶴姫君様被遊 御入興候に付、御守殿火除地え辻番所貳ヶ所御取建有之、右辻番所一式御請負御用被仰付、右爲助成地紀州様御屋形脇より尾州様御屋形汐干觀音迄地所被下置候。尤右場所當時何れの場處に當り候哉相分り不申候。右辻番所御請負被仰付候節は、年月并被仰渡候御役人御名前御役名共、年蓄り候儀にて書留相見え不申候。其後

鶴姫君様御逝去被遊辻番所御取拂に相成候に付、右の地所差上四ヶ谷鮫ヶ橋に住居仕候處、其後元禄十一寅年六月中御普請御奉行中坊長兵衛様奥田八郎右衛門様御目付加藤兵助様御勤役の節、猶又先祖被召出、前書

鶴姫君様御守殿火除辻番所御普請仕候勤功に依て、此度小石川白山御殿相建候に付居廻り辻番所七ヶ所御取建有之候間、蓄格の通町々地所見立助成地相願候共、又は御金にて替り候共、兩様の内御願可申上旨被仰渡、尤外に入札等も可被仰付候處、先年紀州様御火除辻番所請負致し候者に有之候に付、此度右の御用申付候間御請可仕旨被仰付候。依之難有御請仕地所見立候處、下谷上野山下常樂院上ヶ地、同所六軒町續にて百五坪、下谷立花左近將監様屋敷脇沼地にて百八拾壹坪、淺草成就院並法養寺前沼地にて四百貳拾七坪、下谷板倉内膳正様下屋敷脇沼地にて六百九拾坪、淺草金龍山下沼地にて百三拾九坪七合、右の場所は當時山川

(目丁一町荷稻)

(御給金辻番)

町と町名申唱、都合五ヶ所、右爲助成地拜借仕、辻番所七ヶ所御普請諸掛一式御請負相勤、右地所池地沼地共自分入用を以て埋立、町家に取立持傳罷在候處、其後正徳四午年春中白山御殿御引拂相成候得共、辻番所は其儘被差置引續相勤候様被仰渡、御殿跡相守罷在候。然る處牛込山伏町の

御公儀様辻番所壹ヶ所、聖堂馬場脇一ヶ所所有之、前書山伏町に住居仕居候幸助八郎右衛門と申者兩人御金にて御請負仕罷在候處、子細不知、山伏町辻番所一ヶ所同年十一月四日被召上、跡辻番所先祖兩人之被仰付候に付、願の上前書白山御殿跡辻番所七ヶ處の内一ヶ所取拂、山伏町え引替被仰付、享保六廿年十月朔日、聖堂馬場脇辻番所子細不知、前書幸助八郎右衛門兩人儀猶又被召上、是又跡辻番所先祖之被仰付候に付、又候奉願白山御殿跡辻番所の内一ヶ所取拂、聖堂馬場脇え引替被仰付相勤罷在候處、同七年年中白山御殿跡御藥園に相成、増辻番所三ヶ所御取立被仰付、右御請負御用都て前書の通被仰渡、累格を以淺草福川町にて五百四拾四坪新規助成地に被下置、小石川白山御殿御藥園廻り八ヶ所、牛込山伏町壹ヶ所、聖堂馬場脇壹ヶ所、都合拾ヶ所御給金辻番と唱へ、兩人申合日々辻番所見廻り仕、代々御請負御用相勤。前書御給金辻番所拾ヶ所の内御藥園居廻り八ヶ所の儀は、享保八卯年六月十日御藥園奉行支配

(主名七藤左衛門・黒右衛門)

(元沼地)

請相勤候様御目付方より被仰渡、牛込山伏町聖堂馬場脇共貳ヶ所は御目付方御支配請罷在、諸願御届等の儀御目付方御藥園奉行え願候得共、辻番所抱り候儀は前書御掛分ヶを以御下知有之、家相續の儀は御目付にて被仰渡、都て身分に付候儀は是又御目付方御下知有之候先格にて、且上野御成の節は兩人麻上下着用仕、御前夜より聖堂馬場脇辻番所脇え壹人、同所馬場外繩張の場所え壹人罷出御用相勤、都て拾ヶ所辻番所最寄

御成御道筋に相成候節は兩人共繼上下着用仕、前夜より辻番所並繩張え罷出御用相勤候先例有之、且前書助成地町屋敷の内下谷六軒町續一ヶ所、立花左近將監様屋敷脇西町壹ヶ所、淺草法養寺前裏店一ヶ所、下谷板倉内膳正様下屋敷脇埋堀壹ヶ所、都合四ヶ所を惣名辻番屋敷と唱、拾三番組名主藤七支配仕罷在、淺草金龍山下壹ヶ所は三番組名主作左衛門支配にて同所山川町に有之、同所福川町の内壹ヶ所は同組名主黒右衛門支配致し、都合町屋敷助成地六ヶ所に有之、公役銀上納不仕候。

小島町

町名起立の儀當時右町屋の所は元沼地にて有之候。淺草新堀渡御請負仕候。爲助成元禄五申年中、彌十郎次郎左衛門

以上丙戌書上



(説一の立起町島小)

甚右衛門と申

但小島町起立の儀一説に淺草猿屋町小島屋由之助と申者先祖名主役相勤罷在、寛永七午年三味線堀川筋堀割の節、唯今小島町の所沼地にて有之候を右川筋堀立の土を以埋立候由、右に付小島町と名付候由及承申候。

三人の者右沼池拜領仕、其後下谷小島町と申町屋に相成候處、明和元申年六月中、右三人の者御答被仰付、地面被召上上納地に相成、同年閏十二月中町御奉行土屋越前守様御掛りにて、御能役者觀世織部儀右上り地一圓に拜領致、定浚共被、仰付候に付、織部より申立其節の家守佐兵衛、吉右衛門兩人え定浚下請負被仰付、右新堀通り兩岸三尺通浚土塵芥常置場の儀、同明和元申年閏十二月中、道御奉行堀彌二郎様え佐兵衛吉右衛門より願奉願の通被仰付、其後追々代替、當時觀世四郎拜領地にて、同家主伊兵衛庄五郎定浚御請負被仰付、右の定浚場所の儀は淺草元鳥越橋川口より新堀通り清水寺前迄長さ凡拾三町程の間、永代定浚並堀岸兩側柵且堀通の内橋五ヶ所永々新規修葺仕候分左の通。

(橋香抹) (橋殘)

橋壹ヶ所  
但殘橋長貳間、中六尺  
同  
但抹香橋長貳間貳尺、中六尺

三筋町通堀、向は  
新旗籠町  
與力町堀、向は龍  
法寺前

(地領拜郎四世觀)

(町軒七谷下) (橋寺水清) (橋屋紙) (橋門西跡門御)

同  
東本願寺裏門通

但御門跡西門橋長貳間四尺、中貳間  
元三拾三間堂前  
警願寺通

同  
但紙屋橋長貳間一尺、中壹間  
清水寺前

但清水寺橋長壹間五尺、中壹間  
右新堀の儀は淺草寺裏御鷹野御場所水吐の堀にて、毎年九月十日頃、御場所御拵初候節は御下知次第別て水吐宜敷様堀浚仕候。

同  
町内小名の儀西の方え寄筋向側、下谷花藏院門前兩町の儀を里俗下谷七軒町と相唱申候。

一  
四隣、東の方松前志摩守様御屋敷、西の方竹村太郎右衛門様御屋敷、南の方大久保佐渡守様御屋敷、北の方向側酒井大學頭様御屋敷。

一  
町内、東西え田舎間貳拾壹間四尺五寸、  
南北え、東の方にて裏行三十一間、  
西の方にて裏行貳拾九間三尺五寸。  
此坪數六百五十六坪壹合。

以上丙戌書上

唯念寺門前

一  
右唯念寺の儀は明曆三三年、馬喰町より當所え地所替被仰付、其後萬治元戌年御願濟の上、境内町屋表間口四拾一間

(目丁一町荷稻)

餘、折廻し八間三尺建來り、年季切替等無御座、往古より

一  
右門前町屋申傳、町名の儀は下谷唯念寺門前と唱申候。

一  
町内小名一圓に里俗稻荷町壹丁目と申來候。

一  
隣町、東の方往還隔車坂町、西の方往還隔大工屋鋪、南の方地續成就院門前、北の方往還隔永昌寺、  
同宗源寺門前。

一  
町内東西え四拾壹間、南北え八間三尺。

一  
但兩側町屋に御座候。尤延享二丑年、町御奉行御支配に相成申候。

一  
髮結床、壹ヶ所、間口九尺、  
奥行三間一尺。

一  
但唯念寺より北の方永昌寺下水外、往還東南角に有之候。右髮結床の儀凡百貳拾ヶ年已前より有來候由申傳候得共、年久敷義にて書留等も無御座候。依之起立年月相分り兼申候。尤享保四年の頃源兵衛と申者所持仕、其後度々讓替、當時下谷金杉貳丁目家持勤兵衛と申者所持致罷在候。依之先年より兩御番所え出火の節駆着御役相勤申候。  
以上丙戌書上

成就院門前

一  
右門前町屋の儀は萬治元年より建來罷在候。尤委敷儀は舊記燒失に付相分り不申候。元文四年未三月明地の所九間貳尺、新規町屋の義大岡越前守様御願、十ヶ年明に被、仰付、其後度々年季明き建替り、御願相濟來り申候。

(郎十傳・郎次善人登開町當)

(町荷稻)

一  
町内小名里俗稻荷町と唱來申候。

一  
隣町、東の方唯念寺、西の方平岡四郎兵衛様御屋敷、南の方薬店辻番屋敷、北の方唯念寺門前。  
以上丙戌書上

大工屋鋪

一  
右町名起立の儀は元御大工頭支配人大工棟梁にて善次郎、傳十郎と申者有之、萬治元戌年中淺草新寺町通道橋水吐下水等御普請の節、御普請御奉行小笠原彌左衛門様堀又右衛門様御掛りにて前書棟梁兩人日々右御普請場え罷出、水繩張の役等出精相勤、出來の上右地所割餘り水溜り地にて有之候を御用地にも難相成所に付、兩人の者え爲取候様御役名不知久世大和守様被仰渡、萬治二亥年右御普請奉行様御兩人御印形有之候御書付頂戴仕、夫より兩人自分入用を以寛文四辰年迄七ヶ年の内地面築立町屋取立、下谷大工屋敷と町名相付、御年貢上納仕、且兩人共御用相勤候内は御大工頭支配にて、其後銘々奉願、大工棟梁相止代々拜領仕、當時開發人善次郎末町醫正軒・傳十郎の末町人權八幼年に付、後見次郎兵衛と申者相續致罷在候。

一  
右善次郎傳十郎拜領仕候惣小間五拾壹間、裏行拾間の内間口四間、裏行拾間の所、善次郎弟子仁右衛門え天和三亥年中分ヶ讓り、仁右衛門倅藤助相續の處、藤助儀正徳五未年



(屋番身自) (領田畝) (町横嵐十五) (店業) (町有稻)

欠落仕、中山出雲守様御番所御掛にて關所上り屋敷に相成候上、善次郎末地元松貞由緒御札の上、右御番所之金八拾兩上納仕、地面松貞え被下、永代沽券地に被 仰付、當時藤兵衛と申者所持仕罷在候。

前條申上候通開發人善次郎拜領地は當時正軒傳十郎拜領地は當時權八幼年に付後見次郎兵衛拜領致し、且分地に相成候沽券地の分、當時藤兵衛所持仕候。

里俗小名の儀當町内に不限、都て新寺町筋隣町を里俗稻荷町と相唱、當町南横町を菓店と唱、當町北向泰宗寺と宗源寺の脇横町を五十嵐横町と相唱申候。

町内 東西は田舎間五十一間。南北は裏行拾間。

隣町 東の方向側下谷唯念寺門前、西の方向側下谷稻荷社地、南の方向側四郎兵衛様御屋敷、北の方向側同泰宗寺門前。

町御奉行御支配を請、御年貢は御代官所之相納、當時平岩右膳様御代官所に御座候。

反別壹反七畝拾七步。

但領名の儀は畝田領と唱申候。

自身番の儀は當町外下谷成就院門前、同所唯念寺門前、同所宗源寺門前、同所西蓮寺門前、都合五ヶ所、組合にて北向側泰宗寺構外え間口九尺、奥行三間、裏の方え一間の庇圍込にいたし、此坪六坪有之番屋並表の方庇下より下水際え折廻し三間半餘の所駒寄共、寛政九己年中建始申候。

(諸家軒正山柳醫町)

右者當所開發人善次郎子孫に御座候。家譜並屋敷の由緒書所持仕罷在候間左に認差出申候。

家譜

藤原正勝 初代 柳山甚左衛門

本國參州茨木村住人也。於同州岡崎城奉仕

東照神君。蒙匠作長。後供奉遠州濱松城。於彼地大工町賜第宅地。亦奉從駿府城。其後慶長年中供奉江戶城。住居神田多町。寛永七庚午年五月二十日卒。行年六拾四歲。葬于淺草萬隆寺。法號陽壽長陰居士。

古渡 佐兵衛妻

二女 田村善次郎妻

吉次 田村善次郎

實武州多摩郡福生村住人。田村三河男同姓六右衛門尉吉直二男也。十四歲時。爲伯父田村四郎右衛門尉宗久養子。出江府。然後有故經柳山正勝遺業。同住居神田多町。然萬治二己亥年兩國橋成。於是乎蒙下谷淺草所々水除之公務。因是爲功勞褒賞。於下谷賜三百余坪沼池。而後地形成移居於此地。

延寶六戊午六月廿四日卒。行年七拾九歲。葬于淺草萬隆禪寺。法號融山休圓庵主。

三代 田村市郎兵衛

寛文六丙午年父吉次致仕。同年繼家督。如父祖蒙匠作長。住居下谷廣德寺前拜領屋鋪。

延寶三年天下飢饉。京火五年兩御所

延寶五丁己年有京師兩御所造營事。于時直政蒙造營棟梁職。落成後於江府賜褒賞。其後依病請免職。正德三癸巳年十一月二日卒。行年七拾九歲。葬于淺草萬隆禪寺。法號千溪道松居士。

後改江間 水谷長右衛門養子

吉次二男 吉次三男 吉次四男 吉次五男 吉次六男 吉次七男 吉次八男 吉次九男 吉次十男 吉次十一男 吉次十二男 吉次十三男 吉次十四男 吉次十五男 吉次十六男 吉次十七男 吉次十八男 吉次十九男 吉次二十男 吉次二十一男 吉次二十二男 吉次二十三男 吉次二十四男 吉次二十五男 吉次二十六男 吉次二十七男 吉次二十八男 吉次二十九男 吉次三十男 吉次三十一男 吉次三十二男 吉次三十三男 吉次三十四男 吉次三十五男 吉次三十六男 吉次三十七男 吉次三十八男 吉次三十九男 吉次四十男 吉次四十一男 吉次四十二男 吉次四十三男 吉次四十四男 吉次四十五男 吉次四十六男 吉次四十七男 吉次四十八男 吉次四十九男 吉次五十男 吉次五十一男 吉次五十二男 吉次五十三男 吉次五十四男 吉次五十五男 吉次五十六男 吉次五十七男 吉次五十八男 吉次五十九男 吉次六十男 吉次六十一男 吉次六十二男 吉次六十三男 吉次六十四男 吉次六十五男 吉次六十六男 吉次六十七男 吉次六十八男 吉次六十九男 吉次七十男 吉次七十一男 吉次七十二男 吉次七十三男 吉次七十四男 吉次七十五男 吉次七十六男 吉次七十七男 吉次七十八男 吉次七十九男 吉次八十男 吉次八十一男 吉次八十二男 吉次八十三男 吉次八十四男 吉次八十五男 吉次八十六男 吉次八十七男 吉次八十八男 吉次八十九男 吉次九十男 吉次九十一男 吉次九十二男 吉次九十三男 吉次九十四男 吉次九十五男 吉次九十六男 吉次九十七男 吉次九十八男 吉次九十九男 吉次一百男

直政四男 直政五男 直政六男 直政七男 直政八男 直政九男 直政十男 直政十一男 直政十二男 直政十三男 直政十四男 直政十五男 直政十六男 直政十七男 直政十八男 直政十九男 直政二十男 直政二十一男 直政二十二男 直政二十三男 直政二十四男 直政二十五男 直政二十六男 直政二十七男 直政二十八男 直政二十九男 直政三十男 直政三十一男 直政三十二男 直政三十三男 直政三十四男 直政三十五男 直政三十六男 直政三十七男 直政三十八男 直政三十九男 直政四十男 直政四十一男 直政四十二男 直政四十三男 直政四十四男 直政四十五男 直政四十六男 直政四十七男 直政四十八男 直政四十九男 直政五十男 直政五十一男 直政五十二男 直政五十三男 直政五十四男 直政五十五男 直政五十六男 直政五十七男 直政五十八男 直政五十九男 直政六十男 直政六十一男 直政六十二男 直政六十三男 直政六十四男 直政六十五男 直政六十六男 直政六十七男 直政六十八男 直政六十九男 直政七十男 直政七十一男 直政七十二男 直政七十三男 直政七十四男 直政七十五男 直政七十六男 直政七十七男 直政七十八男 直政七十九男 直政八十男 直政八十一男 直政八十二男 直政八十三男 直政八十四男 直政八十五男 直政八十六男 直政八十七男 直政八十八男 直政八十九男 直政九十男 直政九十一男 直政九十二男 直政九十三男 直政九十四男 直政九十五男 直政九十六男 直政九十七男 直政九十八男 直政九十九男 直政一百男

正德三癸巳年相續父直政家督。住居下谷拜領屋鋪。就病身父祖業難勤請免職。屬藤井家平門爲醫術。寶曆三癸酉年正月十一日卒。行年七拾四歲。葬于淺草萬隆禪寺。法號常翠松元居士。

田村甚左衛門 田村甚之助 田村三省 柳山源之助

(第次の領拜鋪屋工大)

女 壹人 桐山正哲妻

養女 伴八郎妻

茂辰 五代後改松貞稱松壽 柳山市平

寶曆三癸酉年相續父茂雅遺跡。而住居下谷拜領屋鋪。屬淺井氏醫門。

文化七庚午年四月廿日逝。行年七十四歲。法號至極樂也居士。

茂辰二男 茂辰三男 茂辰四男 茂辰五男 茂辰六男 茂辰七男 茂辰八男 茂辰九男 茂辰十男 茂辰十一男 茂辰十二男 茂辰十三男 茂辰十四男 茂辰十五男 茂辰十六男 茂辰十七男 茂辰十八男 茂辰十九男 茂辰二十男 茂辰二十一男 茂辰二十二男 茂辰二十三男 茂辰二十四男 茂辰二十五男 茂辰二十六男 茂辰二十七男 茂辰二十八男 茂辰二十九男 茂辰三十男 茂辰三十一男 茂辰三十二男 茂辰三十三男 茂辰三十四男 茂辰三十五男 茂辰三十六男 茂辰三十七男 茂辰三十八男 茂辰三十九男 茂辰四十男 茂辰四十一男 茂辰四十二男 茂辰四十三男 茂辰四十四男 茂辰四十五男 茂辰四十六男 茂辰四十七男 茂辰四十八男 茂辰四十九男 茂辰五十男 茂辰五十一男 茂辰五十二男 茂辰五十三男 茂辰五十四男 茂辰五十五男 茂辰五十六男 茂辰五十七男 茂辰五十八男 茂辰五十九男 茂辰六十男 茂辰六十一男 茂辰六十二男 茂辰六十三男 茂辰六十四男 茂辰六十五男 茂辰六十六男 茂辰六十七男 茂辰六十八男 茂辰六十九男 茂辰七十男 茂辰七十一男 茂辰七十二男 茂辰七十三男 茂辰七十四男 茂辰七十五男 茂辰七十六男 茂辰七十七男 茂辰七十八男 茂辰七十九男 茂辰八十男 茂辰八十一男 茂辰八十二男 茂辰八十三男 茂辰八十四男 茂辰八十五男 茂辰八十六男 茂辰八十七男 茂辰八十八男 茂辰八十九男 茂辰九十男 茂辰九十一男 茂辰九十二男 茂辰九十三男 茂辰九十四男 茂辰九十五男 茂辰九十六男 茂辰九十七男 茂辰九十八男 茂辰九十九男 茂辰一百男

豐清 七代改正軒 柳山清次郎

文政八乙酉十二月家督

棟梁善次郎傳十郎屋敷之事

此度淺草新寺町の道、水吐下水の御普請、從御公儀我等兩人奉行に被仰付候處、右の棟梁水盛繩張の役人に毎日罷出骨折、御普請も出來申候に付、其節廣德寺前に京間四拾七間、横八間餘の所割餘りの池御座候を、方々の例を以望申候に付、其節久世天和守殿、土屋但馬守殿御



普請場御見分に御出被成候刻、池の所懸御目、棟梁共望申段申上候得者、其以後大和守殿より我等兩人被召奇、伊丹播磨守殿會根源左衛門殿御相談の上にて、内々棟梁共望申池の所御用地にも難成所に候間、爲取申様にと被仰付則相渡申候。爲後日如此以上。

萬治二年己亥六月廿五日

小笠原彌左衛門判

堀 又右衛門判

棟梁善次郎

同 傳十郎

棟梁善次郎傳十郎屋敷の事

萬治元戌年淺草新寺町道井水吐下水、從公儀小笠原彌左衛門我等兩人に奉行被爲 仰付候處、右之棟梁水盛繩張役人に毎日罷出骨折、御普請出來申候に付、其節下谷廣德寺前に京間四拾七間、横八間餘の割餘り池御座候を、右の棟梁共方々の例を以望申候に付、其刻久世大和守殿・土佐但馬守殿御普請御見分に御出被成候時分、右の様子申上候得者、其後久世大和守殿より我等兩人被召奇、則伊丹播磨守殿會根源左衛門殿御相談の上にて、内々棟梁共望申池の所御用地にも難成所に候間、爲取申様にと被仰付則相渡申候。其以後去々年下谷名主方より御年貢出し申様にと申候由棟梁共申來候間、則我等大和守殿え参り右の様子申上候得者、大和守殿より貴殿の手代被召寄御斷被仰

渡候得共、又々當年江戸中不殘御改に付、委細の書付を申様にと被仰付候間則書付如此候以上。

寛文四年 辰九月二十四日

堀 又右衛門判  
四年已前相果申候  
小笠原 彌左衛門

野村彦太夫殿

延寶六年正月廿二日 御評定にて上野町支配に被仰付候。

島田出雲守様

宮崎若狭守様

上書 野村彦太夫様え

小笠原彌左衛門様  
堀 又右衛門判  
以上丙戌書上

宗源寺門前

一 門前町屋の儀は元和四十年上野黒門町廣小路に有之候節よりの古門前に御座候。其後寛永十四丑年當所え轉地被仰付候。門前町屋建來候。其頃より町名の儀も下谷宗源寺門前と唱來申候。

但里俗下谷稻荷町と唱申候。

一 門前町屋の儀は東西え三拾七間半、裏南北え拾壹間。

一 横門町屋間口南北え十六間、裏行東西え四間。

但兩側町屋に御座候。横町は片側町に御座候。

(町荷稻谷下)

一 隣町 東の方永昌寺、西の方泰宗寺、南の方大工屋敷。唯念寺門前。北の方蓮城寺。

一 延享二丑年町御奉行所御支配に相成申候。

以上丙戌書上

西蓮寺門前

一 門前町屋の儀は古來より建來候由に御座候得共舊記等一向無御座候。其後元祿十三辰年十一月、中、寺社御奉行永井伊賀守様え願書差上、同月廿七日於松平丹後守様青山播磨守様・阿部飛騨守様御列座にて願の趣 御免許蒙之候旨、記録に御座候間左の通申上候。右御願濟上門前町屋建來、其頃より町名の儀も下谷西蓮寺門前と相唱申候。

但年季門前町屋にては無御座候。

一 門前町屋の儀は東西え拾四間、南北え貳拾六間。

但片側町屋に御座候。

一 延享二丑年中町御奉行御支配に相成申候。

一 隣町 東の方龍谷寺、西の方廣德寺、南の方盛雲寺、北の方六篇繁次郎隣下屋敷。隣院門前。

以上丙戌書上

高岩寺門前

一 往古湯島御茶水邊に同寺罷在候處、年代不相知、畷田領下

(谷下領田畷)

(用御鷹御・補助傳宿住千)

谷分御年貢地七百七拾五坪三合壹夕、上野町分御年貢地貳百五拾坪、惣坪合千貳百五坪三合壹夕の地所譲り請移轉仕、寶曆六子年中寺社御奉行青山因幡守様え奉願、南の方にて百貳拾坪の地所十ヶ年季門前町屋被 仰付、尤年限の度々引續御願申上候仕來りに有之候。

一 御代官平岩右膳様御支配にて、御年貢并千住宿御傳馬助郷、御鷹御用相勤申候。尤門前町屋の儀は町御奉行御支配に有之候。

一 寺屋敷七百七拾五坪三合壹夕、此反別貳反六畝貳拾壹歩。

但反別に引合候得者坪數貳拾五坪六合九夕不足に有之候

得共、前々より書出候坪數に有之候。

一 町屋建家間數南西折廻し貳拾六間、裏行貳間半。

一 四隣 東の方大久寺、西の方東叡山、南の方御先手組屋敷、北の方御徒組屋鋪。

一 寛文十二年九月、御代官野村彦太夫様御檢地有之候。

以上丙戌書上

御宮神人拜領屋敷

右地面の儀は元祿十丑年より上野屏風坂下町續に有之、右神人屋鋪往古は寒松院持に有之候處、享保三戌年より八郎兵衛住居地守任、都而町役相勤不申候。且出入訴事等は御別當寒松院より添翰にて其筋御奉行所え罷出申候由に御座

(持院松寒は元)



(波丹藤佐)

候。且神入の儀は六人有之、黄袍を着 御宮内相勤候由に御座候。

表間口京間四間、裏行八間半。

隣町 東の方蓮花寺、西の方屏風坂下町、南の方下谷町一丁目代地、北の方下谷御具足町。

八郎兵衛

右八郎兵衛家筋の儀、元祖佐藤丹波京都の産にて、慈眼大師御下向の御御供致し、東叡山御草創の砌より大工棟梁役相勤候由、呼名受領被仰付候。延寶二寅年十二月十三日病死仕候。

元祖佐藤丹波より當八郎兵衛迄七代相續仕、棟梁役相勤申候。

以上丙戌書上

屏風坂下町

一 町名の起り、草分人の儀、地面壹ヶ所にて下谷町壹丁目に申立候。下谷村名主恩地惣兵衛住居地の内、元祿十一寅年九月大火にて東叡山下御用地に被召上候節、下谷村往古の譯存候もの無之、其上火事後御見分繪圖等御認所無之候間、小屋相建御取調御用中萬端相勤候に付、表田舎間拾間、裏幅同斷、裏行拾間三尺六寸、此坪百三坪六合の町屋敷壹ヶ所、寺社御奉行松平志摩守様より拜領被仰付、地割御役與

(村谷下元) (姓改と島慶地恩)

田八郎右衛門様御割渡、草創地に有之、上野屏風坂御門外に付則町銘に相唱來り候得共、元下谷村の内付諸事下谷町壹丁目に籠り町用相勤申候。且惣兵衛より三代程相立、寶曆九卯年六月中、恩地舎人と申もの仕官の望にて妹之賀養子いたし候處、跡相續入無之候間、血縁有之鹿島屋彌兵衛と申者え安永六酉年十一月中相譲り候に付、鹿島屋彌兵衛と相改、當時迄七代右地所持傳に住居仕候。尤彌兵衛先祖は元神田多町邊に罷在、元祿三年九月御別當傳法院僧正の節、紅葉山 御宮并御靈屋御膳御青物諸式御用向被仰付、明和六丑年十一月中、上野御殿同様御用被仰付候ものに御座候。

隣町 東の方下谷車坂町、西の方東叡山、南の方御徒組屋鋪、北の方同斷。

以上丙戌書上

御具足町

一 町名起立の儀往古此邊都而沼地葺立にて、寛永元年子年御具足同心拜領仕、元祿十一卯年十一月中、町屋敷に相成候節より御具足町と相唱候。

一 町内東西え拾九間餘、南北え六拾三間餘。但片側にて、西側車坂町と武家屋鋪間に間口六間、裏行拾三間の町屋敷壹ヶ所離れ有之候。

(屋町領拜心同足具御)

(名人の主地領拜)

一 町内の儀起立は不殘御具足同心の者拜領町屋にて、文祿慶長の度御軍場御用相勤、其後元和三巳年十一月、久能山より紅葉山え御召御具足御引移の節、貳拾人御具足同心被仰付御供仕、寛永元年御具足奉行外山忠兵衛様御組の節、於當所屋鋪拜領仕候由、元祿十二卯年十一月中久留勘右衛門様組の節、願の上町並屋敷被仰付候旨、御老中小笠原佐渡守様被仰渡候段、御留守居大久保玄蕃頭様被仰渡、月日不知、町御奉行御支配に相成、享保九辰年中より公役銀相納來候。當時拜領地主左の通。

御作事小役 桐山新太郎

一 拜領町屋鋪百貳拾六坪

元祿年中より引續拜領。

御本丸御廣敷伊賀者 仙田大一郎

一 同百貳拾六坪

元祿年中木村喜太郎と申者拜領、其後寛政六年より拜領。

御作事小役 岡田新十郎

一 同百貳拾六坪

元祿年中山崎兵助と申者拜領、其後寛政五丑年六月より拜領。

御具足同心組頭 野村宇右衛門

一 同百貳拾六坪

元祿年中より引續拜領。

西九御小間使 高木覺藏

御府内備考卷之二十二 下谷之二 御具足町

御府内備考卷之二十二 終

一 同百貳拾六坪

人足寄場下役 島田孝次郎

元祿年中元島金三郎と申者拜領、寛政三亥年より拜領。

御本丸御廣敷伊賀者 金井運八

一 同百貳拾六坪

元祿年中より引續拜領。

御具足同心 矢部照三郎

一 同百貳拾六坪

元祿年中より引續拜領。

御具足同心 關口太郎左衛門

一 同七拾八坪

元祿年中より引續拜領。

小賣請組 土屋謙守組 内田三郎兵衛

但右元祿年中より拜領罷在候地主七軒、元祿後拜領仕候地主三軒有之、當時拾軒に御座候。

隣町 東の方仙體寺、西の方御島見山尾市の承、南の方上野神人屋鋪、北の方下谷御切手町。

以上丙戌書上



御府内備考卷之二十三

下谷之三

山崎町壹丁目

(町銀黒元)

一 右町名起立の儀は、年舊候儀にて書留等無御座、黒鉄町と申傳候由。其後元禄年中町屋舖に相成候節、東叡山麓の儀に付山崎町と名付候。往古此邊都て沼池葺立にて、元和二辰年黒鉄大繩地拜領仕、元禄十二卯年三月廿六日町屋舖に相成、山崎町貳ヶ町引分ヶ壹丁目貳丁目と唱申候。且山崎町壹丁目の内三百八十五坪、元禄十一寅年十月中六郷伊賀守様御用地被召上、同十二卯年月日不知淺草淺留町にわて代地被下置、當町々家に相成候節右代地も町屋敷に被仰付候。

一 町内 東西四拾四間餘、南北百拾四間餘。

一 四隣 東の方六郷佐渡守様下屋敷淺草幡隨院・長光寺大聖院持辨天社地、西の方蓮花寺仙龍寺、南の方近藤縫殿助様御屋敷、北の方山崎町貳丁目。

一 町内の儀は不殘黒鉄方拜領町屋舖にて、天正の度於三洲竹東の者被召抱、所々御陣場御用相勤、年月不知其後黒鉄の者被仰付、元和二辰年中御役人方御名前不知、初て當所に

(名人主地領拜)

わゐて黒鉄屋敷大繩地拜領仕、元禄十一寅年十一月町屋敷に相願候處、同十二卯年三月廿六日願の通町屋敷被仰付候旨、御老中秋元但馬守様被仰渡候段、御目付水野權十郎様六郷主馬様御申渡有之、同年九月三日町御奉行御支配に被仰付候旨六郷主馬様御申渡有之、山崎町貳ヶ町引分ヶ壹丁目貳丁目と唱、黒鉄方五拾人宛にて所持罷在、享保九辰年公役銀相納來申候。當時右拜領地主左の通。

一 拜領町屋敷九拾壹坪余 御休息御庭方 粕谷 平藏

一 元禄年中引續拜領仕候。 同斷 高橋 武右衛門

一 同九拾三坪余 御弓矢組同心 小島 金左衛門

一 同九拾壹坪半余 元禄年中粕谷孫右衛門と申者拜領仕、其後年月不知、當時右金左衛門拜領仕候。 御籠中様仕丁の者 田中 太兵衛

一 同九拾壹坪余 元禄年中引續拜領仕候。 表六尺 上野 喜十郎

一 同八拾八坪半余 御休息御庭方 宇田川 伊兵衛

一 同八拾八坪半余 御休息御庭方 宇田川 伊兵衛

一 同九拾壹坪余 御中問 太田 宇十郎

一 同八拾四坪余

右同斷

御目付支配無役 岩上 龜太郎

一 同八拾貳坪余

右同斷

御廣敷伊賀者 野崎 彌太郎

一 同八拾三坪余

右同斷

御廣敷伊賀者 金子 長次郎

一 同八拾三坪三分余

右同斷

御作事組同心 田口 儀三郎

一 元禄年中引續拜領仕候。

右同斷

御留守居同心 吉田 藤太郎

一 同八拾坪余

右同斷

裏六尺 吉田 新助

一 同八拾坪余

右同斷

裏六尺 宇田川 嘉兵衛

一 同八拾坪五分余

右同斷

黒鉄 柳 瀬藤藏

一 元禄年中宮田甚兵衛と申者拜領、其後年月不知、當時

右藤藏拜領仕候。

一 同八拾七坪余

右同斷

御廣敷下男 横田 半次郎

元禄年中山岸藤助と申者拜領、其後年月不知、當時右半次郎拜領仕候。

一 同八拾七坪四分余

右同斷

躰見御門番同心 小山 新助

一 同八拾四坪余

右同斷

御廣敷下男 宇田川 助左衛門

一 元禄年中拜領有無不知、其後年月不知、當時右助左衛門拜領仕候。

右同斷

御廣敷御下男 安井 熊太郎

一 同八拾三坪半余

右同斷

中之口番 小島 平十郎

一 元禄年中引續拜領仕候。

右同斷

黒鉄 太田 兼太郎

一 同八拾三坪三分余

右同斷

御切手番組同心 松崎 哥一郎

一 元禄年中宮田次郎兵衛と申者拜領、其後年月不知、當時右兼太郎拜領仕候。

右同斷

裏六尺 小野 源藏

一 同八拾坪

右同斷

裏六尺 高山 八太郎

一 元禄年中引續拜領仕候。

右同斷

御休息御庭方 宇田川 伊兵衛

一 同八拾坪

右同斷

二之九御小人 小川 源六







談の上、慶安の度其段中御番所石谷將監様御勤役の節、磯右衛門儀乞胸頭に相成、町人にて右跡家業致し候者は是又家業斗磯右衛門支配仕、其節を鑑札相渡し、壹人前四十八文宛毎月請取、淺草溜近邊出火の節は囚人爲警固人数貳拾人宛召連相詰來候。尤寺社境内其外明地辻々は罷出家業仕候もの、何國を參候哉確と相知不申者も可有之候間、右爲取締家業筋支配に被仰付候儀に御座候て、往古跡家業場所相廻り諸事心付來、當仁大夫迄十一代相續仕候。尤往古の書留等度々類焼にて焼失仕、委敷儀は相知不申候得共、前々跡宅仕家業斗善七支配請來申候。且往古跡仕來候家業左の通、

(類種の藝遊業家)

綾取 猿若 江戸萬歳 辻放下  
操り 淨瑠璃 説教 物真似  
仕形能 物讀 講釋 辻勤進

(札鑑藝遊)

え仁大夫手下の者日々相廻し、乞胸同様の家業致し候者見當り候得ば鑑札の有無相尋、鑑札無之家業筋乞胸支配の旨不辨者は右家業乞胸支配筋の旨得と申間、體成請人を取、御法度の儀は不及申仲ケ間作法可爲相守旨一札取支配に仕來候。尤乞胸支配筋之儀爲家業内證にて致鑑札無之者は道具取之相詰候上は其品相返し、彌家業致候得ば鑑札等相渡支配に致候定法の由、尤仲ケ間入の者有之候節は其度々善七方え相届候由、右仲間家業相止め候節は是又相届鑑札差戻し、勝手次第仲間相除申候。此儀家業斗の支配に有の候得者、仁大夫儀も同様家業相止め候得ば善七方引合候儀無之候。全く家業仕候内斗り支配請候儀有の、家業筋の儀に付諸御役所御呼出しの節は善七方同道にて罷出申候。身分の儀に付御呼出しの節は町役人差添候て罷出候。乞胸家業の儀は善七支配請候得共、仁大夫始仲間者共、元來町人に紛無御座候間、町法町並相勤來申候。浪人者等古主え跡參相願候内、渡世の乞胸相成候者、脇差帶し家業に罷出候處、安永二巳年三月中町御奉行牧野大隅守様御勤役の節乞胸の者共帶刀は不及申、脇差體の者家業先え一切無用可仕旨被仰渡、其節を支配一統脇差體のもの堅差留申候。乞胸住所の儀は所々有之申候。夜分門付致候者又は素人にて淨瑠璃を語り錢を乞候者は鑑札相渡、毎月四拾八文宛請取支配仕候。日々袖乞に罷出候者の儀は前書家業付に有之候辻

勸進に有之、無藝成もの又た妻子共の稼にて非人同様の渡世に候得ば、身分は町人よりは譯違ひ候儀に御座候。

以上丙戌書上

山崎町貳丁目

(町録黒元)

一 右町名起立之儀は年舊り候儀にて書留等無御座、黒鉄町と申傳候由、其後元祿年中町屋敷に相成候節、東叡山麓の儀に付山崎町と名付候由、往古此邊郡沼池葎立にて元和二辰年中黒鉄方大細地に拜領仕、元祿十二卯年三月廿六日町屋敷に相成、山崎町貳ヶ所に引分、壹丁目貳丁目と唱申候。町内 東西え五拾九間余、但不殘兩側町に御座候。  
一 隣町 東之方新坂本町、西之方御切手町、南之方山崎町壹丁目、北之方坂本村耕地。  
一 當町之儀者不殘黒鉄方拜領町屋敷に而、天正の度於三州竹束の者に被召抱、御陣場御用相勤其後年月不知、黒鉄の者へ被仰付、元和二辰年中御役人方御名前不知、初而於當所黒鉄屋敷大細地へ拜領仕候處、元祿十一寅年十一月町屋敷へ相願候處、同十二卯年三月廿六日願の通町屋敷に被仰付候旨、御老中秋元但馬守様被仰渡候段、御目付水野權十郎様、六郷主馬様御申渡有之、同年九月三日町御奉行御支配に被仰付候旨、六郷主馬様御申渡有之、山崎町貳ヶ町に

(名人主地領拜)

引分れ壹丁目貳丁目と唱、黒鉄方五拾人宛に而所持罷在、享保九辰年中より公役銀相納來申候。當時右拜領地主左之通。  
一 拜領町屋敷八十四坪 御留守居同心 片崎 庄左衛門  
一 同九十一坪 元祿年中引續拜領仕候。 西九柳廣敷御下男組頭 村越 興作  
一 同八十四坪半 元祿年中引續拜領仕候。 細休息御屋方 北川 熊藏  
一 同八十七坪半 元祿年中引續拜領仕候。 黒鉄 山本 貞吉  
一 同八拾四坪半 元祿年中引續拜領仕候。 西九柳廣敷御下男 吉田 與惣兵衛  
一 同八拾四坪半 元祿年中引續拜領仕候。 西九柳廣敷御下男 三澤 彦左衛門  
一 同九拾壹坪半 元祿年中引續拜領仕候。 御目付支配無役 岡田 清右衛門  
一 同九拾坪余 元祿年中引續拜領仕候。 支配勘定 中川 次左衛門  
一 右同斷



- 一 同八拾四坪半 御目付支配無役 石橋萬吉 元祿年中石川吉右衛門と申者拜領、其後延享元子年中右萬吉拜領仕候。
- 一 同八拾壹坪二合五勺 御休息御庭方 齋藤彦右衛門 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾壹坪二合五勺 西九御休息御庭方 村越儀之助 元祿年中野村清助と申者拜領、其後寛政十一未年中右儀之助拜領仕候。
- 一 同八拾壹坪二合五勺 御休息御庭方 吉田彌之助 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾壹坪二合五勺 黒鐵 石橋徳次郎 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾四坪半 西九御休息御庭方 齋藤次右衛門 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾七坪 御目付支配無役 橋本鐵吉 右同斷
- 一 同八拾四坪半 黒鐵 齋藤久三郎 元祿年中拜領主不知、其後享和元酉年中右久三郎拜領仕候。
- 一 同六拾七坪余 御休息御庭方 中村彌八

- 一 同六拾七坪余 元祿年中引續拜領仕候。 西九御切手御門番同心 鈴木藤吉 右同斷
- 一 同六拾七坪余 御目付支配無役 高原八十次郎 右同斷
- 一 同八拾坪 御休息御庭方 齋藤傳二郎 元祿年中拜領主不知、其後延享元子年中右傳二郎拜領仕候。
- 一 同七拾六坪半 御目付支配無役 磯文吉 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同七拾六坪半 西九御齋藤御下男 古澤藤五郎 右同斷
- 一 同八拾四坪 御勘定所湯吞所同心 岡田助右衛門 元祿年中坪内傳藏と申者拜領、其後寛政十一年中右助右衛門拜領仕候。
- 一 同八拾四坪 御置標仕丁組頭 樋田甚輔 元祿年中拜領主不知、寛延元辰年中右甚助拜領仕候。
- 一 同八拾四坪半 西九奥六尺 鈴木十兵衛 元祿年中引次拜領仕候。
- 一 同六拾四坪半 御勘定所湯吞所同心 中島貞藏 右同斷

- 一 同八拾四坪半 御鐘同心 桑原雅太郎 右同斷
- 一 同八拾四坪 人足寄場下役 舟川七郎右衛門 元祿年中拜領主不知、安永元辰年中右七郎右衛門拜領仕候。
- 一 同八拾四坪 御休息御庭方 磯九八 元祿年中拜領主不知、文化六巳年中當時右九八拜領仕候。
- 一 同八拾五坪余 西九御裏門番同心 中村善太郎 元祿年中引續拜領。
- 一 同八拾四坪 奥六尺 上野金八 右同斷
- 一 同七拾四坪七合五勺 御作事同心 村田金次郎 元祿年中鈴木武助と申者拜領、其後文化三寅年中右金次郎拜領仕候。
- 一 同八拾八坪 西九奥御小人 中野榮次郎 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾二坪半 紅葉山御高屋六尺 磯左衛門 右同斷
- 一 同八拾二坪半 黒鐵組頭 吉田惣次郎 元祿年中拜領主不知、明和二酉年中右惣次郎拜領仕候。

- 一 同九拾坪 黒鐵 喜多川與八 元祿年中伊藤久次郎と申者拜領、其後明和二酉年中右與八拜領仕候。
- 一 同八拾七合五勺 御目付支配無役 武田金次郎 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾壹坪 御休息御庭方 山崎半之助 元祿年中高野只八と申者拜領、其後寛政七卯年中右半之助拜領仕候。
- 一 同九拾壹坪 御奥六尺 石川定七 元祿年中引續拜領仕候。
- 一 同八拾四坪半 西九奥六尺 入山金七 右同斷
- 一 同九拾坪余 御留主居同心 幸山小作 元祿年中山崎傳八と申者拜領、其後寶曆七丑年中右吉五郎拜領仕候。
- 一 同八拾四坪半 黒鐵組頭 村越半左衛門 元祿年中齋藤庄五郎と申者拜領、其後寛政十一未年中右半左衛門拜領仕候。



(人願下配院藏大方馬鞍)

一 同八十四坪半 御目付支配無役 高野傳右衛門  
 元祿年中引續拜領仕候。  
 一 同八十四坪半 一橋様小十人 鶴澤庄太郎  
 右同斷  
 一 同九十四坪二合五勺 御目付支配無役 舟川市五郎  
 右同斷  
 一 八十四坪半 御庭方組頭預り地  
 一 八十四坪半 右同斷  
 一 六十七坪余 右同斷  
 一 七十五坪 黒鉄組頭預り地  
 一 四十五坪 中村彌八 高木藤吉足地 高原八十次郎 御庭方組頭預り地  
 右者前々御休息御庭方組頭預地三ヶ所、黒鉄組頭預地壹ヶ所、右三人并御庭方足地共壹ヶ所所有之候。  
 鞍馬方大藏院配下願人 右起立の儀は年舊候儀にて更に相知不申、鞍馬方大藏院配下にて、人別の儀は願人願頭之差出し、夫々社御奉行所之差出候、尤町方人別にも相加り罷在、寺社御奉行所御支配にて、諸願筋有之節は願頭添輪を以右御奉行所之願出申候。町御奉行之罷出候節者町役人差添罷出候儀に御座候。

(地代町伏山込牛)

且又願頭發端の儀は元祿年中の頃にて年功を積差働有之候者願頭役本山が被申付坊名を給り相附申候。願人組頭坊名の儀は如此房の字付申候。當所に願人住居起立者享保二戌年中が長龍と申もの住居仕、夫が引續今以願人罷在、寛政年中山本坊と申者當所にて願頭相勤、文化七年十二月廿八日病死仕、當時同人悴淨達并正山兩人組頭役相勤、下谷邊取締仕罷在候。  
 但元祿の度願人願頭起立は橋木町に罷在候念正坊と申者初て相勤、當時にて者玉泉坊、高林坊兩人、是又江川町に罷在相勤申候。  
 以上丙戌書上

山伏町  
 一 右當町の儀は本多喜十郎様御屋敷上り地にて牛込山伏町地に有之、拜領地主の儀は天正の度於三州被召出、相州小田原御城御番榊斐與右衛門様組同心相勤、其後二丸御番同心被仰付、寛永の度拾八人初て牛込山伏町におゐて屋敷拜領仕候處、手當難行届候に付御留守居牧野内匠頭様願の上、寛永十一戌年商人差置候處、享保八卯年十二月十八日夜八時村井彌左衛門屋敷紺屋久右衛門宅が出火致し、山伏町不殘焼失致し候に付、右町屋敷上り地に被仰付候旨、石川近江守様被仰渡候段、二丸御留守居番安藤若狭守様被

(名人主地領拜)

仰渡、同九辰年三月十二日於淺草本多喜十郎様上り屋敷を代地に被下置、尤町屋敷に被仰付候旨水野和泉守様被仰渡候段、御留守居内膳正様被仰渡、町御奉行御支配にて享保九辰年が公役銀相納來、當時拜領地主貳拾壹人有之左の通。  
 一 拜領町屋鋪百六十二坪余 御膳方 星野新左衛門  
 享保年中引續拜領仕候。  
 一 同百六十坪余 西九御裏御門番同心 手鳥彦右衛門  
 享保年中引續拜領主不知、其後年月不知、右彦右衛門拜領仕候。  
 一 同百五十五坪余 西九御裏御門番同心 山本金兵衛  
 享保年中引續拜領仕候。  
 一 同百六十三坪余 學問所勤番 石原忠藏  
 右同斷  
 一 同百六十坪余 學問所下番 村井專之助  
 右同斷  
 一 同百七十坪余 細鐵炮玉藥同心 吉田金次郎  
 右同斷  
 一 同百五十四坪余 小普請組神屋豐後守組 岡田助太郎 西九御裏御門番同心 荒川榮太郎  
 享保年中白鳥作十郎拜領、寛政七卯年中が右助太郎家、榮太郎家拜領仕候。

一 同百六十一坪余 小普請組土屋能登守組 山口廣五郎  
 享保年中引續拜領仕候。  
 一 同百五十四坪余 御下男 高木彌惣次  
 享保年中拜領主不知、其後年月不知、右彌惣次家、源二郎家拜領仕候。  
 一 同百六十一坪余 御留守居番同心 志田揚右衛門  
 享保年中山口半藏拜領、文化十四丑年中が右揚右衛門拜領仕候。  
 一 同百五十五坪余 御留守居同心 加藤忠左衛門  
 享保年中引續拜領仕候。  
 一 同百三十六坪余 西九御裏御門番同心 高橋忠藏  
 右同斷  
 一 同百七十二坪余 小普請組久世伊勢守組 青木文次郎  
 右同斷  
 一 同百四十坪 小普請組長并五右衛門組 古川陸太郎  
 右同斷  
 一 同百八十三坪余 御作事方手代 町田甚助  
 享保年中後藤政右衛門拜領、文化七未年中が右甚助家、吉二郎家拜領仕候。



(村澤廣元)

- 一 同百七十三坪余 御臺様仕丁 河合孝八郎 享保年中引續拜領仕候。
- 一 同百六十一坪 西丸御裏御門番同心 萩原藏次郎 右同斷
- 一 同百七十坪余 同 山本伊平次 右同斷
- 一 但享保年中引續罷在候地主拾三軒、享保後引續領地主八軒、當時貳拾壹軒に御座候。
- 一 町内 東側南北九拾五間余、東西南の方にて三拾間余、西側南北二十間余、東西三十間。
- 一 隣町 東の方燈明寺、黒鉄組屋敷、西の方武家屋敷、南の方源空寺、白泉寺、北の方松平淡路守屋敷。
- 一 與八店 龜之助 右龜之助義母に孝行仕候に付、御褒美頂戴仕候。尤委敷義者相知不申候得共、寛政三亥年の由申傳候。以上丙戌書上

新坂本町

右町名起立の儀坂本壹丁目にて書上候通御座候。此邊元龜の度廣澤村と唱候由、年舊候儀にて馳と相知不申、元寺社御奉行御支配に相成、坂本四ヶ町に引分、壹丁目・貳丁目・

(隣野上・薄葉二)

- 一 三丁目・四丁目と相唱申候。右本町が年歴後町地に相成候故新坂本町と相唱候哉に御座候。
- 一 町内 東西拾六間余、南北五拾六間。但片側町家。
- 一 隣町 東武士屋敷、西山崎町貳丁目、南大聖院、北坂本村。反別壹反四畝八歩。
- 一 往古者二葉之郷と唱候由に候得共、天正之度水帳に者上野郷と有之相分り不申、庄名之譯相知不申、領名峽田領と唱申候。
- 一 御檢地の儀は壹丁目より申上候通に御座候。以上丙戌書上

御切手町

右町名起立の儀往古此邊都て沼地敷立にて、寛永元子年御切手同心拜領仕、元祿十二卯年三月中町屋舖に相成候節御切手町と相唱申候。町内東側南北八百八拾間余、東西二拾間、西側南北七拾間余、東西二十八間余。

(地領拜心同手切御)

(名人主地領拜)	
一 拜領町屋舖五十四坪半 西丸表六尺 杉山甚九郎	一 同百四十七坪 御切手同心組頭 田中清左衛門
一 元祿年中割餘り地、寶永五年右甚九郎拜領仕候。	一 同百四十七坪 元祿年中竹内勘左衛門拜領、享保六巳年右清左衛門拜領仕候。
一 同百四十七坪 細工所同心 内田傳之丞	一 同百四十七坪 御念同心 野村助藏
一 同百四十七坪 小普請組土屋讀岐守組 山崎助右衛門	一 同百三十坪 元祿年中引續拜領仕候。
一 同百四十七坪 小普請組淺野隼人組 藤曲平次郎	一 同百三十坪 小普請組佐野豐助守組 岩上清之助
一 同百四十七坪 町方同心 磯貝勘兵衛	一 同百三十坪 御先手同心 田中源四郎
	一 同百三十坪 元祿年中引續拜領仕候。
	一 同百三十坪 小普請組太田内藤頭組 市川惣右衛門
	一 同百三十坪 小普請組土屋讀岐守組 境祐二郎
	一 同百三十坪 小普請組土屋讀岐守組 大山鎌吉



- 一 同百三十坪 御代官手附 井上善平
- 一 同百三十坪 右同斷 百人組同心 瀬尾甚助
- 一 同百三十坪 右同斷 御切手同心 白幡源四郎
- 一 同百三十坪 右同斷 御先手同心 植竹吉次郎
- 一 同百三十坪 右同斷 御材木同心 栗原庄之助
- 一 同百三十坪 右同斷 小普請組御醫師淺野準人支配 瀧野為伯
- 一 同百三十坪 元祿年中藤山源次郎拜領、文政四巳年右為伯拜領仕候。
- 一 同百三十坪 百人組同心 赤見文五郎
- 一 同百三十坪 御先手同心 山口與十郎
- 一 同百三十坪 右同斷 御書院番同心 徳野祐吉
- 一 同百三十坪 右同斷 小普請組淺野準人組 辻林兵衛
- 一 同百五十七坪半 小普請組佐野豐前守組 藤井與右衛門
- 一 同百五十三坪 右同斷 御膳所小間使 加藤鎌之助
- 一 同百四十坪 右同斷 小普請組石川民部組 中西熊次郎
- 一 同五十七坪 右同斷 小普請組佐野豐前守組 曾根新十郎
- 一 同百五十三坪 右同斷 黒鐵 吉川文次郎 吹上御庭方 上野新右衛門
- 一 同百五十七坪 元祿年中太田兵十郎拜領、其後年月不知、右文次郎家、新右衛門家拜領仕候。 御天守下番 大橋善右衛門
- 一 同百五十七坪 元祿年中引次拜領仕候。 百人組同心 瀬戸源之助
- 一 同百五十七坪 右同斷 御普請役 水谷茂十郎
- 一 同百五十七坪 元祿年中菅沼次右衛門拜領、享保九辰年右茂十郎拜領仕候。 御目付支配無役 岡谷鐵太郎

- (んこ女貞)
- 一 御褒美鳥目拾貫文 喜助店 長兵衛妻 心
  - 一 右の者儀夫長兵衛餅賣渡世致候處、中風相煩渡世難成、晝夜附添助抱致、少々の衣類雜物等賣拂夫并娘を養育致候侍候。
  - 一 自身番屋 間口三間、奥行九尺
  - 一 右自身番屋の儀町内續養玉院構外下水際之古來番屋相建有之候得共、書留焼失仕御願濟年月相知不申、然る處安永五申年中養玉院前町屋に相成候節、番屋取拂右町家借請店並番屋に仕相勤候處、文化十三年閏八月中右門前町家取拂に相成候に付、養玉院を掛合の上、先規の通番屋並夫來木戸共相連申度段文化十四丑年二月朔日、永田備後守様町御奉行の節奉願候處、御見分の上同月十八日願の通被仰付候。
  - 一 同百五十七坪 御裏御門番同心 小柳津 茂十郎
  - 一 但元祿年中引續拜領仕候地主三拾壹軒、元祿後拜領仕候地主九軒有之、當時四拾軒に御座候。
  - 一 同百五十七坪 御代官手附 佐藤三四郎
  - 一 同百五十七坪 右同斷
  - 一 同百五十七坪 御具足同心 渡邊彦藏
  - 一 元祿年中保谷與八拜領、享保六丑年右鐵太郎拜領仕候。

- 一 同百五十七坪 共、給續兼上野地中へ参り佛供を貫粥に致相用、疊の糸をうみ又者買物手紙使等を致し纏の賃錢を取、四十年の間夫娘を養育致候處、長兵衛義當四月中病死致、右體困窮之處貞心を盡し候段、輕き者には奇特の義に付、右の趣被仰立、爲褒美鳥目拾貫文被下置候段、文政五年七月廿八日、町御奉行簡井伊賀守様於御白洲被仰渡頂戴仕候。其後、人義去申年六月五日病死仕候。
- 一 地主市川惣右衛門殿地面内井戸有之、拾九年程以前井戸替の節、水底丈々壹寸四分程之土器にて佛像並壹寸五分程の地藏數三拾程掘出、當所家主にて井戸屋甚助と申者所持仕候。尤佛像の方には脊中に大佛と彫有之、其外は悉心成と銘御座候。且當時にても水替の節は出候由に御座候。 以上 丙戌書上
- 一 善養寺門前 右善養寺門前起立の御願濟等相知不申候。尤古跡地の由申傳候。
- 一 當寺院内裏山なたれ共に貳百四拾三坪四合五夕、享保二酉年御用地に被召上、右の内山なたれ九十三坪代地除殘而百五十坪四合五夕は爲代地東叡山領同所町並南の方五十坪壹合八夕、北の方百坪貳合七夕、都合百五十坪四合五夕の處當寺に被下置、尤町屋作事に差免候様井上河内守様被仰聞



候旨、享保三戌年十二月、寺社御奉行所に於て松平對馬守様被仰渡候。尤已前門前町屋作事御免の儀は書留等無御座候間相知不申候。

- 一 町内表間口南北五拾壹間余、裏行東西五間半。
- 一 隣町東の方坂本町壹丁目、西の方同寺院境内、南の方東叡山新御門、北の方坂本町壹丁目。

以上 丙戌書上

坂本町壹丁目

(村澤廣元) 町名起立の儀此邊元龜の比廣澤村と唱候由、年舊候儀にて稔と相知不申候。天正度の水帳名主傳次郎所持仕、右水帳の内坂本と申地所有之候得ば、其比坂本村と唱候儀と奉存候。天和三亥年八月中御目代田村權右衛門役所へ書上候坂本村古繪圖面の内、古河表通軒數合七拾軒、但田舎間此間數三百七十間表店數百八拾九、裏店貳百四拾八、右は古町寛永十四丁丑年天和三年迄四拾七年に罷成候と認め有之、新町分表通軒數合五拾五軒、但京間數貳百七十四間、表店七拾、右新町慶安元戌年天和三年迄三拾六年に相成候と認め有之、古町新町軒數合百八軒と相見候得ば、町方起立の儀は寛永十四年の比より追々町家取立に相成候儀と奉存候。其後寺社御奉行御支配町並屋敷に御座候處、延享二丑年中町御奉行御支配に相成、坂本町四ヶ町に引分、壹

(町御門衛右政)

一 隣町東の方御切手町西の方御山内、南の方善養寺門前、北の方坂本町貳丁目。

一 町内小名の儀東側中程を東の方御切手町えの横町有之、家主政右衛門と申者罷在候に付前々政右衛門横町と申習し候。往古上野島地の節作場道の由にて、山道とも申來候得共書留等は無御座候。

一 往古御料所にて東叡山御建立の後御宮御神領に相成、田村權右衛門支配御料所の方は明曆萬治の比には永田九郎兵衛様・野村彦太夫様御代官所に有之、其後追々東叡山領に相成、町並屋敷の處延享の度町方御支配相成申候。尤御年買地の儀に付代永上納之儀は田村權右

(町地代本坂川深)

一 丁目・貳丁目・三丁目・四丁目と相唱、其外坂本表町・新坂本町・淺草坂本町等は當町代地の由申傳候得共、書物燒失仕年代相知不申候。

一 享保三戌年中貳丁目え掛面側裏御山内裾通幅七間余、長町並の通火除地に被召上、同年月日不知深川松村町續に於いて表間口南北四拾間余、裏行東の方拾九間、西の方拾壹間の場所代地に被下置、深川坂本代地町と唱申候。

一 但火除地に相成候場所は上野御山内御掛りに御座候。

一 町内東側間口百四間余、奥行南の方拾四間餘、西側間口四拾八間余、奥行北の方拾九間餘、但兩側町屋に御座候。

(郷野上・郷葉二)

一 衛門役所へ上納仕候。

一 反別壹町貳反三畝四歩。

一 往古は二葉郷と唱候由に候得ば、天正度の水帳には上野郷と在之郷名相分り不申、庄名の譯相知不申、領名の儀は畷田領と唱申候。

一 檢地年代の儀は天正十九年、御役人御姓名不相知、其後慶安年中明曆年中、御役人御姓名不相知、御水帳の儀天正度は有之候得共慶安明曆度のは燒失仕候。寛政三年九月神尾若狹守様、曲淵豐後守様御改に御座候。

高札場

一 同町三丁目に有之、坂本町村一體持に御座候。

名主 二葉傳次郎

一 右傳次郎先祖東叡山御草創已前此邊廣澤村と唱候由、其比は上野の内居屋敷不知罷在、二葉丹後守名乘年月不知廿八日死去、天正の度水帳に相見法名丹室著後禪定門と申候。

一 二代目監物は又天正の水帳に相見、年月不知候九日死去、法名玄心禪定門と申候。三代目市三郎と申者正保四亥年五月朔日死去、宗植禪定門と有之、其子市三郎と申者明曆三酉年三月廿九日死去、眞岸休正禪定門と申候。悴市三郎と申候節羽州秋田の住職仕候。禪定正洞院と申者坂本村林泉寺え年曆不知仕職仕候。後 御目見得仕來候儀に付寛文八申年十月中、寺社御奉行所御尋の筋有之候砌前書市三

(房午葉二)

一 耶差出候書面有之、其比が旦那寺にて右山號を廣澤山と唱申候。左候得ば往古廣澤村共申候哉、稔といはし候書物燒失いたし相知不申、且武州豐島郡尾久村二葉山萬光寺と申候天台宗の寺有之、元上野御山内に罷在候由、都て其比者一圓二葉の郷と唱候由、是亦申傳迄に有之、天正度の水帳當時所持罷在、右水帳には武州豐島郡上野郷と有之、郷名不知、先代上野罷在候節が持傳の由にて佛具花立壹夕、妙見金佛壹體其外古書物類有之、且又代々日光御門主様え毎年正月二日午房貳拾五本獻上仕來、二葉午房と唱來候。天正年中が當代迄拾四代相續仕候。尤實子相續の儀は當傳次郎先代迄拾三代に御座候。寛永年中東叡山御建立の砌が子細不知、當時坂本町壹丁目の内西側町屋敷三畝歩前々が所持罷在、寛延度の御檢地帳にも御除地相成申候。尤當傳次郎祖父傳次郎儀御場肝煎相勤申候

以上丙戌書上

坂本町貳丁目

一 町名起立の儀は壹丁目にて書上候通りに御座候。元寺社御奉行御支配町並屋敷に御座候處、延享二巳年中が町御奉行所御支配に相成坂本町四ヶ町に引分々、壹丁目・貳丁目・三丁目・四丁目と相唱申候。壹丁目より町内え掛ヶ西裏火除代地の譯、其外坂本裏町・新坂本町・淺草坂本町等の儀は



(郷野上・郷葉二)

壹丁目にて書上候通りに御座候。  
 一 町内東側間口六拾八間余、奥行東西南の方三十三間餘、北の方拾六間餘、西側間口七拾四間余、奥行東西南の方貳拾三間餘、北の方七間餘、隣町東の方坂本町、西の方御山内御火除地、南の方坂本町壹丁目、北の方同町三丁目。  
 一 町内西裏幅七間余、長拾八間享保三戌年上野御山内火除地被仰付候、代地の儀は同年月日不知、深川松村町續え代地被下置候。  
 一 往古は二葉郷と唱候由に候得共、天正の度水帳には上野郷と有之、郷名相知不申、領名の儀は峽田領と唱申候。御檢地の儀は壹丁目を申上候通りに御座候。  
 一 右平右衛門元祖は江洲叡山坂本に罷在候て、寛文年中本照院宮様京都へ御下向の節御供仕罷下り、御豆腐御用被仰付罷在候處、其後天和三亥年金御紋御用掛々札被爲仰付、親平右衛門迄御目見被爲仰付、私迄七代相續仕、其後元禄十一寅年上野中堂御普請の砌、上野御役者佛頂院様・圓覺院様被仰立、御普請奉行萩原近江守様・布施藤兵衛様・曲淵伊左衛門様・近藤平十郎様御掛りに而上野廣小路仁王門前東側にて六人一繩に地面拜領仕罷在候處、同年御用地に被召上、寶永の度同所にて又候拜領仕、當時迄所持仕罷在候。寛保二戌年慈眼大師様御百年忌御法事に付、以由緒別御香奠獻

(村澤廣は元)

上被仰付候。天和三亥年慈眼大師様繪像准后宮様を御直に頂戴仕候由にて、唯今以所持仕罷在候。以上丙戌書上

坂本町三丁目

一 町名起立の儀は壹丁目にて書上候通りに御座候。此邊元龜の度廣澤村と唱候由。年舊候儀にて馳と相知不申、寺社御奉行御支配町並屋敷に御座候處、延享二丑年中か町御奉行御支配に相成、坂本四ヶ町引分々、壹丁目・貳丁目・三丁目・四丁目と相唱申候。  
 一 町内東側間口六拾八間余、奥行東西貳拾二間余、西側間口七拾壹間余、奥行東西南の方拾九間余、北の方拾六間余、但坤の方出張有之。  
 一 隣町東の方坂本村、西の方下谷御簞笥町、南の方坂本町貳丁目、北の方坂本町四丁目。  
 一 往古は二葉郷と唱候由に候得共、天正の度水帳には上野郷と有之、庄名の譯相知不申、領名の儀は峽田領と唱申候。反別壹町四反貳歩。  
 一 御檢地の儀は壹丁目申上候通りに御座候。  
 一 英信寺買添地間口五間余、奥行貳拾貳間余。  
 一 右御願濟にて町並屋敷の内買添地に相成、同寺入口に相成居申候。

(記内庄本)

高札場 壹ヶ所長貳間、幅壹間、右は坂本町四ヶ町坂本村一體の持に御座候。  
 一 右者元淺草高原屋舖に住居住、文化四丁卯年六月中當所權兵衛店へ轉住仕候。以上丙戌書上

坂本町四丁目

一 町名起立の儀は壹丁目にて書上候通りに御座候。  
 一 町内東側間口百三拾壹間余、奥行南の方廿三間余、北の方廿三間余、但嶺照院除地間數除之。  
 一 西側間口六拾貳間余、奥行北の方拾七間余、南の方拾七間余、隣町東の方坂本町、西の方御簞笥町、南の方坂本町三丁目、北の方金杉上町。  
 一 嶺松院除地町屋敷 表間口六間、奥行貳拾間。  
 一 右御年貢は差出不申候得共、積金其外諸役相勤申候。  
 一 往古は二葉郷と唱候由に御座候得共、天正の度水帳には上野郷と有之、相分不申候。領名の儀は峽田領と唱申候。反別壹町貳反八畝貳拾六歩。  
 一 御檢地の儀は壹丁目にて申上候通りに御座候。以上丙戌書上

(神明崎照野小)

嶺松院門前

一 右門前起立御願濟年月相知不申候。  
 一 門前町屋小野照崎明神表門北側間口三間半、奥行貳拾間。  
 一 隣町東の方小野照崎明神境内、西の方往來隔坂本町四丁目、南の方同社境内往來隔同町四丁目、北の方町續き同町。  
 一 小野照崎明神別當嶺松院 坂本町に有之候。以上丙戌書上

御簞笥町

(名人主地領拜)

御簞笥町

一 町名の起は御簞笥奉行組同心役地故、御簞笥町と申傳候由に御座候。  
 一 町内南北え間口七拾四間余、東西え裏行拾八間余。但片側町。  
 一 隣町東の方坂本町三丁目、西の方要傳寺、上野御家、來屋敷、金杉村、南の方坂本町貳丁目、北の方坂本町裏町。  
 一 當町の儀は不殘御鐵炮御簞笥奉行組同心役地にて、拜領主の内小普請入又は組除き相成候節は御入人の者右跡拜領仕候儀にて、町屋敷役地に相成候起立年曆共相知不申、町方御支配にて享保九辰年か公役銀相納來申候。當時拜領主左の通。  
 一 拜領町屋舖百貳拾貳坪余 御鐵炮御簞笥同心 金井吉次郎  
 一 寛政四子年中拜領仕候



(村澤廣元)

- 同百貳拾六坪余 同組頭 新嶋 庄平
- 明和四亥年中拜領仕候 同 小林作二郎
- 同百四拾三坪余 寛政元酉年拜領仕候 同 近藤和二郎
- 同百貳拾八坪余 文化六巳年中拜領仕候 同組頭 小野鐵之助
- 同百三拾五坪余 安永九子年中拜領仕候 同 村田巳之助
- 拜領町屋敷百三拾三坪余 文政四巳年中拜領仕候 同 田吹熊五郎
- 同百四拾坪余 寛政元酉年中拜領仕候 同 戸田又五郎
- 同百貳拾九坪余 文政五辰年中拜領仕候 同 坪田平吉
- 同百四拾壹坪余 安永三午年中拜領仕候 同 御簞寄同心組頭持 以上丙戌書上
- 同百貳拾坪余

坂本裏町

右町名起立の儀壹丁目にて書上候通に御座候。此邊元龜の

(料御山歌東)

(院成眞)

- 度廣澤村と唱候由、年蓄候儀にて、元寺社御奉行御支配町並屋敷にて御座候處、延享二丑年町御奉行御支配に相成、坂本四町に引分、壹丁目・貳丁目・三丁目・四丁目と相唱申候。當町の儀は右四ヶ町之西裏手に有之候故坂本裏町と相唱申候。
- 町内 南北貳拾貳間半、東西拾三間余。
- 隣町 東坂本町四丁目、西金杉村、南御簞寄町、北金枳村。
- 往古二葉郷と唱候由に候得共、天正度の水帳には上野郷と有之、郷名相分不申、庄名の譯相知不申、領名の儀は峽田領と唱申候。
- 往古御檢地の儀は壹丁目にて申上候通り、寛延三年九月神尾若狹守様、曲淵豊後守様御檢地に有之候。尤天正度の檢地水帳有之候得共當地は相用不申候。
- 當山派修驗眞成院 榮助店に罷在候。以上丙戌書上

金杉上町

右町名起立の儀相分不申并草分人の者無御座候。右町の儀は金杉下町・金杉村一高御年貢地にて、東叡山御發起後正保三戌年中同御領に相成、寺社御奉行御支配町並屋敷に有之候處、延享二丑年町御奉行御支配に相成候。正保巳前御料所の趣に御座候。右町御年貢の儀は當時東叡山御目代田

(寺徳萬)

(神明島三)

- 村權右衛門役所え代永にて相勤來申候。諸願訴訟等は同役所添翰を持町御奉行所え罷出候。
- 町内 東西え四拾七間余、南北四町余。
- 町並抱屋舖百貳拾坪 石川中務少輔
- 但家守相附町役爲相勤候。
- 町屋敷貳百八拾三坪六合七夕 萬徳寺
- 但内貳百拾六坪、天和三亥年五月、本田淡路守様御奉行所にて境内地被仰付候。
- 町屋舖百四拾壹坪貳合五夕 同
- 但内九拾六坪、寶永四亥年四月中、本田彈正少弼様御奉行所にて墓所地被仰付候。
- 右殘地表通町並の通古來より貸家に相成居候。尤元來寄附地にて寺門前地には無御座候。依之別廉に申上候。尤家守相付町役町並の通相勤申候。
- 四隣 東坂本村、龍泉寺村并石川中務少輔様御屋敷、西金杉村并東叡山御抱屋敷、其外安樂寺、南下谷坂本町、北金枳下町并戸田采女様御屋敷。
- 火除地貳百貳拾貳坪貳合五夕。
- 但右東側中程に有之候。

右の内幅五間、長貳拾間の場所敷り、此坪百坪の場所に間口貳間奥行貳間半の土藏壹ヶ所、是は金杉上町・同下町・金杉村鎮守三島明神に有之候處、右兩町之神輿置場古來より有

- 之候。御願濟年月等相知不申候。
- 火除地百七十九坪貳合五夕
- 但西側中程に有之候。
- 前書貳ヶ所火除地の儀は金杉上町・下町兩町にて古來より預り地に有之、年々田村權右衛門役所え地代相納來申候。御水帳にも火除地と有之、起立相知不申候。
- 火除地拾七坪貳合五夕
- 但右は東側北寄に有之候。
- 右は當町一手にて相預り、地代等不相納候。是又起立相分不申候。
- 町内反別三町三反三畝貳拾歩峽田領と御座候。
- 但金杉上町・下町・金杉村一高にて惣高六百八拾壹石八斗三升七合、内四拾三石三斗七升六合町内分高。
- 御檢地寛延三年九月神尾若狹守様・曲淵豊後守様御改、但當時右水帳相用申候。
- 御高札場壹ヶ所 幅壹間三尺、長貳間貳尺。
- 右は金杉上町・下町・金杉村一體之高札にて、當町内火除地の内古來より有之、御願濟年月相分不申候。
- 自身番屋貳ヶ所。
- 内壹ヶ所間口貳間、奥行壹間半、町内中程に有之、御願等不申候。壹ヶ所は間口貳間半、奥行四間半、町内火除地の内古來より有之、御願濟年月相分不申候。



(門衛左郎次田勝)

名主 勝田次郎左衛門

右次郎左衛門先祖由緒年曆相分不申、慶長以來引續金杉村町名主役相勤、私迄拾壹代相續仕候。元來金杉村町一圓名主役仕候處、拾代已前次郎左衛門姉御養子八郎右衛門之金杉下町・下金杉村と申名目願の上相立分々遣、鈴木八郎右衛門と申別家爲仕、名主役相勤候旨申傳に御座候。併御水帳并村町高の儀は上下金杉村町一高に相成居候。右八郎右衛門家に先年退轉仕候。正保三戌年中東叡山御領に被仰付、同御殿えは苗字相名乗申候。私儀は古來村方住居仕、七ヶ年以前辰年中村内百姓退轉無之様仕法仕候義、去酉年十二月中日光御門主様達御聞、奇特の旨にて熨斗目着用御免被仰付并當八月中御鷹野御場所肝煎役被仰付、三人扶持頂戴仕、

御成先脇差相帶、野羽織着用可仕旨被仰付候段、御鳥見組頭西郷岩藏殿、高倉庄九郎殿被仰渡候。

神職田部井監物、京白川家配下長左衛門店罷在候。

以上丙戌書上

金杉下町

右町名起相知れ不申并草分人と申者無御座候。右町元寺社御奉行御支配町並屋敷に有之候所、延享貳丑年町御奉行御支配に相成候。併御年貢の儀は東叡山御目代田村權右衛門

(水用子王)

役所え代永にて上納仕來候。諸願訴訟等は同役所添狀を持町御奉行所へ罷出候。且又引地・代地・築地・新地等無御座候。

町内 東西四拾七間余、南北四町程。

隣町 南金杉上町、北三之輪町、東龍泉寺村、西金杉村。

自身番屋 間口貳間、奥行五間。

右は御願濟年月相分不申候。

王子用水 堀幅三尺。

右用水土橋壹ヶ所有之、幅四間余、長五尺、里俗土橋と唱申候。

町内反別貳町八反三畝貳拾七步。

但峽田領に御座候。

御檢地の儀は金杉上町にて申上候通に御座候。

飛地 表間口八間、奥行貳拾壹間三尺。

右は金杉上町裏續東の方有之候。

飛地 表間口拾九間三尺、奥行拾貳間三尺六寸。

右は金杉上町裏續西の方有之候。

以上丙戌書上

龍泉寺町

右町名の起相分不申并草分人と申者無御座候。右町の儀は元龍泉寺村の内に有之、年月不知東叡山御領に相成、寺社

(前寺普大)

御奉行所御支配町並屋敷に有之候處、延享二丑年十二月町御奉行御支配に相成申候。御年貢の儀は東叡山御目代田村權右衛門役所え代永にて上納仕候。

町内 東西え南側百六拾貳間貳尺三寸、北側八拾六間三尺七寸、南北え廣き場所にて七拾五間五尺四寸、其余不同に御座候。

四隣 東龍泉寺村、西同村并戸田采女正様御下屋敷、金杉村、南龍泉寺村、北金杉村并倉橋三左衛門様御屋敷。

町内 小名字等無御座候。尤當所大音寺邊を里俗大音寺前杯相唱申候。

(斜御山叡東)

御入國後御料所に在之、正保年中御代官野村彦太夫様御支配所にて、年代不知東叡山御領に相成申候。

町内反別壹町六反拾八步。

御檢地の儀は寛延三年九月、神尾若狹守様、曲淵豊後守様御改に御座候。

御高札場。

右は町内西外れに有之、在町兼用仕候。

御褒美金十五兩

右甚藏儀は吉原町發起人庄司甚右衛門が子孫に御座候。然る處先代故有て彼町を外出に住宅仕、其後次第に及衰微候。甚藏儀岩井甚藏と名乗、甲冑を致製作渡世に仕候。乍去吉

(るは俣忠)

三之輪町

右町名は起立年代相分不申候。往古は寺社御奉行御支配に

原町にて家名如元相立候儀を日夜心願仕罷在候處、不斗病氣付漸々立居も不自由にて、大病に罷成候得ば宿願の義も難果残念存候。寛政七卯年訴狀相認、召仕女はるを以町御奉行所に御訴申上、其節の御奉行坂部能登守様右訴狀被遊御留候。甚藏儀は病氣彌差重り候て相果申候。甚藏身寄の者迎は絶て無御座候に付、はる義其志を繼候て御奉行所え度々御歎申候。其後村上肥後守様御奉行の節にも度々御願申上候得共、免再御裁許無御座候に付、御老中松平伊豆守様に御駕籠訴訟仕候。同九巳年十月朔日甚藏身寄の者御呼出に付はる義罷出候處、御奉行様御理解段々御申聞被遊、ケ様の義は町内は勿論吉原町え得と及相談、熟談いたし候は、打合せ願出等差出し可申事に候、此訴狀差戻すと被仰御下げ被遊候。はる儀は御返答不申上、頓に顔色を變し、以ての外なる容體を御覽被遊、御奉行様先聞と御聲被爲還、其方召仕の身分として奇特の事なり、褒美を取らずと被仰、金十五兩被下置候。町役共御請爲致難有頂戴爲仕候。同十二年二月廿三日上野宮様右始末達御聽、奇特に被思召錢三貫文被下置候。乍去今以御裁許相濟候義を納得不仕、是非家名相立度と申聞候間、町役共甚謹溢仕候。

以上丙戌書上



有之候由、町方御支配に相成候は延享二丑年十二月に御座候。

一 町内 南北三町拾四間四尺五寸、東西壹町余。

一 隣町 東の方日本堤土手、西の方三河島村、南の方金杉下町、北の方通新町。

一 町内小名 西の方横町を芋洗と唱申候。梅林寺横町を梅ヶ小路と申候。

一 自身番屋 右自身番屋の儀は往古々有之、起立相分不申候。

一 買添地 間口九間貳尺四寸、奥行拾九間壹尺貳寸、永 久 寺

一 右は町内東側に有之、年代相知不申候。

一 當町反別七反貳畝拾貳歩。

一 但峽田領と相唱申候。

一 御檢地の儀は寛延三年九月、神尾若狹守様、曲淵豊後守様御改に御座候。

一 飛地 凡四百八拾坪。

一 右飛地の儀は千住小塚原町并に三ヶ所に相分れ有之候。

一 御褒美青銅拾貫文 利八店利十郎召仕 三 之 助

一 右者寛政十三酉年二月十三日、下谷三之輪町家主長八店に罷在候。利十郎儀剃髮任蓮垂と改、同人召仕三之助共貳人暮に御座候。尤其已前蓮垂儀は新吉原角町家持にて、大海老屋利十郎と申遊女屋に有之、其砌召仕にて三之助義は

(助之三徳忠)

(寺久永) (路小ヶ梅)(洗芋)

幼年の砌高恩請候者の由にて御座候。然る處利十郎義追々不如意に相成、極困窮の身の上に相成、其上及老年今日の暮にも差詰り候程に相成候處、召仕三之助付添罷在、日雇杯に罷出種々丹誠仕、實子も難及忠孝の者にて、町御奉行根岸肥前守様へ被召出、於御白洲爲御褒美青銅拾貫文頂戴仕候。其後文化元酉年十二月九日蓮垂儀は病死仕、新町公春院へ葬申候。右に付三之助義主人蓮垂爲菩提剃髮仕、助給と改修行杯致し、今日暮罷在候處。文化八未年十一月朔日死去仕、則同寺相葬申候。當時子孫無御座候。以上丙戌書上

藥王寺門前

一 右門前町並家作に相成候は享保二酉年八月に御座候。左右門前は町方御支配に御座候。

一 町内 南北廿四間、東西四間余。

一 隣町 東西金杉下町、南北三之輪町。以上丙戌書上

通新町

一 右寛文元年御割付に小塚原新町と有之、其後元祿八亥年御割付に下谷通新町と御座候。右の年々町銘相改り候哉、申傳無御座候。

町新原塚小元)

(寺養眞)

一 町内 東西四拾五間程、南北凡六町余。

一 町内 東側北角表間口廿八間、地尻幅廿八間五尺、裏行拾七間四尺五寸。眞養寺持地

一 右萬治二亥年運千山自性寺起立、寛永二丑年下谷三枚橋廣布山眞養寺起立、然處元祿二巳年兩寺壹寺に仕、從夫已來運千山眞養寺と申來、年月不知、寺社御奉行脇坂淡路守様之御願申上、御年貢御傳馬而已相勤申候。尤御年貢御傳馬共通新町にて取立上納仕候。

一 町内小名 當町南角が三拾三間程北之寄、町並地尻に貳反壹畝廿七歩、東裏屋敷と唱申候。同南角が七拾壹間程北之寄、八反五畝壹歩、西裏屋敷と唱申候。同西側石川主殿頭様

一 大門道壹ヶ所、觀音堂横町と唱候壹ヶ所、庚申横町と唱候壹ヶ所、彦右衛門横町と唱候壹ヶ所、右彦右衛門横町の御鷹野三川島筋え御成の節御通拔御道に相成申候。東側燒場道と唱候横町壹ヶ所、西光寺横町と唱候壹ヶ所、天神山と唱候横町壹ヶ所、右天神山横町は三川島筋え 御成の節、御通拔御道に相成申候。

一 隣町 南三之輪町、北小塚原町、東中村小塚原、西宗對馬守様御下屋鋪、石川主殿頭様御下屋敷。御鑓砲御置筒同心 村田巳之助

一 拜領町屋鋪百廿坪 右は享保十五戌八月御先手同心柳下五郎兵衛拜領、其後明和二酉年巳之助先祖彌太郎義相對替拜領仕候。尤最初拜領

(名人主地領拜) (山神天) (町横申庚) (舖屋裏西・東)

(盡無日)

一 年代相分り不申候。御先手同心 新島 鏡藏

一 同百二十坪

一 右寶永三戌年十月鏡藏先祖庄兵衛拜領仕候。尤最初拜領年代相分り不申候。請負人宇右衛門

一 上納地百五拾四坪

一 右上納受買地に相成候義は寛政四子年九月、元地主喜右衛門儀日無盡一件に付遠島被仰付、右地所上納受買地に相成申候。御掛り小田切土佐守様。

一 板橋 長六間、幅貳間八寸。

一 右王子用水に相掛り御普請方町方兩御掛りに御座候。里俗通新町橋と唱申候。

一 町御奉行御代官平岩右膳兩御支配御座候。

一 反別六町壹反貳畝拾八歩、峽田領荒木田庄と唱申候。

一 御檢地の儀眞享二丑年十一月、御代官國領半兵衛。

一 御高札場

一 右は町内南橋際に有之、年月等相分り不申候。以上丙戌書上

眞正寺門前

一 右は元地湯島に有之、御用地に付被召上淺草に替地被下、有故淺草寺地加藤出羽守殿之相渡候後、寛文元丑年、淺草が當地之替地仕候節、門前町屋共相求候由申傳候。尤往古



門前町屋惣家作御免被仰付候年代は、記録虫喰候故一向相分り不申候。其後寛延二巳年三月類焼仕門前町屋焼失仕、貧寺故間口拾間の處家作仕、殘門前地は當分疊地に致し罷在候。並草分人無御座候。往古村方にて有之候節の申傳無御座候。

- 一 町内 東西え廿間三尺、南北え廿四間貳尺。
  - 一 四隣 南北東通新町、西眞正寺境内。
  - 一 町御奉行御代官平若右膳兩御支配に御座候。
  - 一 町内反別壹反六畝拾九歩、畷田領荒木田庄と唱申候。
  - 一 御檢地の義は貞享二丑年十一月、御代官國領半兵衛。
- 以上丙戌書上

御府内備考卷之二十四

下谷之四

上野仁王門前町

(名人領拜並敷屋領拜)(端之池)(腰袴)

- 一 町名の起、草分人の名相分兼候得共、元祿十一寅年中東叡山中堂御建立之節、上野廣小路三ッ橋内東側町家出來上野仁王門前町と唱候處、同年九月六日類焼仕、不殘御用地に被召上松原に相成候由。然る處寶永七寅年中南側共追々拜領町屋敷に被仰付、如元町名相唱來り候由。尤東叡山御領の内には候得とも公役御年貢并諸役共相勤不申候。
- 一 町内 東西え四拾貳間壹尺五寸、南北え四拾四間貳尺。
- 一 但兩側の内間數不同に有之候。
- 一 隣町 東の方下谷町通、西の方不忍池、南の方上野廣小路、北の東叡山。
- 一 町内 里俗上野黒門外左右土手取付の所を袴腰と唱、且往還廣小路と申、尤西側を池之端と唱申候。
- 一 東叡山御目代田村權右衛門支配所にて元寺社御奉行御支配の所、延享二丑年中町御奉行御支配に相成申候。
- 一 拜領町屋敷貳百坪余 古筆 了意
- 一 表京間拾五間貳尺五寸、裏行北拾五間五尺五寸、

御府内備考卷之二十三終

右町内西側南角に有之、寶永七寅年十二月六日了意先祖拜領仕候。

- 一 但右拜領地坪數之外、南の方六拾坪御預り地有之候。
  - 一 拜領町屋敷貳百六拾八坪 上野御宮官任 淺草清水稻荷別當兼帶 田中松春
  - 一 表京間廿五間三尺、裏行北五間三尺、
  - 一 右町内西側北角六軒目に有之。
  - 一 拜領町屋敷貳拾壹坪 上野御山番人
- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 半 | 右 | 衛 | 門 |
| 同 | 半 | 兵 | 衛 | 門 |
| 同 | 吉 | 右 | 衛 | 門 |
| 同 | 平 | 兵 | 衛 | 門 |
| 同 | 平 | 三 | 郎 | 門 |
| 同 | 兵 | 左 | 衛 | 門 |
| 同 | 長 | 次 | 郎 | 門 |
| 同 | 新 | 兵 | 衛 | 門 |
| 同 | 平 | 兵 | 衛 | 門 |
| 同 | 字 | 兵 | 衛 | 門 |

(役り廻内山御野上)

- 一 裏京間三間半、裏行六間
- 一 右町内西側北角に有之、寶永七寅年十二月廿五日右拾人のもの先祖拜領仕候。尤當時上野御山内廻り役と唱申候。
- 一 拜領町屋敷百九拾九坪 古筆 了之助
- 一 表京間七間三尺壹寸、裏行貳拾六間三尺

右町内東側南角に有之、寶永七寅年十二月朔日了之助先祖拜領仕候。

- 一 拜領町屋敷六拾六坪 上野御本坊御大工 西川丹後 御用邊町人 甚右衛門
- 一 表京間拾貳間、裏行五間四尺
- 一 右町内東側南角六軒目に有之、寶永七寅年十二月七日右六人のもの先祖拜領仕候。尤起立の儀は元祿十一寅年東叡山中堂御建立の節、廣小路東側通り町家に被仰付候に付、右先祖の者奉願、御普請奉行萩原近江守様・布施藤兵衛様・曲淵伊左衛門様・近藤平十郎様御懸りにて同年六月七日六人のもの間口拾貳間、裏行五間五尺七寸の地所拜領仕、勿論中堂御供養御成御道筋に付、同九月五日迄普請出來候様に仰付候處、翌六日類焼仕候上御用地に被召上、其後猶又奉願、寺社御奉行本多彈正少弼様御掛にて寶永年中、前書の通町屋敷拜領仕候。
- 一 拜領町屋敷百三拾五坪 御本丸御瀬戸物御用邊 久下田屋忠藏
- 一 表京間五間貳尺余、裏行廿四間三尺
- 一 右町内東側南角六軒目に有之、寶永七寅年四月三日御本



丸御瀨戸物御用達右忠藏先祖拜領仕候。  
 上野黒門町 名主 岡部 助左衛門  
 一 同 貳拾壹坪 表京間三間、裏行七間  
 右町内下谷町通り西側南を壹軒目、寶永七寅年十二月廿三日右助左衛門先祖拜領仕候。  
 上野大門町 名主 大西 權右衛門  
 一 同 貳拾壹坪 表京間三間、裏行七間  
 右同側南を貳軒目、寶永七寅年十二月廿三日右權右衛門先祖拜領仕候。  
 深秘職 橋本 太郎右衛門  
 一 同 貳拾壹坪 表京間三間、裏行七間  
 右同側南を三軒目に有之、元深秘職折戸小左衛門上り地の處、文化十一戌年十二月十三日右太郎右衛門先代拜領仕候。  
 深秘職 小山 平 吉  
 一 拜領町屋鋪貳拾壹坪  
 表京間三間、裏行七間  
 右同側南を四軒目に有之、元深秘職折戸小左衛門上り地の處、文化十一戌年十二月十三日深秘職小山平吉拜領仕候。  
 自身番屋 間口六尺、奥行貳間半  
 右建初年代相知不申候。  
 安永八亥年千川上水相掛り候得共此程相潰し、當時右の形相見へ不申候。

一 當山派修驗寶藏院 家主 吉兵衛店に罷在候。以上丙戌書上  
 仁王門前  
 上野御家來屋敷  
 町内の儀は寶永七寅年初て町屋に相成候由、夫迄兩側とも松並木にて有之由に御座候。  
 一 町内東側間口京間拾壹間余、奥行東西南北の方にて京間十七間余、西側間口京間貳拾六間余、奥行東西南北の方にて京間十五間余、隣町 東西南北共仁王門前町と並居申候。  
 一 里俗西側池之端東側廣小路と唱申候。  
 東側 東叡山中座役 杉本 音門  
 一 同 東側拜領町屋鋪六拾坪 同 須藤 順泉  
 一 同 六拾坪  
 右は寶永八卯年二月、寺社御奉行本多彈正少彌様御掛りにて拜領仕候。  
 常盤院様御靈屋 齋藤 勘四郎  
 一 同 八拾五坪  
 右は寶永七寅年十二月、寺社御奉行御同人様御掛りにて拜領仕候。  
 大猷院様御靈屋 御掃除頭 原田 十右衛門  
 一 同 八拾五坪 御掃除頭 御宮 大山 茂十郎  
 一 同 八拾五坪 御宮官仕 星野 松慶

(領田峽)  
 一 同 六拾坪 東叡山中座役 永井 清林  
 右は寶永七寅年十二月、寺社御奉行御同人様御掛りにて拜領仕候。  
 御本坊御吟味役所掛り 中堂 役人屋敷  
 一 同 七拾六坪  
 右は上野御本坊御地所に、寶永年中の起立に可有之候得共、書留等無之駈と相分り兼申候。尤上り高等御本坊え相納申候。  
 一 檢地の儀は寶永七寅年十二月、地割御役人三枝左兵衛殿御割渡に御座候。 以上丙戌書上  
 黒門前  
 上野役人屋敷  
 一 往古武州豊島郡峽田領下谷村の内、松並木にて御座候處、寶永七寅年十二月二日、東叡山御宮官仕田中松春・堀江忠藏上野御殿御納戸地所共拜領仕候御が、黒門前上野役人屋敷と相唱申候。  
 一 町内 東西貳拾壹間余、南北拾貳間半余、但片側町に御座候。  
 一 隣町 東の方下谷町壹丁目、西の方仁王門前御家來屋敷、南北共上野仁王門前町。  
 一 里俗竹町と唱申候。 上野御宮官仕 田中 松春  
 一 拜領町屋敷八拾五坪

(村野上)  
 一 同 八拾五坪 同寶齋院様御靈屋御掃除頭 堀江 忠藏  
 一 同 七拾四坪 御殿御納戸地  
 右三ヶ所共寶永七寅年十二月二日、公儀を拜領仕是迄引續罷在候。 以上丙戌書上  
 上野町壹丁目・貳丁目  
 町名起立の儀年古き儀にて書留等致焼失相分兼候得共、東叡山御開闢已前は葭萱生茂り候小高き岡山にて、一圓上野村と申候由及承申候。當所の儀は元上野の内西の方今忍ヶ岡と申候邊に有之候由、其節の村小名等も不相分、凡寛永の頃當時の場所え引地に相成候て、右の通上野を引候故上野町と唱候由申傳候儀に御座候。  
 但上野町は已前今の上野に有之二羽村と申、東叡山開闢に付寛永年中當所え代地被下其節を町に相成上野町と唱へ、上野と申は舊名の旨安永之記録に有之候。  
 一 當町の儀は萬事兩町一體に相勤申候。  
 一 年曆相分り不申、上野町壹丁目の地尻切地に相成、此分上野廣小路の内飛地壹ヶ所、神田松永町續に代地壹ヶ所、右飛地の分里俗五軒屋鋪と相唱申候。  
 但元祿年中代地被仰付候と申義覺罷在候得共、書留焼失の旨安永の記録に相見申候。此切地・飛地も其頃の儀にも



(店着)

可有御座哉に奉存候。  
里俗 同町壹丁目の内西側家並に元肴屋有之、此所肴店と相唱、同町貳丁目東側横丁を摩利支天横丁と相唱、同北へ寄東横丁を三枚橋横丁と相唱、同西側廣小路え出口を六阿彌陀横丁と相唱申候。

町内壹丁目東側間口五拾七間余、裏幅六拾間余  
奥行南の方貳拾間余、但巽の方に下谷同朋町入込有之、西側間口六拾間余、裏幅五拾六間余、奥行南の方六間余、貳丁目東側間口八拾八間余、裏幅大抵同斷、但道幅共奥行南の方貳拾九間、北の方

西側間口五拾間半、裏幅五拾三間余、奥行南の方拾七間、北の方貳拾間  
隣町 東の方御徒組屋敷、西の方上野元黒門町、下野常樂院門前、下谷同朋町、下谷常樂院門前、上野町、此四ヶ町掛りに相成申候。此橋幅壹丈壹尺、長壹丈

(川忍)

忍川 川幅壹丈五寸  
不忍の流町内北の方町家後ろ通りを下谷御徒町え流出申候。此下流を忍川と申候由に御座候。

石橋 貳ヶ所  
壹ヶ所は當町貳丁目北町はづれ下谷町壹丁目に渡候橋にて、往古は御普請方御掛りに御座候處、其後隣町方持に被仰付、下谷町壹丁目・上野仁王門前町・下谷常樂院門前・上野町、此四ヶ町掛りに相成申候。此橋幅壹丈壹尺、長壹丈

(橋寬)

貳尺有之、名目の傳も無之哉の處、いとなく寬橋と唱候由、壹ヶ所は同町東横町はづれ御徒町に渡り候橋にて、先規か

御公儀様御持に有之、幅壹丈五寸、長壹丈貳尺に御座候。但此御公儀様御持の橋并其末中御徒町通りえ掛り候板橋、其下流和泉橋通に掛り候石橋、此三ヶ所を都て下谷三枚橋と相唱申候。

(跡寺養眞)

眞養寺跡  
右は町内貳丁目に百八拾坪の地面壹ヶ所、元日蓮宗眞養寺跡有之候。元祿年中右寺院下谷通新町に引候跡、當時町屋敷に相成候旨申傳に御座候。

町内の儀は先年か町御奉行御代官兩御支配にて、御年貢は御代官所え致上納、諸事町御奉行所御支配を請、當時御代官平岩右膳様え相納申候。

反別貳丁五反貳拾九步、領名の儀は峽田領と相唱申候。  
町内一乘院坪數百拾四坪、同斷德大寺坪數百七拾三坪壹合、坂本養玉院坪數百四拾三坪壹合七夕、屏風坂下高岩寺坪數貳百五拾三坪、銘々御年貢上野町高え籠上納仕候。

但町反別之内貳反四畝拾六步、寺屋敷か御割付に配有之候。  
同町飛地湯島天神下同朋町續地所反別貳町五反貳拾九步に籠り有之、坪數の儀は百貳坪壹合六夕に御座候。

(八源主名)

名主 源 八

(荷稻羽二)

右源八儀由緒系圖は無御座候得共先祖二羽藤兵衛と申、村名馳と不相知忍岡邊に著く住居仕、寛永年中東叡山御建立に付唯今の地え上野町引地に被仰付、替地勝手次第に取候様被仰渡御座候得共、其比の人氣故多分頂戴仕候ても垣等の費を存、當町貳丁目之内西側にて漸貳拾間余四方程の地繩張いたし、有來候稻荷并竹木等其儘差置引移候由、元地の方は年古手廣に構居候哉にて、右引移り候御殘候大榎有之、追年上野御修造の御其方え可引取候哉、此方にて爲伐可申哉の趣、恐多御座候得共南光坊僧正様か先祖え御染筆被下置持傳、難有御筆故箱に納土藏梁え結付置候處、明曆の大火に燒失仕候由、且又只今忍岡稻荷と唱候祠は元地鎮守にて二羽稻荷と申、二羽の矢を備願望杯致候故、中古迄其近邊にて二羽の矢を商ひ候處、近頃いつとなく三羽の矢を納候様誤來候由に御座候。

但苗字の儀は五代の間は二羽と申候處、六代目より佐久間に相改、只今迄十代役儀相續仕候。且又當町西側住居地は草創の地にて估券も無御座持傳候處、賣拂又は縁者等え讓遣し、當時當町壹丁目の内東側間口七間余、奥行三拾間程の地面に住居候。尤度々の類焼にて書留等燒失仕、申傳而已の儀に御座候。

以上丙戌書上

(舖屋領拜主坊御)

同朋町

一 町名起立の儀は慶長・元和・天和・元祿・寛保頃追々の拜領にて、多分御坊主方拜領地に付下谷同朋町と唱候儀にも可有御座候哉に奉存候。

一 町内拜領屋敷の儀、銘々拜領已前の儀は詳に相分り不申候。當時拜領主左の通。

一 拜領町屋舖百四拾坪余 表坊主 小谷 宗 意

一 右慶長中拜領仕候。 塚 越 藤 助

一 拜領町屋舖百拾貳坪余 表坊主 幸 佐

一 右元和五未年中拜領仕候。 西丸表坊主 山 長 順

一 同 百五拾八坪余 表坊主 中 尾 祐 賀

一 同 百五拾六坪余 表坊主 小 原 清 林

一 同 百貳拾九坪余 同 右天和三亥年中拜領仕候。 同 井ノ辻了意

一 同 百貳拾五坪余 同 御勘定 齋 田 龜 之 助

一 同 百拾三坪余 同 右元祿年中拜領仕候。 御用部屋坊主 江 口 休 意

一 同 百拾壹坪余 同 右享保十七子年中拜領仕候。 表坊主 長 谷 川 友 琢

一 同 百貳拾九坪余 同 表坊主 長 谷 川 友 琢



(店寺行正)

右寛保元丙年中拜領仕候。  
 同 百三拾貳坪余 廣瀬 松益  
 右年月不知加藤久甫上り地に御座候處、松益拜領地に御引替奉願、天明元丑年中願の通拜領被仰付候。  
 一 拜領町屋舖百六拾貳坪余 大沼 榮壽  
 右天和三亥年中鹿兒島立意拜領仕候處、享和二戌年中榮壽相對替仕候。  
 同 百貳拾八坪余 表坊主 加藤 貞順  
 右天和三亥年中木原良益拜領仕候處、年月不知右貞順相對替仕候。  
 一 町内西の方を裡俗正行寺店と相唱申候。右は慶長十巳年頃迄正行寺と申浄土宗壹ヶ寺有之、只今町内西の方には其節の表門通に候處、天和二戌年中類焼仕、其後御用地に被召上、駒込三ツ家町にて替地被下、右寺引候跡地の儀は前書の通拜領町屋敷に相成候得共、其頃の名目相殘正行寺店と唱申候。  
 一 町内東西南の方にて四拾七間余、南北東の方にて貳拾三間余、但西の方往來隔北大門町續百拾貳坪七合五夕、北の方往來隔上野町壹丁目東側地尻百四拾坪六夕、右貳ヶ所出張有之。  
 隣町 東の方高山平左衛門御屋、西の方上野北大門町、南の方上野御家屋敷、北の方上野町壹丁目、太田、以上丙戌書上

(歴來町當)

上野南大門町  
 一 町名の起り、草分人の名相分り不申、往古村方に有之候處、寛永二丑年中東叡山御門前地に相成。尤右御門大門の通故大門町と唱候哉、御年貫無之、上野御本坊御用人足同御山内掃除人足御役に差出申候。然る處元禄十丑年上野中堂御建立に付、上野廣小路東側の分不殘御用地に被召上、替地元坪にて下谷長者町表通御徒御組屋敷並神田八軒町續柳原大門町右貳ヶ所にて被下置、尤右廣小路は南へ引地に相成候故元町を北大門町、當町を南大門町と相唱、八軒町續を柳原大門町と相唱候儀は何故柳原と相唱候哉相分り不申候。  
 一 町内東西南の方にて拾五間半、南北へ百三間余、但片側町に御座候。  
 一 隣町 東の方下谷長者町、西の方小笠原大膳太夫様、南の方町、北の方下谷車坂町代地。  
 一 往古御代官伊奈半左衛門様御支配所にて、寛永九申年東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行御支配の處、延享二丑年中町方御支配に相成申候。  
 以上丙戌書上

長者町一丁目

一 町名起立の儀田町貳丁目にて委敷申上候通、此邊都て元長

(舖屋領拜) (來由名町)

者住居仕候宅地に付、長者町と唱候由に御座候。  
 一 町内町屋舖拜領名前左の通  
 一 拜領町屋舖九拾九坪余 奥坊主 雲 跡  
 一 同 百四拾七坪余 西九郎 又 玄  
 一 同 百五拾坪余 表坊主 順 益  
 一 同 百拾九坪余 御溜り御用達 山 清 助  
 一 同 百七拾九坪余 御能役者 金 春 惣右衛門  
 一 同 百七拾九坪余 同 鷺 仁右衛門  
 一 同 百七拾九坪余 同 高 安 興 八 郎  
 一 同 百七拾八坪余 同 金 春 五 郎 助  
 一 同 百六坪余 淺草御藏 書替手代大繩地  
 一 同 七拾坪余 御指物師 椎 名 忠 右 衛 門  
 一 同 七拾坪余 御細工師 德 岡 東 四 郎  
 一 同 百坪 小普請支配 佐野前守組 味 岡 正 吉  
 一 同 百七拾九坪余 表陸尺 岡 庄 吉  
 一 同 百坪 右正徳年中拜領仕候。  
 一 同 百坪 右享保年中拜領仕候。  
 一 同 百坪 右は拜領地の中に入交り有之候。  
 一 沽券地百廿三坪余 同町家持 新兵衛所持

御府内備考卷之二十四 下谷之四 長者町二丁目

(者長谷下) (岡谷下)

一 町内東西南の方にて三拾貳間余、南北東の方にて九拾八間余、但坤の方出張有之。  
 一 隣町 東の方御徒組屋敷、西の方小笠原大膳太夫様中屋敷、南の方神田松下町代地、北の方下谷長者町貳丁目。  
 以上丙戌書上

長者町貳丁目  
 一 町名起立の儀往古只今の上野の地等高き方を忍ヶ岡と申、低き所を下谷岡と申候由、其頃此處に長者と申者住居致し、是を下谷長者と申習し姓名等不相知。當時淺草新寺町通に有之浄土宗永昌寺は、天正年中下谷長者開基に候由、且又町内東向御徒方組屋敷内に長者ヶ池と唱候小き池殘有之候よし及承申候。是は昔下谷長者の庭中に有之候池の由申傳候。右等を以相考候得ば當町は不及申、近邊武家方御屋舖等も其頃は悉長者構の内にて、其後追々土地相變只今の形ちに相成候様に奉存候。右長者宅地の内町屋に相成候處故長者町と名付候儀に可有御座哉に奉存候。  
 一 町内町屋敷拜領名前左の通  
 一 拜領町屋舖百坪 表坊主 坂 清 壽  
 一 同 百貳拾坪 御系花師 長 二 達 木 九 左 衛 門  
 一 同 六拾九坪余 御製師 齋 藤 瀧 三 郎  
 一 同 六拾九坪余 御弓師 近 藤 善 次 郎



同	六拾九坪余	御穀師 粕谷淡路
同	六拾九坪余	同 岸本大隅
同	六拾九坪余	御刀鍛冶 山村勘左衛門
同	百貳拾八坪余	御箱師 柏倉岩甫
同	百貳拾八坪余	同 井藤十郎
同	百三拾坪余	同 野々山孫輔
同	百坪余	小普請支配 佐野前守組
同	九拾九坪余	松田彌右衛門
同	百貳拾四坪余	小普請支配 長井國右衛門組
同	右元祿年中拜領仕候	黒澤録三郎
同	右享保年中拜領仕候	御養生所肝煎 小川大左衛門
同	百貳拾壹坪余	御天守番の頭 山本文左衛門下番 佐藤藤左衛門
同	右元文中生田唯右衛門拜領仕候處、文化年中當藤左衛門相對替仕候	
同	百五拾坪余	本阿彌 小次郎
同	右は元祿年中竹屋喜四郎拜領仕候處、小次郎先祖四郎三郎と明和年中相對替仕候	御番師 島田七郎兵衛
同	九拾八坪余	同 人拜借地
同	三拾坪余	同 人拜借地
同	右は元祿年中松井新左衛門拜領仕候處天明年中上ヶ地	

(昌永者長日朝)

に相成、右地面貳ツに割、九拾八坪余の地所七郎兵衛拜領仕、三拾坪余同人拜借地に相成申候。  
 同所家持 不持  
 沽券地百五拾三坪余  
 右拜領地の中に入交り有之候。  
 一 町内 南北百間余、東西北の方にて拾六間余、隣町 東の方御徒組屋敷、西の方上野御家來屋敷、南の方長者町壹丁目、北の方下谷同朋町。  
 以上丙戌書上  
 一 長者町は朝日長者永昌と云富貴の長者なり。尤此邊壹圓屋敷のよし、今に下谷町一丁目朝日山永昌寺といふ淨土宗にて此寺の内には下谷長者の古碑あり。天正二年朝日長者永昌と彫付あり。(江戸砂子 餘慶)  
 長者町殿  
 上野御家來屋舖  
 一 町名起立の儀は先年類焼の御書留等焼失仕候故相分り兼申候。尤上野御納戸方役地に付、上野御家來屋敷と唱來候儀にも有之哉に奉存候。  
 一 町内南の方車坂町續壹ヶ所、南北間口三拾七間余、東西十九間、西の方新黒門町續壹ヶ所、南北間口貳拾七間、東西裏行四間余。  
 一 隣町 東の方下谷同朋町、西の方上野新黒門町、井上南の方下谷車坂町、北の方下谷同朋町、上野北大門町、以上丙戌書上

上野新黒門町

右町名の起、草分人の名相分不申、往古村方に有之候處、寛永三寅年中東叡山御門前地に相成、元黒門町に引續町屋に相成候に付新黒門町と唱候哉、御年貢無之、上野御本坊御用人足同御山内掃除人足御役に差出申候。  
 町内 東西え六拾參間四尺余、南北え貳拾七間、但兩側の内間敷不同有之候。  
 四隣 東の方長者町續、西の方石川主殿頭様御屋舖、南の方下谷御成道、北の方上野廣小路。  
 上納地貳拾三坪余  
 右は佐渡屋幸七と申者所持にて住居仕候處、取退無盡の一件にて寛政元酉年七月中遠島被仰付、地面御取上の上北御番所御掛り、當時上納地に相成申候。  
 自身番屋 間口九尺、奥行貳間。  
 右は建始年數相知不申候。  
 往古御代官伊奈半左衛門様御支配所にて、寛永九年東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行御支配の處延享二丑年町御奉行御支配に相成申候。  
 七郎右衛門  
 右七郎右衛門方元和入參と唱候義は、長谷川安清と申者の先祖長谷川和泉と申者、高麗御征伐の節武功を以て月池翁入參傳記并朝鮮入參の種を取候善壹人に傳來り候に付、本

上野北大門町

朝入參出生を安清が御役所書留無之御訴訟申上、元祿三年七月廿日御免許有之候處、同十一寅年十二月十日安清居宅致類燒難儀の節、貳代目七郎右衛門義厚致養育候爲謝禮、入參造作製法諸事算用十に割四分の徳用可相渡旨、元祿十二卯年十月十五日堀越七郎右衛門殿長谷川安清と認候證文壹通、并人參沽場江戸・京・大坂國々貴殿壹人に申渡候間土性楔入參のため宜敷可致旨前書同様の月日證文壹通、外に於京都駒井半兵衛・同五兵衛と申もの賣弘徳用割合相下し可申旨、元祿十五年閏八月二日右安清・七郎右衛門兩人宛名の證文壹通有之、御當地にては七郎右衛門方壹軒に限り、和人參賣場と申相弘候前、追々紛數人參致製法候もの有之、自然渡世も薄く相成、享保の頃相止候趣申傳候。尤證文類三通は只今以持傳申候、長谷川安清居所并右銘式の義相知不申候。  
 以上丙戌書上

右町名の起、草分人の名相分不申、往古下谷村に有之候處、寛永貳丑年中東叡山御門前地に相成、尤右御門前大門の通放大門町と唱候哉、御年貢無之、上野御本坊御用人足同御山内掃除人足御役に差出申候。然る處元祿十丑年上野中堂御建立に付、上野廣小路東側の分不殘御用地に被召上、替地元坪にて長者町裏通井梅田八軒町續表間口三間、裏行



六間の地所右貳ヶ所にて被下置、右廣小路は南え引地に相成候故元町を北大門町引地を南大門町、前書八軒町續を柳原大門町と相唱申候。尤何故柳原と唱候哉相分不申候。同十一寅年五月中猶亦廣小路東側道幅御用濟の上、明地に相成候場所新町屋出來、當時之姿に相成申候。

(路小廣野上)

町内 東側東西南北の方五間壹尺五寸、南北九拾三間三尺、西側東西南北の方貳拾六間四尺、南北東の方九拾五間五寸、東の方上野町通、西の方下谷御數寄屋町、湯島天神下同朋町、南の方上野新黒門町、北の方下谷常樂院門前。町内 小名往還を里俗上野廣小路と相唱申候。自身番屋 間口貳間半、奥行九尺。右は建始年數相知不申候。

拜領町屋舖四百六拾九坪

小普請組大田内藏頭交配 頼本九御醫師 生野 松 壽 敷屋 新 七

助成地三百四拾壹坪余 右上野御構外廻り辻番三ヶ所、請負助成地に年月相知不申中川屋源助と甲者拜領任、右辻番所受負仕居候處、元文四年數屋應之助之讓受、其砌が同人持傳え辻番所請負仕罷在候。委敷義相知不申候。尤いまた外町に起立無之砌故大門町組入候よし是亦申傳候。

(屋長屋敷)

但里俗敷屋長屋と相唱申候。 往古御代官伊奈半左衛門様御支配にて、寛永九年東叡山御目代田村權右衛門支配所に相成、寺社御奉行御支配の處

(門衛左權主名)

延享貳丑年町方御支配に相成申候。

名主 權 左 衛 門

右權左衛門の義先祖、下野國宇津宮のものにて苗字宇津宮と申候處、慈眼大師御家來に相成候節大西と申苗字被下所々御供仕、東叡山御開基の砌忍ヶ岡稻荷の所にて地處被下住居仕罷在候處、御門前町屋御取立有之候節熨斗目着用仕名主役被仰付、大門町支配任、同町東側の内にて表間口六間余、裏行拾六間三尺并表間口貳間余、裏行拾五間壹尺、右貳ヶ所沽券地にて上野表より拜領任、其地面え引移住居仕候處、元祿十五年下野中堂御建立に付上野廣小路東側の分不殘御用地に被召上、替地元坪にて被下置、前書に申上候通り當時南大門町と相唱申候。尙又元祿十一寅年五月中上野廣小路東側え新規町屋出來、表間口三拾壹間、裏行六間貳尺の地處并仁王門前にて表間口三間、裏行七間の地處拜借仕候處、同九月中類焼仕、右三間間口の地所は御用地に被召上、前書外貳ヶ所は賣買地に仕候に付、寶永七寅年十二月中仁王門前松原の内にて表間口三間、裏行七間の地所名主役地に拜領任、只今以持傳九代相續仕候。且上野御殿御規式の節は先格の通熨斗目着用仕罷出申候。尤度々の類焼にて書物焼失仕委敷義相分兼申候。

右町内家主勇助地借兵左衛門義は、先祖慈眼大師御續の御

勇助地借 兵 左 衛 門

(衛兵郎四子孝)

方にて御名相知不申御菓子御自製被遊、其砌御指物御用被仰付、其後年月相知不申延享の頃、上野え初て被爲入候本照院宮様御代が御本坊え御指物御用相勤候旨申傳候。熨斗目着用被仰付候は明和二酉年、日光御神忌の砌御經御奉納有之右御經箱産とも御用會祖父兵左衛門被仰付、首尾能相勤候に付爲御褒美熨斗目御免被仰付初て着用仕候。其後代替りの節も御用向之勤功に依て熨斗目御免有之、當兵左衛門儀は十二ヶ年以前亥年日光御神忌の節、先年の通御經箱産とも御用首尾能相勤候に付熨斗目御免被仰付、上野御殿御規式の節着用仕候。當兵左衛門代迄拾壹代相續仕候。 御褒美銀五枚 家主市兵衛親 四郎 兵 衛

以上丙戌書上

常樂院門前

一 右門前町屋の儀は往古同寺院内坪數八百三拾五坪五合、何の頃か葺除地に被仰付置候處、寛永三寅年か家作の度場所奉願上、御見分被下置願濟にて作事等仕來候に付、尙又元祿十六未年四月中寺社御奉行永井伊賀守様之家作仕度場所

御府内備考卷之二十四 下谷之四 常樂院門前

(町横陀彌阿六) (橋寛)

奉願候處、御見分被下置其節門前町家相建申度場所御案内申上候處、御改有之前書境内坪數の内三方折廻し七拾三間、裏行五間の地所家作勝手手に可致趣被仰付、追々家作出來仕候由、尤度々類焼仕委敷義相分不申候。 町内 東西え貳拾五間壹尺、南北え東の方三拾貳間壹尺、西の方拾五間四尺、隣町東の方上野町通、西の方上野黒門町、南の方上野北の方上野仁王門前町。 町内小名 南寺門前表通里俗上野廣小路と相唱申候。同門前横町を六阿彌陀横町と唱候義は、當寺本尊六阿彌陀の内五番目の佛像安置仕置候故里俗に前出の通相唱申候。 石橋 長壹丈貳尺、幅壹丈壹尺 右石橋の義町内東側北角不忍池流に有之寛橋と唱來、上野町・下谷町壹丁目・上野仁王門前町並當門前四ヶ所組合橋に有之、委敷義下谷町壹丁目申上候。 往古寺社御奉行御支配の處、延享貳丑年中町方御支配相成申候。

太十郎店 錫職 嘉 兵 衛

右太十郎店錫職嘉兵衛義、去る文化子年十月七日 西御丸様淺草筋御成の節、淺草寺境内に於て錫職手業入上覽候品左に。 六寸の瓶子壹對、九寸の鉢壹枚、三寸五分三ッ組盃壹組。 右の内瓶子壹對獻上仕候處、翌八日下谷中御徒士町御鳥見







- 一 同 八拾五坪七合 御材木御石奉行 北角 作右衛門
- 右は拜領年書物等焼失に付相分不申候。
- 一 同 百貳拾三坪 御同朋頭支配 御座敷役 前田 及 清
- 右は享保十八丑年五月中拜領被仰付候。
- 一 同 百拾四坪五合 御數寄屋坊主 平野 宗 作
- 右は享保九辰年閏四月中根津宮永町の内拜領被仰付候處、  
文政五年十一月當町山本宗壽拜領屋敷と相對替仕候。
- 一 同 百貳拾貳坪四合壹夕 小普請支配 太田内藏頭組 草島 善 貞
- 右は最初拜領年月書物等焼失に付相分不申候。
- 一 同 百貳拾貳坪三合六夕 御數寄屋坊主 鈴木 一 齊
- 右は天和三亥年六月中町屋敷拜領被仰付候。
- 一 同 九拾九坪 奥坊主組頭支配 細時計の間 柳澤 宗 祐
- 右は寛永十九年中兩國米澤町の内拜領仕罷在候處、  
文化六巳年中下谷當町拜領主三田村幸安と相對替仕候。
- 一 同 百三拾貳坪貳合 奥坊主 横井 榮 伯
- 右は天和三亥年六月中拜領被仰付候。
- 一 同 百三拾貳坪貳合 小普請支配 土屋謙岐守組 福岡 秀 意
- 右は最初拜領年月書物等焼失仕相分不申候。

- 一 同 百三拾貳坪貳合 奥坊主 黒木 立德
- 右は元祿十二卯年三月中拜領被仰付候。
- 一 同 九拾九坪 奥坊主 松井 小 半
- 右は最初拜領年月書物等焼失に付相分不申候。
- 一 同 九拾九坪 奥坊主 杉山 道 巴
- 右は元祿十五年中拜領被仰付候。
- 一 同 九拾九坪 御數寄屋坊主 伊佐 了 榮
- 右は最初拜領年月書物等焼失に付相分不申候。
- 一 同 九拾九坪 西御九裏坊主 井上 春 佐
- 右は天和三亥年八月中拜領被仰付候。
- 一 同 九拾九坪 御數寄屋坊主 吉川 正 益
- 右は慶長年中本所壹目にて拜領仕候處御用地に相  
成、天和三亥年八月中爲替地下谷當町拜領仕候。
- 一 同 百貳拾貳坪三合 御數寄屋坊主 長野 宗 句
- 右は最初拜領年月書物等焼失仕相分不申候。
- 一 同 九拾九坪 西御九裏坊主 井岡 宗 運
- 右は最初拜領年月書物等焼失仕相分不申候。
- 一 同 九拾九坪 家持 茂 八 郎
- 此估券金貳百兩
- 右は以前持主うた後見藤五郎が拾ヶ年以前文化十四丑年  
三月中、右茂八郎讓請所持仕罷在候。

(舖屋町領拜)

- 一 町内 東西え四拾貳間半、南北え五拾五間貳尺三寸、  
但南側間數不同無之、尤北の方片側町に有之候。
- 一 四隣 東の方上野元黒門町、同所北大門町、西之方加藤瓊  
之助様御屋敷、南の方湯島天神下同朋町、北の方池之端仲  
町。
- 一 自身番屋 間口九尺、奥行三間。
- 右は建始願濟年月相分不申候。
- 以上丙戌書上
- 湯島天神下同朋町
- 一 右町名の起、草分人相知不申候。武家町人拜領屋舖、此分  
最初拜領年月曉と相分兼申候得共荒増左に申上候。
- 一 拜領町屋舖百六拾三坪五合 表坊主 秋 元 宗 覺
- 右は寛永十四丑年中赤坂田町三丁目の内拜領仕候處、  
元祿元辰年中本所壹目と御引替に相成、其後湯島天  
神下同朋町拜領主湯川一雲と文化二丑年中相對替仕  
候。
- 一 同 百貳拾六坪余 西御九裏坊主組頭 寺 町 三 貞
- 右は矢御倉前にて拜領仕罷在候處、天和三亥年八月中  
御用地に被召上、爲替地拜領被仰付候。
- 一 同 百貳拾五坪余 川口 長 格
- 右は御數寄屋町にて拜領仕罷在候處、享保二未年正月  
中湯島天神下同朋町え御引替被下置候。

- 一 同 百六拾五坪八合三夕 御用部屋坊主 高田 久 興
- 右は天明五巳年拜領被仰付候。
- 一 同 五拾三坪貳合五夕 御留主居同心 松井 清 兵 衛
- 右は元祿十二卯年三月中拜領被仰付候。
- 一 同 九拾五坪六合五夕 不二見御寶藏番 松本 茂 三 郎
- 右は内藤理右衛門上り屋敷に有之候處、享保四亥年五  
月中町屋敷拜領被仰付候。
- 一 拜領町屋舖百拾坪 小普請支配 太田内藏頭組 中野 吉 太 郎
- 右は享保十四酉年七月中町屋敷拜領被仰付候。
- 一 同 百坪 表坊主 伊 坂 長 齊
- 右は矢御藏前拜領仕候處御用地に相成、天和三亥年八  
月爲替地拜領仕候。
- 一 同 百六拾貳坪 西御九裏坊主 大 澤 順 嘉
- 右は杉山忠次郎拜領仕罷在候處上り地に相成、元祿八  
亥年十一月中町屋敷拜領被仰付候。
- 一 同 百七拾坪 紅葉山御寶藏附 廣 瀬 清 齊
- 右は伊澤玄節拜領仕候處、延享三寅年九月中下柳原同  
朋町と相對替仕候。
- 一 同 九拾六坪 嚴有院様御寶藏附 俊明院様御寶藏頭 淺 田 吾 市
- 右は最初拜領年月書物等焼失に付相分不申候。











右當町西側南角が三軒目に有之候。尤茅町二丁目地内にて寛永元子年起立、其後寶永七寅年大塚護持院末に相成、墓所等は無御座、表通は町家にて家守附置町並の諸役相勤申候。

一 自身番屋 間口貳間、奥行六間半、

右當町地境に中壹間の大下水有之、右下水兩縁り三尺通り除地有之候處、右下水上へ古來が相建有之候。

但右下水往還は埋下水にて橋等無御座候。

一 下水

右當町が池之端七軒町境に有之候。兩町持合大下水にて幅三尺に横中貳間程の石橋有之候。尤堀割并石橋出來候年代等相分り不申候。

一 下水

右當町南横町町家際に中貳尺五寸余の大下水有之候。右は無縁坂上榑原遠江守様御屋敷が土手際通りを不忍池え落候下水に御座候。尤堀割候年代等相分り不申候。

但右下水往還埋下水にて橋等無御座候。

一 境稻荷社

御褒美銀五枚

右富次郎儀九歳の時父次郎兵衛病死致し、夫が少々宛商ひ致し母を育し、年來孝心を盡し候に付、富次郎三拾六歳の節寛政亥年三月十七日、町御奉行初鹿野河内守様御番所え

(鄭次富子孝)

(衛兵郎次主名)

被召出、孝行の趣相聞候に付、爲御褒美右の通被下置候旨被仰渡頂戴仕候、然る處母義は同年五月中病死仕候に付、其後同町儀右衛門店え引越日雇稼仕、生涯獨身にて罷在候處、八ヶ年已前文政二卯年十二月中病死仕候。

一 右の者先祖次郎兵衛儀町内草分の者にて、寛永九申年上野表が名主役被仰付西田と申苗字御免被成下、且又先々次郎兵衛義は慰斗目御免被仰付候。尤當時迄八代相續仕候。

一 往古の御支配相分り不申、寛永九申年東叡山御門前地に相成、諸事壹丁目同様に御座候。

一 以上丙戌書上

永昌院門前

一 右門前町屋の儀は古書物等無之候間、右願濟年月等一向相知れ不申候。

一 町内東西え五間、南北え七間程にて、片側町に御座候。

一 四鄰 東の方永昌院境内、西の方松平淡路守様御屋敷、南の方心行寺、北の方淨圓寺門前。

以上丙戌書上

淨圓寺門前

一 門前町屋起立の儀寛永八未年の由申傳候得共、書留等無之

候に付御願濟の義等相分り不申候。

一 町内 東西え間口貳拾七間半、奥行南北東の方にて四間、西の方にて五間余、片側町に御座候。

但同寺表門間敷除之。

一 四隣 東の方淨圓寺境内、西の方松平淡路守様御屋敷、南の方永昌院門前、北の方宗賢寺。

以上丙戌書上

覺性寺門前

一 門前町屋起立の儀は寛永八辛未年同寺開基覺性院□誠と申僧、其頃御中間衆が右地面永代相求め致仕居候由、其後寛文十戌年寺社御改の節右跡地に相成候。尤御願濟年月等古書物、元禄十六未年十一月中致焼失候て一向相知れ不申候。

一 町内 東西え間口拾貳間、奥行南北東の方にて三間半、西の方にて四間、片側町に御座候。

但同寺表門間敷除之。

一 隣町 東の方宗賢寺、西の方東淵寺、南の方松平淡路守様御屋敷、北の方覺性寺境内。

以上丙戌書上

東淵寺門前

一 門前町屋起立の儀は元禄十六未年類焼の節書物等焼失仕候

故、御掛り寺社御奉行所并願濟の儀委敷は相分り不申候。尤右門前町屋往古は門が東の方にて間口六間、奥行三間の町屋有之、門が西の方面口三間、奥行三間半の町屋は寺爲要害寺が二ヶ年已前被仰付候由に御座候。其後正徳四卯年十月廿日類焼仕候節、先規の通家作仕度段寺社御奉行石川遠江守様え御願被申上候處、願の通被仰付、其後享保五子年二月門が南の方有來候間口三間、奥行三間半の町屋を北の方え引移し、一棟に仕度旨寺社御奉行酒井修理大夫様え御願被申上候處、御見分の上願之通被仰付候。

一 町内表間口南北え九間、奥行東西え三間半、

但片側町に御座候。

一 四隣 東の方覺性寺、西の方東淵寺境内、南の方松平加賀守様御屋敷、北の方正慶寺門前町屋。

以上丙戌書上

正慶寺門前

一 右門前町屋の儀は門が南の方寛永年中寺社御奉行所え御願申上、作事仕候趣に御座候得共、寶永二丙年二月中類焼の節書物等焼失仕、右願濟年月并御掛り寺社御奉行等相分り不申候。門より北の方町屋は享保五辰年、寺社御奉行大岡越前守様へ御願被申上願の通被仰付家作仕候由。尤此方拾ヶ年季門前に御座候。



- 一 門前町屋 門の南の方東西三間余、南北え拾間程、門の北の方東西三間半、南北え拾壹間半、但門前片側町に御座候。
- 一 四隣 東の方大正寺并七軒町、西の方正慶寺境内、南の方東淵寺門前、北の方妙願寺。
- 一 右五ヶ寺門前共延享三寅年五月中、池之端七軒町名主仁右衛門え支配付に相成申候。
- 一 古來は寺社御奉行御支配の處、延享二丑年より御奉行御支配に相成申候。

以上丙戌書上

池之端七軒町

(來由名町)

- 一 町名起立の儀は古來 大猷院様御代より黒柳助九郎様、枚野金助様御組御中間衆の御拜領地に御座候處、右御拜領地の内を年代不知、武家方寺方并其節の町人七人にて買求候に付、七軒町と名付候由に御座候。夫故右七人の者草分にて名前左の通に御座候。
- 一 表間口六間余、裏行貳拾五間半。 權兵衛
- 一 表間口五間、裏行拾八間。 三郎兵衛
- 一 表間口五間、裏行拾七間。 久兵衛
- 一 表間口廿一間、裏行廿一間。 勘右衛門
- 一 表間口廿一間、裏行拾五間。 市右衛門

(事火震地)

一 表間口貳拾間、裏行廿九間。 興兵衛

一 表間口廿三間半、裏行拾九間半。 惣兵衛

右の通七人にて所持致居候處、其後追々六人は相替り、右の内市右衛門儀其節名主役相勤罷在、當名主仁右衛門迄五代役義相續仕候。尤右の内間口廣く所持致候者は追々五間七間宛分ヶ賣渡候間、當時地主人數拾五人に相成申候。尤其砌町内水帳も有之候處、其後元祿十六未年十一月廿九日類焼仕候節、古き書物等不殘焼失仕候よし、巨細の儀相知れ不申候。右火事を地震火事と申候由に御座候。外に引地代地築立地等の義無御座候。往古の儀村方にて有之候哉相分り不申候。申傳候には往古此邊壹圓に葺まこもの類生居候場所の由、夫故に御座候哉、地中五六尺も掘候得ば毛とうとか申まこもの様成もの出申候。且又西の方水戸様御屋敷境にて余程高く有之、其下通り町地又は武家方寺院方地界の所往古は往還の由、加州様御屋敷御構の内に覆坂と申處有之由、其坂往還の續にて本郷通え出候道の由申傳に御座候。

町内里俗に唱候惣名は無之候得共、七軒町の内東側中程か池之端え曲り候横町の義を秋葉横町と里俗に唱候儀は、右横丁右側に慶安寺と申禪宗寺有之、右境内に秋葉社有之候。右故唱來候義に御座候。

光壽庵寄附地  
總寧寺持

(坂覆)

(町横葉秋)

町屋鋪 間口二拾間、裏行三拾間半、總寧寺持

(來由山須)

但同町東側の内に之候。古來より里俗須山店と唱申候。行者 嚴有院様御代、御城に御奉公被相勤候須山と申女中拜領被致候處、其後松姫君様加州え御入興の節御附に被爲仰付候處、姫君様御逝去の節難髮被致、光壽院と被申御扶持頂戴、右拜領七軒町屋敷に住居被致候處、御同人義下谷通り新町に表間口拾四間、裏行拾五間の町屋敷所持被致候處、湯地に付迷惑被致候に付右七軒町屋敷と振替の儀被相願候處、其砌願の通被爲仰付、七軒町の町屋鋪は須山殿代が抱屋敷に相成申候。須山殿事光壽院と被改置住居被致、其後享保六辛丑年三月廿六日病死被致、上野護國院え相葬被申候由。其後光壽院姪美津と申女中、常憲院様御代御城に御奉公被相勤候處、鶴姫君様紀州え御入興の節御附に被仰付候處、姫君様御逝去の後剃髮被致徳相院と申、是又右七軒町屋敷に拾四五年も住居被致、享保十九甲寅年五月廿六日病死被致候に付、駒込江岸寺え被葬候由。右兩尼遺言も有之候に付、其砌須山殿養女にて御城に御奉公被致候にひき殿儀、横山殿兵衛様え御縁付有之候由、此御女中と右徳相院とは實の姉妹にて有之、徳相院存生の内右地面國府臺總寧寺え讓被置候由、其後右寅年五月中病死被致候に付、同年八月中親類中御立合にて總寧寺住持長極和尚え右家屋敷被讓渡、町内名主五人組えも右の段御届有之、總寧寺奥印の一

御府内備考卷之二十四 下谷之四 池之端七軒町

札被差出、以來總寧寺所持相成候。尤右寄附被致候趣意は右光壽院、徳相院兩尼共生涯御奉公被相勤、子孫も無之候に付、兩尼住居の宅を廣地に仕、御厚意を被蒙候上々様御尊牌も爲冥加建置、又兩尼并親類の位牌等も建置、庵主に僧壹人宛差置永々香花の回向にも預り、兩尼年廻等の節は親類衆右庵え寄合焼香も爲致度趣にて寄附被致候由に御座候。右故表通りは町屋にて裏長屋も有之、中の所に光壽庵と申有之、右の通に御座候。

光壽庵間口五間、奥行五間余、入口玄關間口壹間、奥行一間半、唐破風造に相成居申候。

町内の儀は五ヶ所に分れ有之、左の通に御座候。

一 右町内東西え間口六間余、南北え裏行貳拾五間半余。

一 四隣 東の方下谷茅町二丁目、西の方心行寺、南の方松平淡路守様御上屋敷、北の方不忍池。

一 里俗秋葉横町南の方一ヶ所

一 右町内 南北え間口拾七間半、東西え裏行南の方十八間、同横町北の方二ヶ所

一 四隣 東の方松平淡路守様御抱屋敷、西の方初鹿野此右衛門殿、南の方七軒町、北の方松平淡路守御抱屋敷。

一 右町内 南北え間口貳拾間、裏行拾九間余、東西え裏行南の方三拾間半、北の方貳拾九間半。



一 四隣 東の方松平備後守様御抱屋敷、西の方多門傳八郎様御屋敷、南の方松平淡路守様御抱屋敷、北の方松平備後守様御抱屋敷。

同屋敷西の方側一ヶ所

一 右町内 南北え間口貳拾三間半、裏中貳拾間半、東西え裏行北の方十七間半、北の方十九間半、

一 四隣 東の方松平備後守様御抱屋敷、西の方水戸様御構、南の方忠綱寺、北の方休昌院。

一 池之端通の儀は天和二戌年中類焼致候節、爲非常不忍池縁通り道中四間通り地面切縮往來に仕、尤夜分は木戸切往來不爲致、車等相通不申候。

一 當町と茅町二丁目の堺に横切の下水有之候。右は茅町貳丁目にて申上候通に御座候。

下水

一 右當町中程に有之候中貳尺余の横切下水にて、往還池之端通りえ曲り、松平淡路守様御抱屋敷前池之端大下水え落申候。往還の處は右土橋に相成有之候。

一 當町の儀は元御代官御支配に御座候處、正徳三己年五月中清野與右衛門様御勤役の節、町御奉行所御支配に被仰付候。其節の町御奉行左の通御座候。

坪内能登守様  
松野壹岐守様  
丹羽遠江守様

(門衛右仁主名)

(舖屋抱)

(舖屋守路淡平松)

一 右仁右衛門先祖の儀、市右衛門と申當町草分七人の内にて、御代官所御支配の節細井九左衛門様名主役被仰付相勤罷在、其後正徳三己年五月廿二日清野與右衛門様御代官の節、町御奉行所御支配に被仰付、名主市右衛門儀市左衛門と改名仕、尙又名主役被仰付、當時迄五代相續仕候。

當町抱屋舖左の通に御座候。

貳千坪

一 但寛文十一亥年曲真瀨養安院様御讓り請、元祿十五年屋敷御改加藤吉左衛門様、前橋勘三郎様之家作御届相濟候由に御座候。

九百八拾坪

喜連川左兵衛督

一 但元祿五申年松平伊織様御求被成候由に御座候。

千九百拾四坪

松平淡路守

一 但内四百八拾六坪余は元祿十二卯年、三ノ丸様御比丘尼空知殿御家來山田彌左衛門名前にて御求被成候。同九百八拾九坪は元祿十三辰年、入江八左衛門殿御家來山田彌左衛門・山田權右衛門名前にて御求め被成候。右二ヶ所合一屋敷に相成、享保十五戌年水野和泉守様へ家作御届相濟候由に御座候。其後四百三拾九坪は文化五辰年二月中、御隣屋敷松平備後守様御抱屋敷の内御相對を以御

(舖屋守後備平松)

一 讓り請取被成度段、屋敷御改松井十左衛門様え右御兩家御願立有之、御願相濟御讓渡に相成申候。

四千貳百二坪余

松平備後守

一 但内三千百貳拾坪は寛文六年上野八左衛門様御求、同千八百八拾三坪半は同十一亥年人見玄徳様御求、同四百三拾七坪半は天和三亥年正木甚五兵衛様御求、右三ヶ所合て一と屋敷に相成、元祿九子年阿部豊後守様之家作御届相濟候由に御座候。其後右坪敷の内四百三拾九坪、御相對を以御隣屋敷松平淡路守様御讓渡に相成候に付、當時右坪敷に相成候趣御座候。

右四ヶ所御抱屋敷の義家作有之節、新規修復共古來屋敷御改方繪圖面御口上書御使者持參被罷出候節、右繪圖面え名主加印仕、附添右御役所え罷出候得は、其節右御使者え被仰渡候は、右場所爲見分來る幾日何の誰罷越候間其節立合可被申旨被仰渡、名主え被仰渡候は、右何の誰殿抱屋敷家作の義に付、來る幾日何の誰見分に罷越候間其節可罷出案内の者何方え差出候哉と御尋に御座候に付、何方迄差出置候旨申上相濟、御見分當日右屋敷より役入中被差出名主も罷出、場所御見分相濟御歸りの節、尙又來る幾日誰役所え可罷出旨被仰渡有之、罷出候得は御證文右御使者并名主儀も奥書印形仕相濟申候。尤屋根葺替又は少し御修繕等の義御届斗にて相濟候義も御座候。御届にても名主附添罷

(地領拜衆次露御屋寄敷御)

出申候。

以上丙戌書上

池之端七軒町横町

一 町名起立の儀古來は島田大和守様上り屋敷の由、元祿十二卯年二月中、御本丸御敷寄屋御露次の衆六人大繩にて拜領被致候。名前左の通に御座候。

田村半左衛門  
宮野六兵衛  
鈴木五郎左衛門  
村田安兵衛  
福田喜右衛門  
田谷九右衛門

右は町屋敷家作御免にて七軒町横に御座候間、横町と名付候由申傳に御座候。且又右六人衆寛永五戌年神田御茶之水にて屋敷拜領被致候處御用にて被召上、萬治三子年本所南横堀にて代地拜領被致候處、天和三亥年又々御用地に相成、巢鴨酒井日向守様上り屋敷の内にて代地拜領被致候處、不宜場所に付願替、右七軒町横の場所拜領被致候趣に御座候。

一 右の内田谷九右衛門殿義元文元辰年中上り屋敷に相成候跡、大野惣右衛門殿拜領被致候由に御座候。



- 一 當時拜領地主名前左の通に御座候。  
御敷寄屋御露地の者  
田村茂左衛門  
大野金藏  
村田龜太郎  
西九御裏御門番同心  
宮野善十郎  
奥六尺  
福田熊藏  
鈴木五郎右衛門
- 一 當町の儀元御代官御支配に御座候處、正徳三巳年十一月申  
町御奉行御支配に被仰付、其節町御奉行御名前七軒町を申  
上候通に御座候。
- 一 町内 東西奥行不同有之、南の方拾九間半、北の方拾五間  
半、南北表間口三拾間半余、但片側町に御座候。
- 一 四隣 東の方根津宮永町、西の方水戸様御中屋敷、南の方  
休昌院、北の方妙極院。
- 一 下水  
右當町境往還に有之候。尤横切にて往還の所にては巾貳尺  
五寸程も有之、石橋に相成居申候。地境の所にては一尺五  
寸程も有之候。

以上丙戌書上

御府内備考卷之二十四終

御府内備考 自卷之廿四細目

卷之一	江戶川を掘る	同三・四年の割替
江戶總説	番町を開く	同七年の割替
江戶名稱の由來	江戸下町状況	同八年の割替
江戶郷	靜勝軒の序	同九年の割替
江戶氏	麴町を開く	同十年の割替
太田氏江戸城を築く	常盤橋を架す	同十一年の割替
徳川氏入國當時の江戸城	日本橋を架す	同十二年の割替
江戸の廣袤と町敷	江戸橋を架す	本所・深川を築く
小田原所領役帳に見ゆる江戸の地名	江戸町屋の初	本所御用地と成る
大番町を開く	伊勢屋	江戸屋鋪の敷
豊島の洲崎に町を立つ	江戸の運河	江戸町區の擴張
神田山を崩す	江戸城外の壁門成る	卷之二
品川	明暦大火後の屋鋪割替	御城
田安の原	東西本願寺の屋鋪を定む	江戸城築城に關する諸説
江戸五葺の初め	御三家の屋鋪を定む	品川館と江戸館
江戸の町割	山王屋鋪を定む	千代田
諸侯の屋鋪拜領	加賀の屋鋪を定む	寶田
大名小路を開く	萬治元年屋鋪割替	祝の里
外櫻田霞ヶ關を開く	同二年の割替	初めて千代田城と稱す
	同三年の割替	江戸城の結構
	寛文元年の割替	江戸城よりの眺望
	同二年の割替	靜勝軒と泊船門



江戸城外の市廓の模様	三七
文明六年江戸歌合の事	三七
静勝軒の詩序	三六
静勝軒の題詩	三六
江亭詩	三六
江亭記	三六
静勝軒銘詩並序	三三
望士樓と含雪齋	三三
暮景樓と富士見樓	三三
江戸城北條氏に歸す	三三
小田原記に見ゆる江戸の地名	三三
品河・高繩原・板橋・二本原	三三
太田三樂江戸城に據る	三三
江戸城の修築	三三
江戸城普請に關する古文書	三三
江戸城徳川氏に歸す	三三
御本丸と西の丸	三三
天地庵	三七
山王權現社を建つ	三七
百人番所	三七
大手橋上觀月の宴	三六
遠山在城時代の殘留建物	三六

慶長の大修補	三六
西橋橋邊の石垣の修繕	三六
藤堂高虎の繩張	三六
御本城の經營	三六
慶長十二年の修造	三六
江戸城の天守を築く	三六
慶長十六・七年の修造	三六
紅葉山東照權現御建立	三六
三の丸御普請	三六
北の丸御普請	三六
天守の改造	三六
梅林坂の經營	三六
二の丸に泉水を築く	三六
西の丸の失火	三六
寛永の御本丸の焼亡	三六
西の丸以下造營成る	三六
明暦の本丸と二の丸の焼夫	三六
越ヶ谷の御殿を引く	三六
本丸石垣手傳の諸大名	三六
本丸落成	三六
卷之三	三六
御曲輪内之一	三六

大手御門	四七
小熊渡邊等の事	四七
内櫻田御門	四七
泊船軒と泊船門	四七
桔梗御門と云ふこと	四七
吉祥御門と吉慶御門	四七
平河御門	四七
平河村と平河口	四七
西丸大手御門	四七
二重橋の葱花子銘	四七
坂下御門	四七
竹橋御門	四七
在竹橋	四七
北橋橋御門	四七
北跳橋	四七
矢來御門	四七
吹上矢來園	四七
清水御門	四七
江北山清水寺	四七
田安御門	四七
田安臺と田安大明神	四七
半藏御門	四七

麴町御門のこと	四七
服部半藏のこと	四七
外櫻田御門	四七
小田原御門	四七
日比谷御門	四七
日比谷町	四七
馬場先御門	四七
不明御門	四七
和田倉御門	四七
和田藏	四七
雉子橋御門	四七
一ッ橋御門	四七
伊豆橋	四七
一ッ橋銘	四七
神田橋御門	四七
大炊殿橋	四七
神田明神移渡の事	四七
神田橋の銘	四七
常盤橋御門	四七
大橋と唱ふる事	四七
橋名の由來	四七
吳服橋御門	四七

後藤橋のこと	四七
鍛冶橋御門	四七
數寄屋橋御門	四七
山下御門	四七
姫御門	四七
鍋島御門	四七
幸橋御門	四七
御成御門	四七
御成橋	四七
虎之御門	四七
門名の由來	四七
赤坂御門	四七
赤坂口	四七
喰違御門	四七
小島勘兵衛繩張	四七
喰違土橋	四七
四ッ谷御門	四七
四ッ谷口	四七
市ヶ谷御門	四七
市ヶ谷口	四七
牛込御門	四七
牛込口	四七

番町方と牛込方	四七
小石川御門	四七
小石川口	四七
永樂御門	四七
筋違御門	四七
神田見付	四七
淺草御門	四七
淺草口	四七
淺草橋銘	四七
濱御門	四七
甲府綱重卿下屋鋪	四七
甲府御濱屋鋪	四七
大手御門	四七
中之御門	四七
新錢座御門と鑄錢場	四七
海手御門	四七
傳奏屋鋪	四七
公家衆御馳走屋鋪	四七
評定所	四七
遊女給仕のこと	四七
屋形船の初	四七
御春屋	四七



甲府宰相の舊館……………五三  
御作事方定小屋……………五三  
御破損小屋……………五三  
小普請方定小屋……………五三  
御細工小屋……………五三  
御普請方定小屋……………五三  
御疊小屋……………五三  
町奉行屋鋪二ヶ所……………五三  
南番所……………五三  
北番所……………五三  
江戸町奉行年歴及姓名……………五三  
馬喰町御用屋鋪……………五三  
關東御郡代屋鋪……………五三  
定火消屋鋪十ヶ所……………五三  
定火消役人及所在地……………五三  
鼠穴……………五三  
元祿の増置……………五三  
寶永の減少……………五三  
二の丸泊御番……………五三  
鼠穴御役屋鋪……………五三  
代官町御役屋鋪……………五三  
駿河臺土手通御役屋鋪……………五三

濱町御役屋鋪……………五七  
牛込神樂坂御役屋鋪……………五七  
萬治以後定火消役人名……………五七  
御茶水御役屋鋪……………五七  
駿河臺御役屋鋪……………五七  
小川町御役屋鋪……………五九  
八代洲河岸御役屋鋪……………五九  
麴町御役屋鋪……………六〇  
飯田町御役屋鋪……………六〇  
市ヶ谷御役屋鋪……………六〇  
六番町御役屋鋪……………六〇  
赤坂御役屋鋪……………六〇  
溜池御役屋鋪……………六三  
御船番所三ヶ所……………六三  
御廐四ヶ所……………六三  
卷之四……………六三  
御曲輪内之二……………六三  
田安殿御館……………六三  
田安殿箱崎御屋鋪……………六三  
駿河大納言藏屋鋪……………六三  
一ッ橋殿御館……………六三  
一ッ橋殿神田橋御館……………六三

一ッ橋殿濱町御屋鋪……………六四  
矢野御藏……………六四  
一ッ橋殿濱御屋鋪……………六四  
清水殿御館……………六四  
清水殿濱町御屋鋪……………六四  
御藏……………六五  
館林殿御館跡……………六五  
御船藏……………六五  
叔藏……………六五  
火除御用地……………六五  
金座役所……………六五  
後藤庄三郎由緒書……………六五  
二代目庄三郎……………六七  
三代目庄三郎……………六七  
文字金鑄造……………六六  
由緒書の附録……………六六  
伊達政宗貳心の風説……………六九  
早生貴子鏡の事……………七一  
忍ヶ岡聖堂創立……………七一  
高瀬船のこと……………七一  
右筆手鑑のこと……………七一  
眞効油藥のこと……………七一

駿州福田寺建立のこと……………七三  
後藤又兵衛のこと……………七三  
後藤家の定紋……………七三  
光次の極印……………七三  
銀座役所……………七三  
銀座の由来……………七三  
銀座由緒書……………七三  
大黒屋常是のこと……………七三  
元手銀のこと……………七三  
伏見及駿府の銀座……………七三  
京都の銀座……………七三  
江戸の銀座……………七三  
大坂の銀座……………七三  
長崎の銀座……………七三  
銀座支配者の沿革……………七三  
銀座の役人……………七三  
秤座……………七四  
秤座に關する禁令……………七四  
守隨秤……………七五  
善四郎秤……………七五  
印貨……………七五  
善四郎秤の西卅五ヶ國……………七五

守隨秤の東卅三ヶ國……………七六  
寛保三年の御觸……………七六  
延享五年の御觸……………七六  
寶曆二年の御觸……………七六  
安永四年の御觸……………七六  
枡座……………七六  
焼印極の枡……………七六  
枡に關する禁令……………七六  
江戸枡を京枡に改む……………七六  
朱座……………七九  
朱座に關する禁令……………七九  
唐朱と琉球朱……………八〇  
卷之五……………八〇  
御曲輪内之三……………八〇  
牢屋鋪……………八一  
牢屋一件記……………八一  
揚り座敷……………八一  
牢屋構造……………八一  
明暦の大火と囚人……………八一  
石出由緒書……………八二  
牢屋の礎……………八二  
牢屋囚人の給與……………八三

與力同心への訓戒……………八三  
牢屋見廻り役……………八四  
人足寄場……………八四  
寄場奉行……………八五  
石川島……………八五  
薦被りのこと……………八五  
長谷川平藏の美擧……………八五  
寄場の規定……………八六  
寄場の費用……………八六  
寄場人足の刑罰……………八六  
浮浪者感化策……………八六  
時鐘……………八七  
鐘役源七の書上……………八七  
西の丸の鐘のこと……………八七  
鐘樓錢……………八八  
御藥園七ヶ所……………八八  
火除植物場……………八八  
姥ヶ原……………八八  
澁江長伯のこと……………八八  
幸大夫・磯吉等がこと……………八九  
植溜原……………八九  
騎射教習場……………八九



明地原三ヶ所	六九
元祿寺	六九
護持院原	六九
番町火除地一ヶ所	六九
人參畑	六九
龜町火除地五ヶ所	六九
天神原	六九
神山火除地八ヶ所	六九
八構明地	六九
馬場九ヶ所	六九
朝鮮馬場	六九
采女原	六九
追廻しの馬場	六九
馬喰町本誓寺	六九
大的場四ヶ所	六九
古蹟	六九
駿河大納言殿御鋪蹟	六九
駿河大納言殿藏屋鋪蹟	六九
紀伊殿御館蹟	六九
水戸殿御館蹟	六九
餌差衆拜領地	六九
水戸殿藏屋鋪蹟	六九
尾張殿御館蹟	九二
尾張殿藏屋鋪蹟	九二
甲府殿御館蹟 竹橋内	九二
甲府殿御館蹟 櫻田	九二
甲府殿藏屋鋪蹟	九二
館林殿御館蹟 平河外	九二
館林殿御館蹟 神田橋内	九二
松平上總介殿屋鋪蹟	九二
松平越後守殿屋鋪蹟	九二
天樹院殿御住居蹟	九二
高田殿御住居蹟	九二
中の丸様御住居蹟	九二
春日局居蹟	九二
英勝院居蹟	九二
雲光院居蹟	九二
國師屋鋪蹟	九二
高倉屋鋪蹟	九二
芝口御門蹟	九二
新橋	九二
御藏蹟 植溜内	九二
御藏蹟	九二
和田藏	九二
御藏蹟 雉子橋外	九六
御藏蹟	九六
御新藏屋鋪	九六
御藏蹟二ヶ所	九六
山伏井戸	九六
矢野御藏	九六
御材木藏蹟	九六
御竹藏蹟	九六
御蔵蹟 吹上矢來	九六
同 西九	九六
同 和田倉	九六
同 清水御門	九六
新馬場蹟	九六
朝鮮人乘馬上覽	九六
八代洲河岸御殿	九六
永田馬場蹟	九六
卷之六	九六
御曲輪内之四	九六
上水	九六
江戸に流るゝ二用水	九六
上水の變遷	九六
青山上水	九六

本所上水	六九
三田上水	六九
千川上水	六九
玉川上水	六九
玉川上水の由來	六九
玉川上水の源	六九
玉川庄右衛門のこと	六九
羽衣堰	六九
時雨堰	六九
玉川上水の助水	六九
狭山池	六九
府中用水	六九
寛文の修工	六九
神田上水	六九
上水の起源	六九
猪頭辨天池	六九
御茶の水	六九
小石川上水	六九
七の井の池	六九
水道橋のこと	六九
神田上水の助水	六九
善福寺池	六九
溜池	一〇一
櫻田池のこと	一〇一
淺草川	一〇一
神田川	一〇一
どんと橋	一〇一
伊達綱宗に掘割を命ず	一〇一
ね茶水に就ての俗傳	一〇一
紅葉川	一〇一
中橋廣小路町	一〇一
神田堀	一〇一
安倍正之の工事	一〇一
八丁堀	一〇一
藥研堀	一〇一
土井堀	一〇一
稻荷堀	一〇一
伊勢町堀	一〇一
牛か淵	一〇一
菰か淵	一〇一
龜井	一〇一
姫か井	一〇一
柳の井	一〇一
封の井	一〇一
空觀法師のこと	一〇三
櫻か井	一〇三
柳井	一〇三
三ツ辻の井	一〇三
龜の井	一〇三
門跡の井	一〇三
山伏井戸	一〇三
讓の井	一〇三
姥か井	一〇三
水屋鋪	一〇三
惠比須の井	一〇三
柳原封疆	一〇三
新封疆 附土手藏蹟	一〇三
土手藏に關する書上	一〇三
町々支配の土手のこと	一〇三
土手藏を瓦葺に改む	一〇三
紀伊國坂	一〇三
霞ヶ關坂	一〇三
潮見坂	一〇三
淡路坂	一〇三
陶山關	一〇三
清水坂	一〇三



清水谷	二〇八
鍋割坂	二〇八
法眼坂	二〇八
宅間法眼と齋藤法眼	二〇八
行人坂	二〇八
法印坂	二〇八
富士見坂	二〇八
梨の木坂	二〇八
三年坂	二〇九
三念寺の舊地	二〇九
切通坂	二〇九
貝坂	二〇九
青松寺の舊地	二〇九
飯田坂	二〇九
九段坂	二〇九
中坂	二〇九
冬青樹坂又橋木坂	二〇九
二合半坂	二〇九
皂角坂	二〇九
淡路坂	二〇九
埃坂	二〇九
光感寺坂	二〇九

甲賀坂	二一〇
觀音坂	二一〇
唐犬坂	二一〇
池田坂	二一〇
善國寺谷	二一〇
鈴振谷	二一〇
樹木谷	二一〇
地獄谷	二一〇
御廐谷	二一〇
道三橋	二一〇
醫師道三のこと	二一〇
錢瓶橋	二一一
錢替橋	二一一
新し橋	二一一
粗橋	二一一
水道橋	二一一
吉祥寺橋	二一一
昌平橋	二一一
相生橋と芋洗橋	二一一
和泉橋	二一一
新し橋	二一一
柳橋	二一一

舊柳橋	二二二
一石橋	二二二
八ッ橋	二二二
日本橋	二二三
日本橋の詩	二二三
日本橋々畔の高札	二二三
日本橋より傳馬駄賃の規定	二二三
切支丹宗門の禁制	二二三
不真賣藥の禁制	二二三
貨幣鑄造の禁制	二二三
買占及徒黨の禁制	二二三
駄賃及人足賃	二二三
火事に關する禁制	二二三
新田取立の獎勵	二二三
放火に關する禁制	二二三
三笠附・匂拾等の禁制	二二三
江戸橋	二二七
京橋	二二七
中ノ橋	二二七
牛草橋	二二七
中ノ橋	二二七
比丘尼橋	二二八

新橋	二一八
涙橋	二一八
潮止橋	二一八
今川橋	二一八
龍閑橋	二一八
甚兵衛橋	二一八
難波橋	二一八
千鳥橋	二一八
海賊橋	二一八
向井將監のこと	二一八
中橋	二一八
小濱橋	二一九
越中橋	二一九
松尾橋	二一九
彈正橋	二一九
眞福寺橋	二一九
眞福寺	二一九
紀伊國橋	二一九
水押橋	二一九
新し橋	二一九
水挽橋	二一九
紅葉橋	二一九

藍染橋	二一九
海帶橋	二一九
六助橋	二一九
伊勢町橋	二一九
堺橋	二一九
親父橋	二二〇
吉原總名主甚右衛門	二二〇
思案橋	二二〇
靈岩橋	二二〇
龜島橋	二二〇
高橋	二二〇
稻荷橋	二二〇
中橋	二二〇
箱崎橋	二二〇
鼠橋	二二〇
永久橋	二二〇
湊橋	二二〇
豊海橋	二二〇
仙臺橋	二二〇
萬年橋	二二〇
二ノ橋	二二〇
三ノ橋	二二〇

合引橋	二二三
輕子橋	二二三
備前橋	二二三
本願寺橋	二二三
境橋	二二三
寒橋	二二三
明石橋	二二三
辨慶橋	二二三
辨慶小左衛門のこと	二二三
卷之七	二二三
御曲輪内之五	二二三
兩國橋	二二三
橋名の由來	二二三
橋畔の賑ひ	二二三
花火のこと	二二三
架橋の沿革	二二三
修復工事のこと	二二三
船渡のこと	二二三
工事入札のこと	二二三
新大橋	二二三
橋名の由來	二二三
架橋の沿革	二二三



わとか淵のこと……………二二七  
 永代橋……………二二九  
 深川の大渡……………二二九  
 永代島……………二二九  
 永代橋取拂と町民の哀願……………二二九  
 修復料と橋賃……………二二〇  
 鎧渡……………二二四  
 頼義の故事……………二二四  
 屋敷地名并里俗小名……………二二四  
 龍の口……………二二四  
 耶楊子河岸……………二二四  
 大名小路……………二二四  
 道三河岸……………二二五  
 櫻田……………二二五  
 日比谷……………二二五  
 有樂原……………二二五  
 采女ヶ原……………二二五  
 築地……………二二五  
 鐵砲洲……………二二五  
 山名河岸……………二二五  
 靈岸島……………二二五  
 箱崎と箱の池……………二二五

濱町……………二二七  
 山伏井戸……………二二七  
 彌穀町……………二二七  
 竈河岸……………二二六  
 土井堀……………二二六  
 稻荷堀……………二二六  
 元矢の倉……………二二六  
 酒井上地……………二二六  
 永井上地……………二二六  
 土屋上地……………二二六  
 藥研堀……………二二六  
 於王ヶ池……………二二六  
 櫻ヶ池……………二二六  
 あひそめの池……………二二六  
 御臺所町……………二二七  
 柳原……………二二七  
 元誓願寺前……………二二七  
 駿河臺……………二二七  
 神田臺……………二二七  
 鈴木町……………二二七  
 甲賀町と甲賀組……………二二七  
 成満寺上地……………二二七

袋町……………二二七  
 仲町……………二二七  
 小川町……………二二七  
 三崎村……………二二七  
 元鷹匠町……………二二六  
 猿樂町……………二二六  
 觀世屋鋪……………二二六  
 御臺所町……………二二六  
 小川町廣小路……………二二六  
 今川小路……………二二六  
 神保小路……………二二六  
 稻荷小路……………二二六  
 飯田町堀留……………二二六  
 御留主居町……………二二六  
 番町……………二二六  
 蛙原……………二二六  
 人參原……………二二六  
 成瀬小路……………二二六  
 清水谷……………二二六  
 元善國寺谷……………二二六  
 貝塚……………二二六  
 永田馬場……………二二六

元山王……………二二五  
 駒井小路……………二二五  
 蝶螺尻……………二二五  
 鶯谷……………二二五  
 霞ヶ關……………二二五  
 溜池……………二二五  
 卷之八……………二二五  
 御曲輪内之六……………二二五  
 町地名并里俗呼名……………二二五  
 下町……………二二五  
 尼店……………二二五  
 高砂新道……………二二五  
 浮世小路……………二二五  
 釘店……………二二五  
 三日河岸……………二二五  
 八軒町……………二二五  
 鹽河岸……………二二五  
 裏河岸……………二二五  
 瓢箪新道……………二二五  
 わかづけ鹽町……………二二五  
 藥師堂前……………二二五  
 花町……………二二五

大門通……………二二五  
 てりふり町……………二二五  
 よし町……………二二五  
 よし町新道……………二二五  
 貝杓子店……………二二五  
 行徳河岸……………二二五  
 多葉粉河岸……………二二五  
 稻荷新道……………二二五  
 人形町……………二二五  
 樂屋新道……………二二五  
 玄治店……………二二五  
 へつゝい河岸……………二二五  
 肴店……………二二五  
 水防請負人……………二二五  
 附木店……………二二五  
 神田……………二二五  
 於玉ヶ池……………二二五  
 人見屋鋪……………二二五  
 けた物店……………二二五  
 道有屋鋪……………二二五  
 藤十郎新道……………二二五  
 餌島助成屋鋪……………二二五

蛤新道……………二二五  
 わかれ新道……………二二五  
 比丘尼町……………二二五  
 もんと河岸……………二二五  
 藥師新道……………二二五  
 不動新道……………二二五  
 やつた町……………二二五  
 馬鞍横町……………二二五  
 かわの新石町……………二二五  
 太神宮前……………二二五  
 板新道……………二二五  
 土物店……………二二五  
 材木河岸……………二二五  
 板新道……………二二五  
 新場……………二二五  
 彌古屋新道……………二二五  
 木原店……………二二五  
 拾九文横町……………二二五  
 式部小路……………二二五  
 樽新道……………二二五  
 三筑長屋……………二二五  
 三會所……………二二五



ごりん町	一四八
木更津河岸	一四八
江戸橋廣小路	一四八
新場	一四九
洞切町	一四九
豆店	一四九
京橋稻荷新道	一四九
桐河岸	一四九
狩野新道	一四九
袋町新道	一五〇
太田屋鋪	一五〇
京橋竹町	一五〇
わら店	一五〇
古着新道	一五〇
稻荷新道	一五〇
横河岸	一五〇
蛤新道	一五〇
銀座	一五〇
花町	一五〇
太刀賣	一五一
觀世新道	一五一
うち町	一五一
古木店	一五二
千川屋鋪	一五二
裏茅場町	一五二
植木長屋	一五二
鍛冶町	一五二
じんぼう小路	一五二
六軒屋鋪	一五二
三代地	一五二
代官屋鋪	一五二
矢場	一五二
わらかし道明横町	一五二
三角屋鋪	一五二
岡崎町大曲り	一五二
中興力町	一五二
片興力町	一五二
近江屋新道	一五二
新屋鋪	一五二
玉子屋新道	一五二
焚出横町	一五二
家根屋町	一五二
石河岸	一五二
北八丁堀	一五二
辨天小路	一五四
八丁堀壽伴屋鋪	一五四
古木店	一五四
内藏丞屋鋪	一五四
鐵砲洲	一五四
矢之倉	一五四
横河原	一五四
稻荷前	一五四
肴店	一五四
御藏前	一五四
新道	一五四
箱崎	一五四
山谷河岸	一五四
靈岸橋繩手	一五四
檜葉河岸	一五四
瓶河岸	一五四
五軒店	一五四
こんにやく島	一五四
北新堀	一五四
圓覺寺屋鋪	一五四
ときや河岸	一五四
勘左衛門屋鋪	一五四

飯田町	一五二
中坂	一五二
もちの木坂	一五二
善國寺谷	一五二
藥師横町	一五二
成瀬横町	一五二
蛤店	一五二
けだ物店	一五二
麴町貝坂	一五二
わら店	一五二
材木店	一五二
だるま門前	一五二
麴町三丁目谷	一五二
同四丁目谷	一五二
清水谷	一五二
三軒谷	一五二
通町通り	一五二
京橋通り	一五二
須田町通り	一五二
本町通り	一五二
横山町通り	一五二
尼店	一五二
安針町	一五三
鐵砲町と千代田村	一五三
小傳馬町と六本木	一五三
藥師堂前と東光院	一五三
照降町のこと	一五三
花町	一五三
西本願寺の舊地	一五三
富澤町と盜賊鳶澤のこと	一五三
元吉原	一五三
吉原の由來	一五三
傾城町の規定	一五三
吉原廓内町名の由來	一五三
杉森稻荷	一五三
淨瑠璃歌舞妓のこと	一五三
芝居由緒書	一五三
つき狂言	一五三
はなれ狂言	一五三
女形の始	一五三
都傳内	一五三
新和泉町と江戸町	一五三
箱崎町と箱の池	一五三
久志本式部と式部小路	一五三
中橋	一六三
桶町	一六三
木挽町	一六三
操芝居	一六三
木挽町に芝居の始	一六三
淨瑠璃座のこと	一六三
繪島一件のこと	一六三
飯田町と飯田喜兵衛	一六三
神田と神田氏	一六三
神田臺	一六三
三河町	一六三
新小田原町	一六三
卷之九	一六三
外神田之一	一六三
佐久間町一丁目	一六三
材木置場	一六三
深川木置場	一六三
岡甫庵	一六三
新町	一六三
平川町代地	一六三
山本町	一六三
御弓屋鋪	一六三



神田柳屋鋪……………一六九  
和泉橋修復……………一六九  
火除地となる……………一七〇  
江戸城材木御用のこと……………一七〇  
材木仲買組の由来……………一七〇  
村岡玄超……………一七〇  
岡丈庵……………一七〇  
材木并薪炭積置方の規定……………一七一  
河岸一坪の上納金……………一七一  
森川五郎右衛門由来……………一七三  
佐久間平八……………一七三  
佐久間町二丁目……………一七三  
關本伯典拜領地……………一七三  
和泉橋以東の御用地……………一七四  
藏地を宅地となす……………一七四  
測量所……………一七五  
醫學館……………一七五  
菜園場……………一七五  
井伊兵部少輔屋鋪……………一七五  
佐竹右京大夫屋鋪……………一七五  
藤堂和泉守屋鋪……………一七六  
冥加上納金……………一七六

河岸物置方の定……………一七七  
千川上水……………一七七  
金剛院……………一七六  
和泉橋……………一七六  
橋火消のこと……………一七九  
佐久間町三丁目……………一八〇  
千賀道榮屋鋪……………一八〇  
菜園場……………一八〇  
佐竹右京大夫中屋鋪……………一八〇  
藤堂和泉守屋鋪……………一八〇  
木屋五郎左衛門……………一八〇  
増山養甫……………一八二  
商ひ物積置き方の定……………一八三  
佐久間町四丁目殘地……………一八三  
本町の來歴……………一八三  
新庄駿河守屋鋪邊……………一八三  
田村安柄……………一八三  
河岸物置の定……………一八四  
佐久間町四丁目元地……………一八四  
本町の來歴……………一八四  
一石橋の修復……………一八五  
村山長古……………一八五

新し橋……………一八六  
千川上水……………一八六  
佐久間町四丁目裏町……………一八六  
名主源太郎……………一八七  
久永屋鋪……………一八七  
其の由来……………一八七  
卷之十……………一八八  
外神田之二……………一八八  
富永町元地……………一八八  
一石橋の修復……………一八九  
千川上水跡……………一八九  
餌鳥屋敷……………一八九  
豊島郷鳥越村……………一八九  
神田八名川町……………一九〇  
餌鳥屋鋪地の由来……………一九〇  
大的場……………一九〇  
藏……………一九〇  
町會所……………一九〇  
餌鳥園置場……………一九〇  
御鷹餌鳥請負人町方え被仰付候起立……………一九一  
御餌鳥御用人……………一九一

小石川餌差町……………一九一  
餌鳥請負に關する觸……………一九一  
古餌鳥請負人……………一九二  
新餌鳥請負人……………一九二  
水島問屋……………一九三  
餌鳥札……………一九四  
餌鳥請負人拜借地……………一九四  
久右衛門町一丁目藏地……………一九四  
同町二丁目藏地……………一九四  
材木置場町屋鋪……………一九五  
深川永代寺の南洲崎……………一九五  
錢座……………一九六  
公役銀にて焚火御免……………一九六  
舊八名川町……………一九七  
慈眼院……………一九七  
八名川町……………一九八  
深川の八名川町……………一九八  
元和頃の地主人名……………一九八  
麵町平河町一丁目代地……………一九八  
豊島郡矢田村……………一九八  
神田郷……………一九八  
眞鍮吹場……………二〇〇

古銅吹方御役所……………二〇〇  
淺川俊宅……………二〇一  
深澤院……………二〇一  
煙草問屋……………二〇一  
柳屋鋪……………二〇一  
卷之十一……………二〇三  
外神田之三……………二〇三  
松永町……………二〇三  
田村圓良屋鋪……………二〇三  
大通・中通・片町……………二〇四  
狩野探信……………二〇四  
狩野墨川……………二〇四  
岡田春賀……………二〇四  
相生町……………二〇四  
宮根河岸……………二〇五  
上野町代地……………二〇五  
上野村……………二〇五  
忍ヶ岡……………二〇五  
五軒屋鋪……………二〇六  
八軒町……………二〇六  
新坂本下町……………二〇六  
下谷車坂町……………二〇六

享保後の藏地……………二〇七  
外神田大通……………二〇七  
東叡山の御給事人……………二〇七  
柳原大門町……………二〇七  
東叡山御門前地……………二〇八  
六軒町……………二〇八  
屏風坂……………二〇八  
神田・下谷・淺草の六軒町……………二〇八  
花房町……………二〇八  
南御番所附上納地……………二〇九  
花房町代地……………二〇九  
藁店……………二〇九  
竹町……………二〇九  
御養生所附上納地……………二〇九  
河岸物置の規定……………二一〇  
河岸地冥加上納金……………二一〇  
新八店庄助……………二一一  
通船屋鋪……………二一一  
見沼通船の船繋場……………二一一  
通船會所……………二一一  
竹町……………二一一  
東叡山物揚場……………二一一



利根川新井路船繋場	三二
見沼通船定請人	三二
手賀沼及見沼の開發	三三
東縁・西縁用水	三三
利根川新井路開通	三三
通船御免	三三
牛込肴町代地	三三
元兵庫町	三三
竹町	三四
牛込袋町代地	三四
福本稻荷	三四
仲町一丁目	三四
筋違橋外請負鋪屋	三五
同御用屋鋪	三五
神田仲町一丁目二丁目目の區分	三五
御養生所御入用金	三五
菓店	三六
廣小路	三六
茶屋町	三六
中通	三六
水野軍人正物揚場	三六
石屋藤兵衛	三七

孝子半七及庄助	三七
仲町二丁目	三九
本多喜十郎屋鋪跡	三九
水野軍人正屋鋪跡	三九
筋違橋外御用屋鋪	三九
茶屋町	三九
仲町三丁目	三九
本多喜之助屋鋪跡	三九
卷之十二	三九
外神田之四	三九
松下町一丁目代地	三九
眞田伊豆守屋鋪跡	三九
酒井石見守屋鋪跡	三九
木村弘徳院	三九
杉本忠温	三九
新地	三九
御成道	三九
松下町二丁目北側代地	三九
岩城但馬守屋鋪跡	三九
新屋鋪	三九
松下町三丁目北側代地	三九
新屋鋪	三九

御能役者の屋鋪	三五
永富町三丁目代地	三五
岩城但馬守屋鋪跡	三五
新屋鋪	三五
御弓師屋鋪	三六
御弓師三輪仁兵衛	三六
八幡長屋	三六
山本町代地	三六
芝新馬場同朋町	三六
町名の由來	三六
新地	三六
町屋鋪拜領人名	三七
御染物屋伊左衛門拜借地	三九
加賀屋伊左衛門のこと	三九
近藤主殿頭屋鋪跡	三九
御成道	三九
小柳町三丁目代地	三九
近藤主殿頭屋鋪跡	三九
下谷に町屋の始め	三九
下谷町	三九
御成道	三九
須田町二丁目代地	三九

御用地の檢地	三三
古名須田のこと	三三
御挑灯屋平兵衛拜領屋鋪	三三
御成道	三三
樽屋三右衛門拜領屋鋪	三三
花房町代地	三三
本町の來歴	三四
御成小路	三四
裏通	三四
新地	三四
南御番所附上納地	三四
旅籠町一丁目	三四
松平加賀守屋鋪跡	三五
御成道・廣小路	三五
能役者寶生太夫	三五
加賀原	三五
東本願寺の舊地	三六
本願寺井又は加賀井	三六
村島越後のこと	三六
娘松ヶ枝のこと	三七
娘龜のこと	三七
娘ふりのこと	三七

神田明神の市	三七
旅籠町二丁目	三七
廣小路	三六
吉川榮左衛門	三六
本願寺井又は加賀井	三六
加賀原	三六
金澤町	三六
松平加賀守屋鋪跡	三六
香店	三六
明石長屋	三六
養生所附上納地	三六
孝子文右衛門	三六
平永町代地	三六
東叡山御門前地	三六
御成道	三六
鼠屋横町	三六
東叡山御用人足	三六
柳原岩井町代地	三六
年頭錢	三六
晦日錢	三六
湯島天神宮祭禮	三六
新地・御成道	三六

柳原岩井町代地拜領屋鋪	三三
安田又五郎	三三
池田瑞仙	三三
湯島聖堂掃除屋鋪代地	三三
湯島聖堂御建立のこと	三三
四ヶ町代地	三三
草市	三三
湯島三丁目代地	三三
神田明神門前町代地	三三
草市	三三
湯島一丁目代地	三三
草市	三三
卷之十三	三三
淺草之一	三三
總説	三三
豊島郡千束郷	三三
古書に見えし淺草	三三
淺草濱	三三
御米藏	三三
藏前通	三三
矢の倉の米藏	三三
感應稻荷	三三



書替所二ヶ所……………二四七  
 手形書替のこと……………二四七  
 御廻米納會所……………二四七  
 札差御改正會所……………二四八  
 札差の起源……………二四八  
 名主利左衛門書上……………二四八  
 札差宿……………二四八  
 札差に關する制令……………二四八  
 利息年一割半のこと……………二四九  
 札差人名……………二四九  
 頒歷調所 又測量所と云……………二五〇  
 天文臺……………二五〇  
 安井算哲……………二五〇  
 貞享曆……………二五〇  
 天文方……………二五〇  
 本朝曆法の由來……………二五〇  
 儀鳳曆……………二五〇  
 大衍曆……………二五〇  
 宣明曆……………二五〇  
 本朝統曆之序……………二五〇  
 賀茂氏と安倍氏……………二五一  
 土御門家……………二五一

幸徳井……………二五一  
 七政曆……………二五一  
 佐々木文次郎……………二五一  
 寶曆甲戌曆……………二五一  
 諸國曆師及賣曆人……………二五二  
 薩州曆……………二五二  
 寫本曆……………二五二  
 澁江長伯御預り藥草植場……………二五二  
 桐苗植付場……………二五二  
 成島邦之丞拜借地……………二五三  
 御用油製所附砂糖製法所蹟……………二五三  
 油御手しほり地所……………二五三  
 錢座……………二五三  
 川船番所……………二五三  
 淺草川……………二五三  
 淺草川の別名……………二五三  
 鎌が淵……………二五三  
 乙が淵……………二五三  
 淺草海苔……………二五三  
 名物白魚……………二五三  
 駒洗川……………二五三  
 思川……………二五三

藍染川……………二五五  
 山谷堀……………二五五  
 新堀……………二五五  
 金藏寺蹟……………二五五  
 慶善寺蹟……………二五五  
 西福寺蹟……………二五五  
 東國寺蹟……………二五五  
 新堀端……………二五五  
 石神井用水……………二五五  
 鏡が池……………二五五  
 涙が池……………二五五  
 達磨が池……………二五五  
 眞珠庵抱屋鋪……………二五五  
 柳の井……………二五五  
 廻池……………二五五  
 石枕のこと……………二五五  
 待乳山……………二五五  
 亦打山……………二五五  
 眞土山……………二五五  
 金龍山……………二五五  
 日本堤……………二五五  
 八丁繩手……………二五五

淺茅ヶ原……………二五七  
 妙龜塚……………二五七  
 蛇塚……………二五七  
 御鹿河岸渡……………二五七  
 文珠院渡……………二五七  
 竹町渡……………二五七  
 花方の渡……………二五七  
 業平渡……………二五七  
 橋場渡……………二五七  
 古の隅田渡……………二五七  
 大川橋……………二五七  
 東橋……………二五七  
 制札……………二五七  
 大川橋渡錢の規定……………二五七  
 柳橋……………二五七  
 鳥越橋……………二五七  
 稻荷橋……………二五七  
 甚内橋……………二五七  
 向坂甚内のこと……………二五七  
 東西兩刑罪場……………二五七  
 瘡病必治の迷信……………二五七  
 甚内の略傳……………二五七

日本三甚内……………二六一  
 甚内と新吉原……………二六一  
 今戸橋……………二六一  
 新鳥越橋……………二六一  
 堀田原……………二六一  
 名主黒右衛門書上……………二六一  
 堀田原御預りの町名……………二六一  
 大的場……………二六一  
 馬場……………二六一  
 淺草寺馬場……………二六一  
 僧正が馬場……………二六一  
 水稽古小屋場……………二六一  
 水練上覽のこと……………二六一  
 千住街道……………二六一  
 奥州の古道……………二六一  
 石濱城蹟……………二六一  
 橋場總泉寺……………二六一  
 千葉氏の舊城……………二六一  
 千葉塚……………二六一  
 錢座蹟……………二六一  
 寛永通寶……………二六一  
 銅吹座蹟……………二六一

淺草の銀座役所……………二六一  
 刑罪場跡……………二六一  
 西方寺……………二六一  
 土手の道哲のこと……………二六一  
 黒船番屋蹟……………二六一  
 船長宿のこと……………二六一  
 御鹿蹟……………二六一  
 荒波馬頭觀音……………二六一  
 三十三間堂跡……………二六一  
 堂前……………二六一  
 砂利取場跡……………二六一  
 一里塚跡……………二六一  
 小出信濃守屋鋪……………二六一  
 馬場跡 附南部馬市……………二六一  
 藪の内……………二六一  
 南部馬宿……………二六一  
 屋鋪地名并里俗小名……………二六一  
 鳥越のこと……………二六一  
 三筋町……………二六一  
 袋町……………二六一  
 堀田原……………二六一  
 新寺町……………二六一



挑灯長屋	二六九
玉長屋	二六九
卷之十四	二六九
淺草之二	二六九
平右衛門町	二六九
町名の由來	二六九
鳥越村	二六九
石切河岸	二七〇
神田川	二七〇
山本壽仙	二七〇
柳橋	二七〇
出口の橋	二七〇
福井町物揚場	二七〇
八丈島物揚場	二七一
河岸の御高札	二七一
千川上水	二七一
第六天神門前	二七三
第六天神宮	二七三
森田町	二七三
福井町一丁目・二丁目・三丁目	二七三
松平千次郎屋鋪跡	二七三
中・北・西場所	二七三
丸岡町	二七三
銀杏町	二七三
孝子利兵衛	二七三
茅町一丁目	二七三
鳥越村茅原の里	二七三
御用石置場	二七四
河岸の御高札	二七四
繪馬商日高屋	二七四
茅商賣地	二七四
三社權現	二七五
茅町二丁目	二七五
雛人形市	二七五
菖蒲人形市	二七五
茅町一丁目代地	二七五
松平市正屋鋪跡	二七五
森田町代地	二七六
犬塚榮雲	二七六
稻荷長屋	二七六
御藏前片町代地	二七六
栗本瑞見	二七六
土生玄積	二七六
旅籠町一丁目代地	二七六
鳥越村	二七七
中代地・大代地	二七七
旅籠町二丁目代地	二七七
大代地	二七七
寶玉院	二七七
天王町代地	二七七
天王社	二七七
鳥越村	二七九
鳥越橋の修覆	二八〇
花徳院	二八〇
菜園場	二八〇
楮植付場	二八〇
桐木植付場	二八〇
天王橋	二八〇
明地の高札	二八一
新鳥越橋	二八一
芝御掃除屋鋪代地	二八一
猿屋町	二八二
猿屋加賀美大夫	二八二
加賀美稻荷	二八二
本多長門守屋鋪跡	二八二
戸田淡路守屋鋪跡	二八三

御廻米會所	二八二
札差御改正會所	二八三
舊家西之助	二八三
福富町一丁目	二八三
本多肥後守屋鋪跡	二八三
織田伊賀守屋鋪跡	二八三
御藏前片町	二八四
鳥越橋の修覆	二八四
御門前橋	二八五
猿屋町會所附地所床店	二八五
地所取締役	二八五
淺草元鳥越町名主文二郎助成拜	二八五
借地御藏土手側見守商番屋	二八五
淺草之三	二八六
森田町	二八六
第六天神宮	二八六
松平市正屋鋪跡	二八六
甘蔗植付場	二八七
桐苗植付場	二八七
草履・草鞋の商番屋	二八七
塗り屋造り	二八七
第六天神宮の宮元	二八八
新旅籠町	二八八
一の橋	二八八
元旅籠町一丁目	二八九
柳澤甲斐守屋鋪跡	二八九
居合拔永井兵助	二八九
元旅籠町二丁目	二九〇
飼鳥屋七郎右衛門	二九〇
小石川富坂町代地	二九一
堀田加賀守屋鋪跡	二九一
福富町二丁目	二九二
大護院門前	二九二
高野山奥山寺上り地	二九二
三好町	二九三
堀田出羽守屋鋪跡	二九三
藍草請負人	二九三
楮・桐植付場	二九三
御蔵河岸	二九三
御蔵河岸の渡	二九三
渡船場の高札	二九四
正覺寺門前	二九四
榎寺	二九四
黑船町	二九四
石濱庄新町村	二九四
黑船稻荷	二九五
三好町	二九五
泉住寺跡	二九五
家康唐船を作ること	二九五
黒船町續高麗屋鋪	二九五
醫師高麗雲祥	二九六
天王町上ヶ地	二九六
堀田相模守屋鋪跡	二九六
新旅籠町代地	二九六
堀田相模守屋鋪跡	二九六
堀田原	二九七
太秦石燈籠の由來	二九七
元鳥越町新地	二九八
堀田相模守屋鋪跡	二九八
石濱庄新町村	二九八
孝子孝吉	二九九
猿屋町代地	三〇〇
石濱庄鳥越郷	三〇〇
御繪師狩野洞壽・伯壽	三〇一
卷之十六	三〇一



淺草之四	三〇一
諏訪町	三〇一
諏訪社	三〇一
淺草寺領	三〇一
吉田梅庵	三〇一
銀座御役所	三〇一
赤松休庵	三〇一
黒船番屋跡	三〇一
松次郎屋跡	三〇一
淺草川の高札	三〇一
孝女げん	三〇一
淺草川殺生禁斷の札	三〇一
陸尺屋跡	三〇一
人參屋伊兵衛	三〇一
朝鮮長屋	三〇一
三好町代地	三〇一
黒船町代地	三〇一
佐渡屋長屋	三〇一
御掃除屋跡	三〇一
堀田出羽守屋跡	三〇一
吹上御庭方拜領屋跡	三〇一
眞砂町	三〇一
大圓寺跡	三〇六
眞砂稻荷	三〇六
森下	三〇六
三島西藏院門前	三〇六
三島神社	三〇六
福川町	三〇六
三間町	三〇六
淺草寺年貢地	三〇六
御行長屋	三〇六
孝子市郎左衛門	三〇六
善行者質屋傳六	三〇六
駒形町	三〇六
馬頭觀音堂	三〇六
駒形清水	三〇六
八軒町	三〇六
谷中町の引地	三〇六
岩淵領	三〇六
淺草清水稻荷屋跡	三〇六
清水稻荷の由來	三〇六
清水谷	三〇六
田原町	三〇六
桐切長屋	三〇六
竈横町	三〇七
茶屋町	三〇七
源水横町	三〇七
蛇骨長屋	三〇七
忠婢そめ	三〇七
習合神道派	三〇七
御免繪馬札	三〇七
淺草三社權現祭禮	三〇七
天下乞	三〇七
觀音市	三〇七
稻荷社	三〇七
神事舞太夫由緒	三〇七
神事舞太夫由來	三〇七
淺草觀音大工の由來	三〇七
齒磨賣松井源水	三〇七
こまの曲上覽	三〇七
淺草紙	三〇七
西仲町	三〇七
中畑	三〇七
竈横町	三〇七
大佛横町	三〇七
古着店	三〇七

名主關口吉左衛門由緒書	三三六
東仲町	三三八
東中畑村	三三八
廣小路	三三八
杵屋横町	三三八
常陸屋横町	三三八
滿願寺長屋	三三九
惠比須長屋	三三九
名主喜平次	三三九
目川菜飯	三三九
黒もじの楊枝	三三九
淺草寺裏門先番屋跡	三三九
並木町	三三九
大佛横町	三三九
名主鈴木伊兵衛	三三九
繪馬屋	三三九
造花師	三三九
造花上覽	三三九
茶屋町	三三九
町名の由來	三三九
廣小路	三三九
諸茶屋人の書上	三三九
淺草海苔屋	三三一
揚枝屋	三三一
酒屋	三三一
淺草海苔由來記	三三一
益木が瀬	三三一
品川海苔と淺草海苔	三三一
隅田川諸白	三三一
材木町	三三一
小濱宿	三三一
竹町	三三一
花方の渡	三三一
淺草寺三譜代の一	三三一
勝田社	三三一
連れ念佛の彌陀	三三一
孝子市太郎	三三一
卷之十七	三三一
淺草之五	三三一
花川戸町	三三一
一の郷峽田領	三三一
戸澤長屋	三三一
菱屋長屋	三三一
江原の社	三三一
孝女なか	三三九
六地藏の石燈籠	三三九
淺草寺地中三拾四ヶ院貸地町	三三九
屋	三三九
孝子直次郎	三三九
南馬道町	三三九
櫃親と櫃子	三三九
役見世	三三九
あく抜き蕎麥	三三九
馬道の由來	三三九
中谷惣門跡	三三九
南馬道新町	三三九
辨天横町	三三九
金龍山淺草餅	三三九
賣藥錦袋圍	三三九
辨天山下新町	三三九
辨天池	三三九
北馬道町	三三九
僧正ヶ馬場	三三九
北谷	三三九
淺草寺地中金剛院門前	三三九
淺草寺地中吉祥院門前	三三九



四ヶ院門前……………三三九  
 淺草寺地中德應院門前……………三三九  
 淺草寺地中延命院門前……………三三九  
 淺草寺地中誠心院門前……………三三九  
 醫王院門前……………三四〇  
 齊頭門前……………三四〇  
 淺草觀音三譜代の一……………三四〇  
 常音門前……………三四〇  
 淺草觀音三譜代の一……………三四〇  
 山之宿町……………三四一  
 一の郷……………三四一  
 藪の内……………三四一  
 三田社……………三四一  
 山之宿六軒町……………三四二  
 金龍山下五町……………三四二  
 瓦焼の舊蹟……………三四二  
 淺草川の高札……………三四二  
 孝子七右衛門……………三四三  
 山川町……………三四三  
 山谷堀……………三四三  
 聖天町……………三四三  
 聖天宮……………三四三

名主作左衛門……………三四四  
 谷中感應寺門前淺草山川町……………三四四  
 砂利取場……………三四四  
 埋堀……………三四四  
 淺草寺割殘屋鋪……………三四四  
 田町二丁目附元田町裏屋鋪……………三四四  
 砂利場……………三四五  
 竹門……………三四五  
 孔雀長屋……………三四五  
 孔雀不動……………三四五  
 網笠茶屋……………三四五  
 義人半兵衛……………三四六  
 往時の田町……………三四六  
 田町・花川戸・山之宿村取替證文……………三四六  
 田町家作御免の訴狀……………三四八  
 小石場……………三四九  
 田町の類焼と町屋引移……………三四九  
 獅子舞六人屋鋪……………三五〇  
 卷之十八……………三五〇  
 淺草之六……………三五〇  
 元鳥越町……………三五〇

鳥越村……………三五三  
 鳥越明神の舊地……………三五三  
 本鳥越町……………三五三  
 鳥越の由來……………三五三  
 白鳥大明神を鳥越大明神と改む……………三五三  
 書替所跡……………三五三  
 淨雲寺……………三五三  
 本立寺……………三五四  
 慶長頃の刑罪場……………三五四  
 葛野入江……………三五四  
 扇ヶ島……………三五四  
 三筋町……………三五四  
 玄阿彌長屋……………三五四  
 萬屋長屋……………三五四  
 甚内橋……………三五四  
 鳥越三所明神……………三五五  
 元鳥越明神門前……………三五五  
 元鳥越長樂寺門前……………三五五  
 壽松院門前……………三五六  
 松平阿波守屋鋪……………三五六  
 さん町……………三五七

最初の雜穀商……………三五七  
 柳原雁淵……………三五七  
 元鳥越町續書替所跡町屋……………三五八  
 淨念寺門前……………三五八  
 小揚町……………三五八  
 淨念寺橋……………三五八  
 東漸寺門前……………三五八  
 神田芝崎……………三五八  
 藥師門前……………三五八  
 藥師橋……………三五九  
 龍寶寺門前……………三五九  
 天台龍寶寺……………三五九  
 抹香橋……………三五九  
 善照寺門前……………三五九  
 新寺町……………三五九  
 龍寶寺門前……………三五九  
 淨土龍寶寺……………三五九  
 三の橋……………三五九  
 こし屋橋……………三五九  
 常福寺門前……………三六〇  
 新堀端……………三六〇  
 組合橋……………三六〇

山本屋鋪……………三六〇  
 金六屋鋪……………三六〇  
 山本屋鋪の由來……………三六〇  
 蝦夷地御用達田中金六門跡前……………三六〇  
 菊屋橋……………三六一  
 實相寺門前……………三六一  
 本法寺門前……………三六一  
 海潮院跡……………三六一  
 門跡前……………三六一  
 桃林寺門前……………三六一  
 元沼の埋立地……………三六一  
 森下……………三六一  
 金龍寺門前……………三六一  
 森下……………三六一  
 高厚屋鋪……………三六二  
 茶碗燒物釜場跡……………三六二  
 門跡前……………三六二  
 大松寺門前……………三六二  
 田原町……………三六二  
 清光寺門前……………三六三  
 駿州田中領……………三六三

田原町……………三六三  
 誓願寺門前……………三六三  
 町の來歴……………三六三  
 地子町屋……………三六三  
 役銀……………三六三  
 北寺町……………三六三  
 名主半三郎……………三六三  
 日輪寺門前……………三六四  
 北寺町……………三六四  
 東光院門前……………三六四  
 阿部川町……………三六四  
 町内の小名……………三六五  
 こしや橋……………三六五  
 町屋鋪拜領人名……………三六五  
 孫三稻荷……………三六七  
 孝子鏡之助・市藏……………三六八  
 正行寺門前……………三六八  
 新堀端新寺町……………三六八  
 きくや橋……………三六八  
 本立寺門前……………三六八  
 新寺町……………三六八  
 正覺寺門前……………三六八



新寺町……………三六九  
成就院門前……………三六九  
卷之十九……………三六九  
淺草之七……………三六九  
龍福院門前……………三六九  
了源寺門前……………三六九  
片町……………三七〇  
觀藏院門前……………三七〇  
延命院門前……………三七〇  
大乘院門前……………三七〇  
萬福寺門前……………三七一  
柳稻荷横町……………三七一  
柳稻荷……………三七一  
正福院門前……………三七一  
野寺町……………三七一  
新光明寺門前……………三七一  
誓教寺門前……………三七一  
善慶寺門前……………三七一  
妙福寺門前……………三七一  
蓮光寺門前……………三七一  
孝女やゑ……………三七一  
吉祥院門前……………三七一

榮藏寺門前……………三七三  
等覺寺門前……………三七三  
六軒町……………三七四  
代地三ヶ所……………三七四  
東叡山領……………三七四  
上野關山堂掃除人……………三七四  
屏風坂御門の番人……………三七四  
蓮妙寺門前……………三七五  
法泉寺門前……………三七五  
觀音院門前……………三七五  
古・新・裏門前……………三七五  
欣淨寺門前……………三七六  
華藏院門前……………三七六  
七軒町……………三七六  
西照寺門前……………三七六  
下谷稻荷町……………三七六  
正安寺門前……………三七六  
西光寺門前……………三七七  
法福寺門前……………三七七  
東岳寺門前……………三七七  
滿泉寺門前……………三七七  
廣大寺門前……………三七七

玉泉寺門前……………三七八  
本藏寺門前……………三七八  
東國寺門前……………三七八  
行安寺門前……………三七九  
新堀川……………三七九  
菊屋橋……………三七九  
專光寺門前……………三七八  
宗安寺門前……………三七八  
淺留町……………三七八  
古は沼地……………三七八  
三十三間堂舊地……………三七八  
堂前の由來……………三七八  
朝鮮使來朝の時御用地……………三七八  
坂本町……………三七八  
東叡山領……………三七八  
三十三間堂前……………三七八  
正定寺門前……………三七八  
堂前……………三七八  
松源寺門前……………三七八  
三十三間堂前……………三七八  
龍光寺門前……………三七八  
三十三間堂の別當……………三七八

通立寺門前……………三六三  
三十三間堂前……………三六三  
光感寺門前……………三六三  
源空寺門前……………三六四  
湯島村……………三六四  
燈明寺門前……………三六四  
燈明寺店……………三六四  
幡隨院門前……………三六四  
役錢……………三六四  
新島越町……………三六四  
紙洗橋……………三六五  
御傳板取締役……………三六五  
名主兵藏……………三六五  
山谷町……………三六五  
重箱長屋……………三六六  
水汲横町……………三六六  
山谷田中……………三六六  
山谷東禪寺門前……………三六六  
四大工屋鋪……………三六六  
四大工町の由來……………三六六  
山谷淺草町……………三六六  
當町の來歴……………三六七

小荷駄馬士御定杭……………三六七  
今戸町……………三六七  
今戸村……………三六七  
子新田……………三六七  
合の道……………三六七  
今戸橋……………三六七  
中河岸……………三六八  
本性寺前……………三六八  
荒川見廻役……………三六八  
土風呂燒師……………三六八  
燒物上覽……………三六八  
橋場町……………三六八  
石濱庄峽田領……………三六八  
砂尾……………三六八  
千束分古新田……………三六八  
淺茅長屋……………三六九  
山谷續屋鋪……………三六九  
紅葉屋鋪……………三六九  
油御手まぼり所……………三六九  
砂糖製法所……………三六九  
橋場……………三六九  
石濱……………三六九

卷之二十……………三九三  
淺草之八……………三九三  
淺草溜……………三九三  
車善七の書上……………三九三  
溜の増築……………三九三  
囚人の定食……………三九三  
囚徒一人の雜用……………三九三  
溜一件の記録……………三九五  
牢舎内の模様……………三九五  
車善七小屋……………三九六  
善七の先祖……………三九六  
善七の傳……………三九六  
善七家康を刺さんとす……………三九七  
新町……………三九八  
機多頭彈左衛門の宅地……………三九八  
彈左衛門由緒書……………三九八  
長吏と機多の論……………三九九  
猿引……………三九九  
彈左衛門の出したる古證文……………四〇〇  
板目皮……………四〇一  
鹿の皮……………四〇一  
白皮……………四〇三



さひかは	四〇三
彈左衛門の格式に関する願書	四〇三
猿曳上覽	四〇二
御役目相勤の覺	四〇三
八幡宮の掃除役	四〇四
彈左衛門先祖武虎のこと	四〇四
新吉原町	四〇五
新吉原町由緒	四〇五
慶長頃の傾城町	四〇五
庄司甚右衛門願上三ヶ條	四〇六
廓内禁令の五ヶ條	四〇七
きみがて	四〇八
葎原を吉原と改む	四〇八
江戸町一丁目	四〇八
江戸町二丁目	四〇八
京町一丁目	四〇八
京町二丁目	四〇八
角町	四〇八
新吉原の開設	四〇九
明曆大火後の建替	四〇九
五十間道	四〇九
衣紋坂	四〇九
元吉原	四一九
揚屋町	四一九
境町	四二〇
伏見町及其來由	四二〇
大門口の高札	四二〇
五十間道の書上	四二二
新島越橋修葺のこと	四二二
卷之二十一	四二二
下谷之一	四二二
總説	四二二
下谷岡	四二二
下谷菅野	四二二
往古の形勢	四二二
醫學館	四二三
測量所蹟地	四二三
設立の趣旨	四二三
再興寄附の勧誘	四二三
醫學教育條令	四二三
醫學館教科書	四二三
寄宿舎規定	四二四
罰則	四二四
寄附に付ての願書	四二五
醫學館の公開	四二五
醫業試験の開始	四二六
醫術研究の獎勵	四二六
叔藏	四二六
積金取立會所	四二六
不忍池	四二六
池の名の由來	四二七
代山村	四二七
廣澤	四二七
根岸	四二七
天の祠	四二七
忍ヶ池	四二七
忍川	四二七
三味線堀	四二八
不忍池の遺蹟	四二八
幡隨院舊井	四二八
妙龍水	四二八
鏡ヶ井	四二八
長井堤	四二八
長井庄	四二八
姫塚	四二八
無縁坂	四二八

三橋	四一八
一枚橋	四一八
三枚橋	四一九
三味橋	四一九
高水道	四一九
三枚橋と三橋との辨	四一九
石橋	四一九
代官橋	四一九
寛橋	四一九
高橋	四一九
天神橋	四一九
山下火除明地	四一九
屋鋪地名并里俗小名	四二〇
向柳原	四二〇
新屋鋪	四二〇
中の町	四二〇
新島見町	四二〇
練堀小路	四二〇
久保町	四二〇
二丁町	四二〇
竹門	四二〇
七軒町	四二一
御掃除町	四二二
菓店	四二二
車坂	四二二
蓮池組	四二二
竹町	四二二
五軒町	四二二
池の端	四二二
御成道	四二二
和泉橋通り	四二二
新し橋通り	四二二
湯島天神石坂下通	四二二
廣徳寺通り	四二二
根岸	四二二
上野	四二二
小野篁旅館上野殿	四二二
藤堂家屋鋪蹟	四二二
忍ヶ岡	四二二
忍の森	四二二
小田原役帳に見えし上野	四二二
二羽村	四二二
忍ヶ岡	四二二
古歌に見えし忍ヶ岡	四二二
忍岡城蹟	四二三
上杉扇谷の持城	四二三
忍の森	四二三
聖堂蹟	四二三
道春門	四二三
武州先聖殿記	四二三
武州州學十二景の詩	四二三
卷之二十二	四二四
下谷之二	四二四
下谷町一丁目	四二四
上野御用人足	四二六
竹町	四二七
博奕の爲地所を取上げらる	四二七
寛橋	四二七
千川上水	四二七
下谷長者町續下谷町一丁目代地	四二七
屏風坂下下谷町二丁目代地	四二七
下谷町二丁目	四二八
下谷村	四二八
上野御火除地	四二八
竹町	四二八
山王下	四二八



生池院店	四六
挑灯店	四六
田村長屋	四六
くらやみ横町	四六
佛店	四六
車坂	四六
千川上水	四六
香具渡世竹澤藤司	四六
正法院門前	四六
下谷村	四六
瀬川屋敷	四六
連歌師瀬川昌惇	四六
上野山下庇床請負場所	四六
火除御用地	四六
長者町續車坂町	四六
新坂本下町	四六
上野御用人足	四六
千川上水の水鏡	四六
屏風坂下車坂町	四六
御具足所	四六
御切手所	四六
上野御木具師	四六
柴田山城	四三
上野御執御用達清右衛門	四三
寺町通り車坂町	四三
上野御用人足	四三
土井周防守屋鋪跡	四三
上車坂町	四三
淺草新寺町通車坂町	四三
新坂本下町	四三
上野御用人足	四三
下車坂町	四三
六軒町	四三
屏風坂御門役屋鋪	四三
辻番屋鋪	四三
古は沼地	四三
西町	四三
藁店	四三
埋堀	四三
辻番所請負人拜借地	四三
辻番所設立の由來	四三
山川町	四三
稻荷町一丁目	四三
御給金辻番	四三
小島町	四七
小島町起立の一説	四七
觀世四郎拜領地	四七
殘橋	四七
抹香橋	四七
御門跡西門橋	四七
紙屋橋	四七
清水寺橋	四七
下谷七軒町	四七
唯念寺門前	四七
稻荷町一丁目	四七
成就院門前	四七
稻荷町	四七
大工屋鋪	四七
當町開發のこと	四七
稻荷町	四七
藁店	四七
五十嵐横町	四七
町醫柳山氏の家譜	四七
大工屋鋪拜領の次第	四七
宗源寺門前	四七
下谷稻荷町	四七

西蓮寺門前	四三
高岩寺門前	四三
千住宿傳馬助郷	四三
御鷹御用	四三
東叡山御宮神人拜領屋鋪	四三
元は寒松院持	四三
佐藤丹波	四三
屏風坂下町	四三
元下谷村	四三
恩地鹿島のこと	四三
御具足町	四三
御具足同心町屋	四三
卷之二十三	四三
下谷之三	四三
山崎町一丁目	四三
元黒鉄町	四三
拜領地主人名	四三
乞胸頭仁太夫書上	四三
遊藝の種類	四三
遊藝の鑑札	四三
山崎町二丁目	四三
元黒鉄町	四三
拜領地主人名	四一
鞍馬方大藏院配下書上	四一
山伏町	四一
牛込山伏町の代地	四一
拜領地主人名	四一
新坂本町	四一
元廣澤村	四一
二葉郷と上野郷	四一
御切手町	四一
御切手同心拜領地	四一
拜領地主人名	四一
貞女こゝ	四一
善養寺門前	四一
坂本町壹丁目	四一
元廣澤村	四一
古圖に見えし坂本町	四一
深川坂本代地町	四一
政右衛門横町	四一
二葉郷と上野郷	四一
名主二葉傳次郎	四一
二葉山萬光寺	四一
二葉牛房	四一
坂本町貳丁目	四一
二葉郷と上野郷	四一
元廣澤村	四一
本庄内記	四一
坂本町四丁目	四一
嶺松院門前	四一
小野照崎明神	四一
御簞笥町	四一
拜領地主人名	四一
坂本裏町	四一
元廣澤村	四一
眞成院	四一
金杉上町	四一
東叡山御料	四一
萬徳寺	四一
三島明神	四一
名主勝田次郎左衛門	四一
金杉下町	四一
王子用水	四一
龍泉寺町	四一
大音寺前	四一



東叡山御料	四七七
忠婢はる	四七七
三之輪町	四七六
芋洗	四七六
梅ヶ小路	四七六
永久寺	四七六
忠僕三之助	四七六
藥王寺門前	四七六
通新町	四七六
元小塚原新町	四七六
眞養寺	四七六
東西裏屋敷	四七六
庚申横町	四七六
天神山	四七六
拜領地主人名	四七六
日無盡	四七六
荒木田庄	四七六
眞正寺門前	四七六
荒木田庄	四七六
卷之二十四	四七六
下谷之四	四七六
上野仁王門前町	四七六
袴腰	四七〇
池之端	四七〇
拜領屋鋪井人名	四七〇
上野山内廻り役	四七一
深秘職	四七二
仁王門前上野御家來屋鋪	四七三
拜領町屋鋪人名	四七三
黒門前上野役人屋鋪	四七三
竹町	四七三
上野町一丁目・二丁目	四七三
上野村	四七三
二羽村	四七三
五軒屋鋪	四七三
肴店	四七四
忍川	四七四
寛橋	四七四
下谷三枚橋	四七四
眞養寺跡	四七四
名主源八	四七五
二羽稻荷	四七五
同朋町	四七五
御坊主拜領屋鋪	四七五
正行寺店	四七六
上野南大門町	四七六
長者町一丁目	四七六
長者町二丁目	四七七
下谷岡	四七七
下谷長者	四七七
朝日長者永昌	四七六
上野御家來屋鋪	四七六
上野新黒門町	四七六
人參商賣	四七九
上野北大門町	四七九
上野廣小路	四八〇
板屋長屋	四八〇
名主權左衛門	四八〇
孝子四郎兵衛	四八一
常樂院門前	四八一
六阿彌陀横町	四八一
寛橋	四八一
上野元黒門町	四八一
忍川	四八二
三橋	四八二
非常道	四八二

名主助左衛門	四八三
菓子屋耆荷屋肥後	四八三
御數寄屋町	四八三
拜領屋鋪人名	四八三
湯島天神下同朋町	四八五
拜領屋鋪人名	四八五
蛸薬師堂蹟	四八六
池之端仲町	四八六
福成寺	四八六
吹貫	四八七
名主七兵衛	四八七
勸學屋大助由緒書	四八七
勸成先御用商人書上	四八八
茅町一丁目	四八八
町名の由來	四八九
教證寺	四八九
茅町二丁目	四八九
宗善寺	四八九
寶姓院	四八九
境稻荷社	四九〇
孝子富次郎	四九〇
名主次郎兵衛	四九〇
永昌院門前	四九〇
淨圓寺門前	四九〇
覺性寺門前	四九一
東瀨寺門前	四九一
正慶寺門前	四九一
池之端七軒町	四九二
町名の由來	四九二
地震火事と云ふこと	四九二
榎坂	四九二
秋葉横町	四九二
須山店の由來	四九三
名主仁右衛門	四九四
松平淡路守屋鋪	四九四
松平備後守屋鋪	四九五
池之端七軒町横町	四九五
御數寄屋御露次の衆拜領地	四九五

御府内備考 自卷之廿一細目終

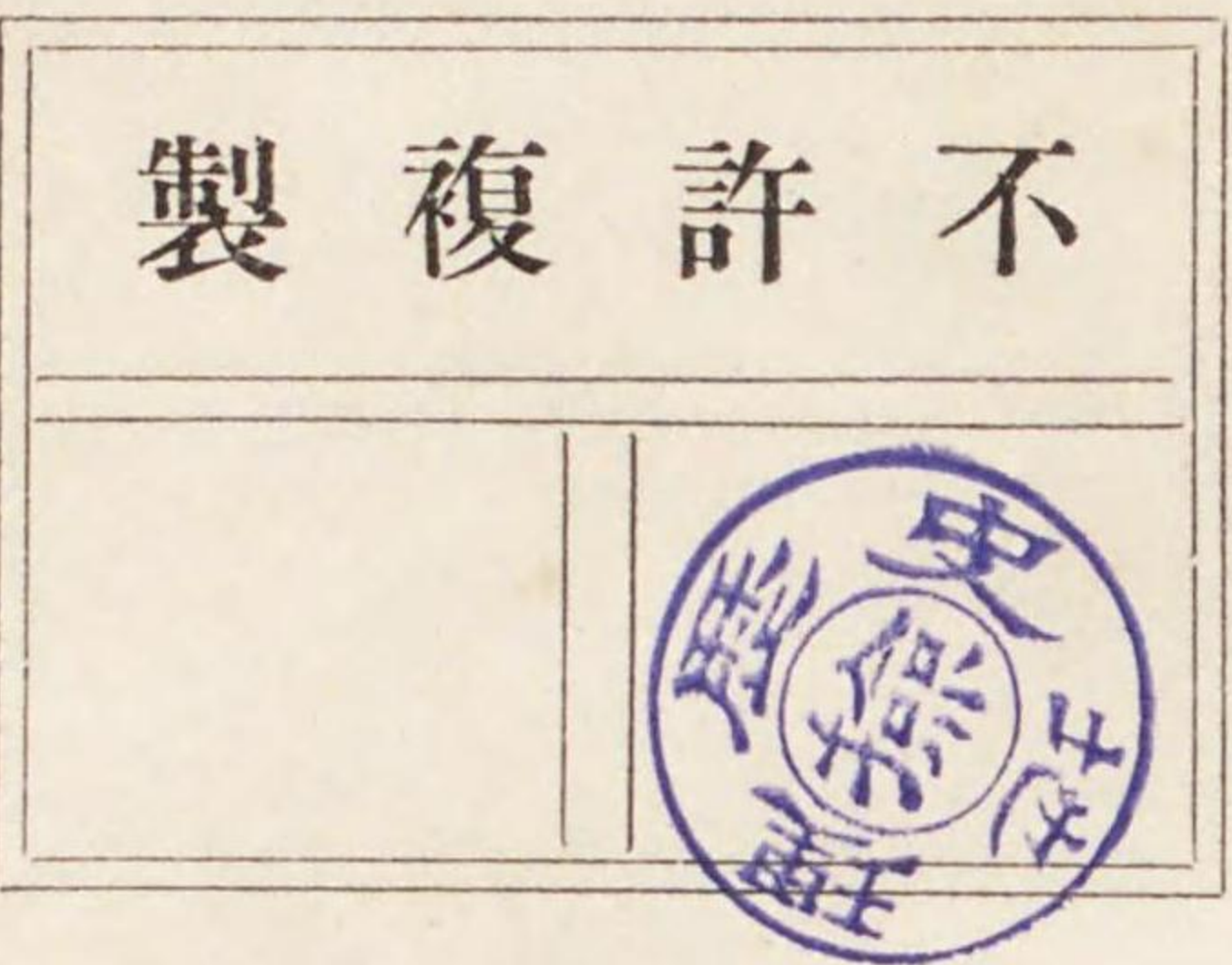


大正三年九月十三日印刷  
大正三年九月十八日發行

大日本地誌大系第一冊 非賣品  
御府内備考 壹

### 日本歷史地理學會校訂

編輯者 山下 半次  
發行者 小川 琢三  
印刷者 渡邊 八太郎  
印刷所 日清印刷株式會社  
東京市神田區駿河臺北甲賀町十番地  
東京市牛込區榎町七番地  
東京市牛込區榎町七番地



## 發行所

東京市神田區駿河臺北甲賀町十番地  
大日本地誌大系刊行會  
振替口座東京 一七六二番



1414



日本製紙株式会社

東京市千代田区

